

1

心の守護神

Miracles!

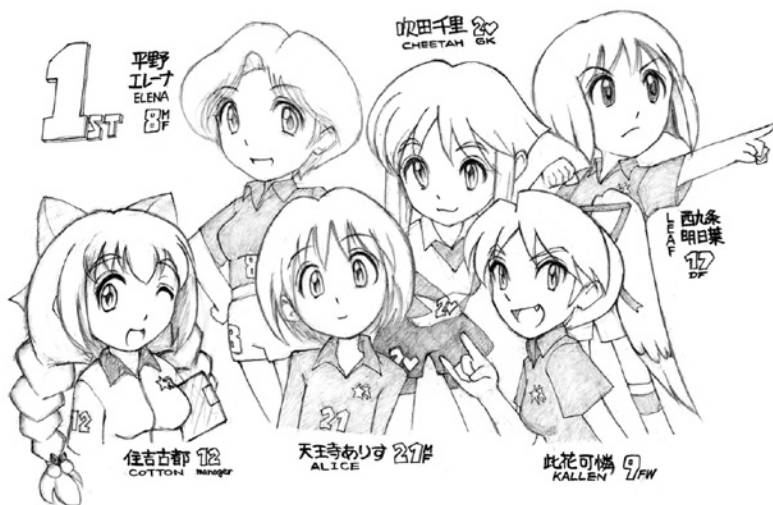
ミラクルズ

ながたかずひさ

Miracles!

Episode 1

- 心の守護神 -



■あらすじでござる

女子サッカークラブ「ミラクルズ」は、とある街の人気者。高校1年から3年までの一六人+マネージャーが、超色男（ただし自覚なし）コーチに率いられ、楽しく激しく恋に笑いに涙に人生にそしてサッカーに勤しんでおります。

ただいまの目標は、毎年お正月に行われる日本最大のオープン大会「クイーンズカップ」への出場、そして夢はどうか、優勝です！

はてさて今回は、どんな騒動が巻き起こりますことやら。

■目次

失点

忍

G K

父と娘

技と心

包囲網

守護神

仕掛け

【本日の主演】

守口忍（もりぐち・しのぶ）G K 1

3年生。時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。不屈の守護神。父は古武術研究家、自身も師範代。

【ミラクルズ・メンバー】

「3年生」

梅田もも（うめだ・もも）D F 4 3年

B三桁のだいまないとばでーを揺すぶりながらピッチを駆けるフェアプレー・D Fリーダー。森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ／くー）F W 14

クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。高々度戦闘爆撃セクターF W。

八尾由美子（やお・ゆみこ／ユミ姉）M F 16

頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝っ玉は天下一品。守備職人、M F・D F。

マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きしわだ／P K）M F 19

ブラジル人日系4世留学生。誰にも止められないだんじりサンバ娘。トリッキークーイング。

「2年生」

長居美緒（ながい・みお／みー）M F 10 (c)

一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。パーフェクトボランチ、キャプテン。

難波鳴海（なんば・なるみ／ナナ）M F 7

ユース代表を張るサツカー小娘。二四時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。

和泉流乃（いずみ・るの／るー）D F 5

センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。光速サイドアタッカー、副将。

天満蘭（てんま・らん）D F 3

天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラルガール。超攻撃的パワフルリベロ。

美原はなこ（みはら・はなこ／はな）D F 2

神経質でもうるさくても、学年トップのど根性秀才、作戦参謀兼任。クレバーなスピードD F。

堺愛(さかい・あい／プリンセス) F W 11

無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、お茶目。フィジカル自慢のパワーFW。

「1年生」

此花可憐(このはな・かれん／カレ) F W 9

ド単純でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。ユース代表の逸材。エース・ストライカー。

吹田千里(すいた・ちさと／チータ) G K 20

ボーイッシュなナンバー1元氣も一番、いつもチームのムードメーカー。FW兼任の超反応GK。

平野エレナ(ひらの・えれな／エレ) M F 8

日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔らか、微笑み一杯。大型MF、中盤の働き蜂。

天王寺ありす(てんのうじ・ありす／あー) M F 21

砂糖菓子少女つぼいが底の知れないキャパを持つ天才少女。攻撃的MF、ファンタジスタ。

西九条明日葉(にしくじょう・あすは／はつぱ) D F 17

天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。

鉄壁のDF、右サイドバック。

住吉古都(すみよし・こと／こっこん) Manager

ど派手な見た目に似合わず思慮深い、縁の下の力持ち。心配りのマネージャー。

「男性陣」

上町大地(うえまち・だいち) 2年

超オットコマエ・ミラクルズ・コーチ。サッカー戦術と乙女心掌握の天才。

空堀三十六(からぼり・さとる) 2年

冴える頭脳に軽い足腰、チームの盛り上げ役。チームプロデューサー、ナナと夫婦漫才。

千林哲哉(せんばやし・てつや) 2年

応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。豪放磊落、情に厚い。声がでかい。

高安和輝(たかやす・かずてる) 2年

放送部のしゃべってないとすぐしんじやう星人。かしましくチームとサポを盛り上げる。

〔家族〕

守口大拙……忍の父。古武術研究家。

守口聡美……忍の母。大拙とは別居中。

失点

ピ——ッ……

得点の笛が鳴り響いた。

眼前には、鬼の首でも取ったかのように喜びを爆発させる相手選手達が、いた。

『……やはり駄目か……』

忍は、心の中で小さくため息をついた。

ポポン。

小さく肩を叩かれる。

「どんまいどんまい、ノーチャンスノーチャンス」

ももだ。

深刻な顔をしてしまったのだろうか、満面の笑顔を作っている。

「……ハーフの回収ミスです、ごめんなさい」

「いや」

キャプテンまでもが苦い笑顔を作つて、来た。

急いでかぶりを振つた。まだ試合は、終わつてはいない。

「……すまぬ。」

……戦おう」

「はい!!」「うん!!」

二人が散つた。

1点奪われてもなお6点のリード、残り三分。

勝利など動きようもない。

それでもフオローに来る梅田ももと長居美緒の細やかさ、丁寧さに、身が引き締まる思いがした。

執念は、私だけの専売特許ではない。

忍は届かなかった右の拳をほんの少し、握りしめて、広げた。

見て、ベンチに顔を向ける。見るともなく、見た。

コーチは既に、ハーフウェー付近のボールと、敵陣のフォーメーションに顔を向けていた。

気づかれただろうか。

いや。

気づいていない、はずはない。

『……あとだ』

謝罪は後ですればいい。

今は、試合だ。

忍は腰を落とし、背を丸め、顎を引き、肩を溶かして、腕の自由度とフレキシビリティを上げた。

まるで畦に佇む老農夫のような、どこにも力の入らぬその姿勢。しかしこれこ

そ、チーム全員が絶大な信頼を置く、守護神の戦闘態勢である。

『もう、逃さん』

しかし。

その誓いは意味をなさなかった。

残り三分。プラスロスタイム二分。

眠りつつあった闘志に火を点けられたミラクルズ、シュート4本を浴びせ、さらに2点をもぎ取った。

ボールが、ハーフウェーを越えることは、無かった。

∞

「いやー、今日は惜しかった惜しかった。もう三分で完封やってんけどなあ！」

「原因はあんただ!!」

「反省してまーひゅ」

「あははははは……」

笑いながらも少し、顔色をうかがう。

よかった。コーチも、「しょうがないな」って感じで笑ってる。

「不用意でした、すんまへん」

難波鳴海が深く頭を下げた。彼女の言うとおり、自陣深く右サイドでの不用意なバックパスを、

「でも、ボクがどーんとクリアすれば問題なかったよね」

と、出された方のセンターバック、天満蘭が言えば。

「詰めた選手に詰めに行くべきでした、私もー」

右サイドバック、西九条明日葉もフォローする。

「やー、どうだろ、人数増えすぎてもつとゴチャゴチャしてたんじゃない?」

遠目から一部始終を見ていた左サイドバック、和泉流乃。

「うう……やつぱりあそこは私の責任だなー」

D Fリーダー、蘭とC Bコンビを組むもがしよげた。

——ナナのバックパスは、ちょうどセンターバック二人の間に転がった。一瞬のお見合い。そこへ詰めた敵のF Wが、人壁構わず一息に撃った。半ばヤケクソ気味の強烈な一撃が、スクリーンになった蘭・ものの間から、いきなり飛び出した。距離数メートル。

いかに忍が、P K阻止率六七%を誇る絶対の反射神経を有していても、それはさすがに厳しい。かつ。

「……あそこ、G Kにはすつごいやなとこなんですよね、実は」

第二G Kである吹田千里が、忍に向いて言った。

キーパーの右足外側、すぐ。

飛ぶには近く、しかし手を伸ばしただけでは届かない。死角とも言えるゾーン。

「……」

忍、無言。

それでも、止めるのがG Kだ。

サッカーは、ミスのスポーツである。ありとあらゆる局面で、攻めでも守りでもミスが出る。そのミスがいくつか重なって、点に結びつく。

だがG Kは、味方の守りのミス全てを帳消しにできる。

いや、それこそが、G Kの仕事である。

期待された仕事をなせなかったのが、はてしなく、悔しい。

ユニフォーム姿の、忍のストイックな、武人にも喩うべき厳しい心構えを思い出したチームメイト。なんともバツの悪い空気になる。あの失点で、一番責任がないのが忍様だというのに……

「……失点は、みんなの責任だね」

キャプテン・美緒がまとめた。自身、MF平野エレナに後ろをまかせて攻め

上がって、ジョグで戻るところだった。走っていれば。あるいは、7点差で中盤底が駆け上がる必要があるのか。

「せやせや、失点はみんなの責任、得点はみんなで獲るもん。今日も勝ち勝ち、9得点の大爆勝やで！ パーツといこパーツとお！」

「ナナさんお調子すぎ！」

千里がツッコんだ。ここは、盛り上げどころ。

「ウチから調子の良さを取り除いたらダイナマイトバディしか残らんで!？」

「またすぐそーやって誰に向かつてるかわかんない変なアピールするでしょ

!？」

「誰に向かつてるかなんか……決まってるやん」

「あーうつとおしいやかましいうつとおしいやかましい、はい勝利の三本締め――

――!!」

「あこらまで最後まで」

「今日も4得点！　我らがエース可憐ちゃん音頭ーっ！」

「よ——っ!!!」

ぱぱぱん　ぱぱぱん　ぱぱぱんぱん！

拍手と共に、笑顔が溢れた。もちろん、ナナも千里も。忍も口元にうつすらながら微笑みを浮かべた。武人たれど、勝った事実を喜ばぬほど、心亡き戦狂いではない。

「コーチ、何かひとこと、あります？」

千里がすり寄るようにして、訊いた。コーチ——上町大地は、苦笑い。

まとめておいて、「何か」もないもないもんだ。

みんなどんどん、ズルくなってる。

だがそれは、自主性と積極性という意味では、非常に頼もしいことだった。問

題の失点シーンでのお互いの連携ミス、その分析も、間違っていない。

「何もないよ。今日は強いミラクルズを見せていただきました。」

次も。この調子で行こう！」

「はい!!!」

敬愛する——特に後ろの文字の比重が高いのだが——コーチのお墨付きももらって、満足の選手達。足早に、帰途につく。

しかし大地、嘘をついた。

たった一つの小さな小さな引っかかり。

ふと、思わず、その小さな引っかかりに、視線をやってしまった。

迂闊だった。彼女は、普通の選手ではない。

目が合った。

どちらからともなく、どちらも何も伝えずに、外した。

……ますます、もやもやした。

だが、ため息もつけない。誰が見ているか聞いているかも、わからない。はらふくるる思いは、こらえるしかない。

『……9―1で勝った試合の後で、こんな気持ちになるのか』

いかな実力差があるとはいえ、真剣勝負九〇分で9点は、なかなか獲れるものではない。圧勝もいいところだ。それが、たった一つの目に付く点で、すべて吹き飛ぶ。

監督とは。

大地はコーチという名目だが、実質は監督だ。そもそも、欧州では監督を「コーチ」と呼ぶ。

監督とは、いかに因果な商売か。

自身が使われてきた監督に対して、謝罪の気持ちすら浮かんできた。これほどの苦労も知らず、好きなことをいい、好きなことをやっていたと今思う。

だが。

こうでなければ、監督という「業」を全うすることはできないだろう。

『……向いては、いるな』

それだけが、ほんの少し、慰めだった。

選手達は、明日のオフの過ごし方を明るく語り合う。

コーチは、分析すべきデータとその段取りを、思い描く。

ゐ

遅くなった。まず、顔を出すことにする。

——父の姿は、やはり道場にあった。

話し声が聞こえたので、挨拶はせず、顔を覗かせる。

小さな電球が薄暗く照らす、古ぼけた板張りの道場。この手の道場で顔とも言うべき「初心」と書かれた上座の額は、忍の、小学校の書き初めだった。

貧乏道場。磨き込まれた、ボロボロ。

今はもう、弟子も来ない。

しかし、最新ビル数フロアを借りる現在も、父はここを、毎日のように磨き清めた。それもまた、修行のひとつだという。それはわかるが、この多忙を極めるようになっても、まだそれを日課にする。

愛着か、額のようにここが、「初心」だからか。

いつものように、頭にゴムバンドをつけ、そこにコードレス子機を挟んで、愉しげに話をする父。這いつくばり、両手の雑巾で、床を丹念に拭きながら。マンガのような滑稽な様子だったが、

「父上、携帯電話には、ハンズフリーマイクというものが……」
と忍が教えても、

「うむ。ではいずれ検討しよう」

と応えるだけだった。彼はそういう、「自分の工夫」が好きなのである。

——気配を感じて、振り返る父。

二つのことを同時になしつつ、忍のある程度消した気配を感じられる。さすがだ。

『今帰りました』と黙礼した。父も微笑みを返す。

居室に帰ろうとすると、すぐに「娘が帰りましたので、これにて」という声が聞こえた。立ち止まる。

「……忍。おかえり」

「ただいま帰りました。……よろしいですね」

「はっはっは、永山先生と話していると、いつまでも話し込んでしまう。いいきつかけをもらったよ」

「左様ですか」

忍も知る数学者の名が出た。父は、どんな職業の人とも、瞬く間に友になる。接着剤のような人柄だった。誰かに似ている、と思えば……コーチも、そう。

「どうだった、今日は」

「はい。勝ちました」

「うむ。なにより」

にこやかに、笑う。

そんな笑顔を見ると、ほつとする。多忙に過ぎる最近の父は、少し疲れているようだった。見た目は元気だが、頬など幾分、痩けている気がする。

「しかし、ひとつ、気に掛かることがありました。心残りです」

「ふむ……どのような」

父、大拙にとつて、一人娘の姿を見ることは、何よりの喜びである。少々の疲れなど、全て吹き飛ぶ。

親の欲目もさることながら、やはり、忍は美しい。これが我が子かと、目を疑

うこともしばしばある。それに最近……「彼女」の面影が、あの柔らかさが、そこはかとなく出てきた。

自然は偉大だ。人間は、そこから逃れようもない。

「……もう少し、自ら考えようと思います。しかし、時間がありませぬ故、どうしても駄目なら、ぜひ、お知恵を」

「うむ」

返事はひとつ、うなずきは三度。

最近はこのように、実に頼もしい。もちろん素質も、それから経験もあるのだが、一番の理由は……

サッカーだ。

戦う理由。鍛える理由。

明確な理由と、目標を持った忍は、若さの力、大拙も舌を巻くほど急激に成長した。その技のキレや迫力は、今や部分的には彼をものぐ。

武人たるもの、その流儀を子孫に譲るなど恥、と考えていたが、それも考え直さねばならぬようだ。素質の血が流れ、幼少から身体全体に術が擦り込まれる。それは何より、強くなる道。

「……父上、お食事は？」

「うむ……今日はあまり、食欲がないので、抜いてみる」

「……」

父娘の食事は、交替で作った。今日は父が作る。忍は試合の打ち上げで食べたきたが、ふと、訊いた。最近父上は、睡眠時間が少ないせいか、食欲のないことが多い。

しかし、小言もはばかりれた。なんといつても、あの父である。自分の身体と体調の管理には、人一倍気を遣っている。そのために抜くことも、ある。

「忍は」

「はい。友人達と、たつぷりいただきました」

「はは……なにより。忍は思いきり食べてもよいのだぞ。まだまだ、身体が固ま
つていないのだから、少々羽目を外してもいかようにでもなる」

「お言葉いただきずとも、大食の友人ばかりです。私が限界まで食べましても、
その数倍を軽く平らげる人間ばかり。恥ずかしながら引きずられて、今も、
苦しいです」

ももやマキの暴れ食いをイメージしながら、横腹に手をあてて、言った。

「そうか。はっはっはっは……」

大きな声を出して笑う父に、少し、安堵する。

「父上。一服しましょう。茶を淹れます」

「おお。そうしてくれるか」

「京都の阪本先生から戴いたとびきりの玉露でも」

「……いや。いつものほうじ茶がよい。忍のほうじてくれる茶が、なにより一番
美味い」

「お上手を申されましても、味は変わりませぬ」

「そうだな。わっはっはっはっは……」

稽古着を着たまま、そんな上手を言う父は、珍しかった。

忍は、少し照れた。

並んで、道場を出る。薄暗いと思つた電気も、消せば明るかった。そこは、父娘の想い出ばかりが、いつぱいに詰まつた場所だった。

忍は苦笑い。

「くーちゃんも……。一緒に終わり？」

「ん」

「そりや同じクラスなんだから当たり前じゃん。ももも終わり？ ユミとマキは？ これから帰り？ あそだ、ユミにノート借りなきや。ねね、ユミって日本史取ってたよね？」

「あう」

横の寡黙な森之宮胡桃に代わってポンポンと応える忍に、ももが目丸くする。すぐ、八尾由美子とマキ・パメラ・キシワダが顔を見せた。ミラクルズ3年生、一揃い。

「ユミ助けてー。しのがいぢめるー」

「またなに人聞きの悪い、今のどこがいじめになるつてのよ、だいたい」

「あは……まあまあ」

ユミがなだめた。忍も気づいて、ほんの少し頬を染めながら、口をつぐんだ。

——普段の忍は、とてつもなく饒舌である。

いざ話し出すと相手に隙を与えず機関銃のように言葉の弾を撃ちまくる。フィールドでの寡黙な姿など、見当もつかない。慣れてる友人一同はなんとも思わないが、制服姿で軽い舌をペラペラ回す姿をいきなり見せられれば、双子の姉妹かとも思うだろう。それぐらい、印象が違う。

無論、当人もそれは意識している。ついしゃべりすぎて、ゆったりテンポのももやエレーナあたりの目を回してしまうことも、多い。

「てへへ、ごめごめ」

そして言葉も、付属する仕草も軽い。軽く舌を出して前髪を人差し指で掻いた。いつものことである。もももすぐ、話題を変えた。

「ていあんで〜〜〜す」

「却下です。却下です。却下です。却下です、却下です!」

「え〜〜〜」

「アハハハ」 「ふふ……」 「……」

五連打のどれも違うアクセントに、三人が笑う。これもいつもの光景だ。どうせ……

「えすぽわ——」

「だーらダメだつつつてんでしょ？ ケーキばっか毎日毎日食べてたらももになっちゃう」

「も〜なってるも〜ん！」

「太るよ？」

「うつ……」

言葉にするには小さな勇気が必要な体重を、誇りたくもないが誇るしかないももは、このセリフにすこぶる弱い。あと、チームではエレーナ、ナナにも非常によく効く。効くとわかるとつけ込まれて連呼されるのでできるだけ無関心なフリ

をしているが、マネージャーの住吉古都にもグツサリ刺さる。

「だっ……でもく太ってるもん……」

最後の方はすこし小声になって、すこし涙目になってしまった。ユミがフオロー。

「もも、あんまりいつもたくさん食べに行くとはら、お店にも迷惑が」

「えー、だってエスポ、『ミラクルズ御用達』って宣伝に使ってるじゃない。

私達が、できるだけ、行った方がいいんだよく？ 大物女優の漬け物屋さんにその女優さんが居るようなもんだね」

「そおかなあ……そういうお店には本人は居ないような気がするけど」

——この街は、街ごと『ミラクルズ』を応援している。

アマチュア・サッカークラブチーム、『ミラクルズ』。女子クラブチーム日本一を決める新年の祭典「クイーンズカップ」にて、前年度全国大会出場。今年度

は——いくぶん希望的観測がたつぷり混じるとはいえ——優勝をすら、うかがう。高校の部活ですらない、こんな素人チームではあったが、それが故に逆に、街の人達からは「おらがチーム」と愛されている。もちろん、その気分を盛り上げるために次々に仕掛けを打ち続ける、スタッフ——といつてもチームメイトの友人達つまりは高校生ばかりだが、それがなお大人達の応援と、子供達の親しみを得ていた——の尽力もある。

駅前商店街の多くの店が、いろんな形でチームを応援していた。

ことに、飲食店の「選手スタッフ無料・大幅値引き」ほど、食いしん坊揃いのチームに取ってありがたいことはない。商店街随一の人気を誇る洋菓子の『エスポワール』、グルメガイド常連の名店だが、そこへ乗り込んでケーキバイキングをぺんぺん草も生えないぐらいさらえてしまおう、というのがものの「ていあーん」である。

ちなみに、ほぼ毎日提出されている。

一〇〇を超える数字を維持するには、とめどなく乳製品を補給し続ける必要があるらしい。

「食べ物のことになると変に理屈回るんだから」

「だってだってー。ねね、ちょっぴり。ちょつとだけでいいから」

「アハハ、モモの『ちょっぴり』は一ホールだからネー」

ことにチーズケーキに目がない。ホールをそのまま、両手で保持してかぶりつく姿は、あまりに豪快で見る者の涙と拍手を誘う。これを本人は「チーズケーキの躍り食い」と呼称する。「しつかり押さえておかないと、逃げる」と。

「……まあ、今日はオフだし、いいかな。ちょつとだけならね。みんなは？」

「いやっほううううう！」

ユミの問いかけの反応を見るまでもない。飛び上がるモーションで足はガツチリ地面を掴んだまま、胸を上下に揺らして、喜ぶも。

「ん」「おけーい」

半分はしょうがなく、半分はそれもまたよし、と胡桃とマキが表情を崩した。
が。

「……ん。ごめ、実はちょーつぱり用事があつてね」

忍だけが、顔の前で手を合わせた。

「ん？ お稽古？」

「ううん、そじゃないんだけど。ちょつとね。ごめん、みんな」

「なんだなんだー、おとこかー」

「そんないーもんじゃござんせんわ……つてこたあんた達ならよくわかつてるで
しょお!? どこにんな暇あるつーのよ!?」

「まあ」「アハハハハ」「……」

「つたく、週末ごとに試合試合で泥だらけになって転げ回る女が好き、なんてん
ない男いるつーなら紹介してもらいたいもんだわ、じょーつだんじやない」

「なに怒ってるの……しのなら、しのさえその気になればいつでも誰でもOKよ！」

ユミが笑いながら忍の袖を叩く。少々おばさんくさい仕草だが、まったくその仕草どおり、「またまた」な忍の言葉だった。ももも胡桃もマキも、大きくうなずいて同意する。

忍は、超のつく美人である。

誰も彼もが美少女揃いとはいえ、強いて、無理に、「ミラクルズ三美人」を挙げるとするなら、堺愛、西九条明日葉、そしてこの、守口忍だろう。

彼女は先天的に色素が薄く――髪はごく明るい茶、光線によつては白にさえ見える。一目は異様でも、見慣れればエキセントリックで Unique な魅力になる。同様に、茶というよりヘーゼル、光によつては赤に見える瞳も、日本人どころかアジア人にも珍しく、誰の目をも引く。

目鼻立ちの整い具合も文句なし。赤い瞳覗く切れ長の目、長くそれそのものも美しいまつげ、通る鼻筋、卵形の品のいい輪郭、薄くしかし冷たい印象を一切持たせない、端麗な唇。スマートで無駄な脂肪など一片もない長軀、その雪のように白い肌は、G Kユニフォームの袖口でしか見られないのが惜しまれる。

最高の素材に拍車を掛けるのは、立ち居振る舞いの美しさ。

幼少のみぎりより鍛錬に修練を重ねた体捌き、これが実に無駄なく無理なく美しく、見るものを酔わせる。

さもあるう、父は古流の武術研究家、最近メディアに引つ張りだこの時の人、守口大拙その人である。生まれ落ちたその瞬間から、生活がそのものが修行であった。まさに血肉、本物であるが故に、どんな時にも破綻をきたさない。

その所作ひとつひとつが、まるで舞踊のように美しい。

立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花。

忍は特に、百合がいい。

「いやいやいや、またまたまたそんなことを、ま、や、あつしも自分じやね、鏡見てそこそこイケてんじゃないかなー、なんてことを思ったりしなかったりしないでもないんだけど、まーんなこと言い出すとホレ、神様がバチ当てそうじゃない？ だからこーゆーのはまあ謙虚謙虚で」

しゃべらなければ、もつといい。

こうしてくつろぐ忍は、ピッチに立った時の、あの日本刀の斬れと凄みなどどこにもない。ただペラペラと軽いおしゃべり好きな、フツー……よりみなお軽めの、お年頃の女の子である。話題も、映画にCDに服に美味しいもの、かわいいものに進路に勉強に……男の子。見てくれ裏腹、武の術理など、振らなければ語ることはない。

そしてみんな、これにも慣れた。

たぶん、忍は、これでバランスを取っているのである。あるいは、ケジメをつ

けているのである。

頬をピンクにして照れる忍に、ユミが茶々を入れた。

「じゃ、手近なところで空堀君とかどう？」

「にや〜にや〜！ カラちゃんもー文句なしとびつきりいい子だけどさー、ケツコ
ーあの目とか知的でいい雰囲気なんだけどさー、ナナちゃんと獲り合うのはや
かな。ナナっぺ、煮詰まったらマジで刺しそうだもん」

「ふふ、そうね、ナナはのめり込んだら一途っぽいね」

「カラもいーケド、ほら、もつと手近なところデー」

マキの言葉に、場が凍る。この辺の空気の加減が、やはり南米と日本では温度
差と時差がある。

「ダ」

「さてと！」

忍が背を伸ばし、大声で切った。その名が出るとお互いに気まどういのもあ

るのだが、それよりなにより、よしんばそれがそうなたとして、獲り合う相手のヤバさが、ナナの比ではない。

刺される？ そんなもんで済めばいいが。

「てなことで守口忍、お先に失礼させていただきます！」

みなさまはどうぞごゆっくりにお楽しみあれ〜！」

「はい！」 「じゃ」 「ん」 「おー、アデュ〜〜」

興味の対象が移ると一秒で前のことを忘れるマキ、両手をぶんぶん振って送り出した。基本的にイイヤツである。みんなそうだが。

忍は早足で、去った。

戦闘時以外はポニーよりも高い位置で束ねる輝く髪が、揺れて消えた。たなびくそれが、美しいそよ風を起こしてゆく。

「……忙しいね、しのは相変わらず」

「ま、お父様、今凄く話題になつてゐるからね。お弟子さんとかもすごく多くなつて、大変みたい。お家も……ほら、お母様おられないし」

「そだったね」

ユミに言われて、ももも思い出した。

質実剛健、清貧そのもの。現代社会とは思えぬ穏やかな、静かな暮らしを続けてきた父娘の家庭が、いきなり騒がしくなったのだ。いろいろと、私達の想像もつかない苦勞もあろう。それに……

言葉の軽さとは裏腹に、忍はいつでも、泣き言も愚痴も一切言わない。

それもまた、彼女の大きな美点であり、後輩達から——時にはもも達も——

「忍様」と尊称されるゆえんの一つである。

その名の通り、「しのぶ」女の子。

『でも、大変ならなんでも言ってくれればいいんだけどな』

世話好き、が昂じてDFリーダーやつてるような、母性本能の塊・ももは思う。言われてみれば最近、付き合いが悪かった。しかし、私達になにができるというわけでもない。

「忙しい時ほど、おなかいっぱい食べなきゃダメだよ。シノ、いつもシヨシヨクだかんネ」

「小食？ 粗食？」

「う……りようほー」

「上手くごまかしたな？ ま、あれは忍流の健康術というか修行というか……」

四人は、いつも忍が自分で作ってくるお弁当の中身を思い出す。手ぬぐいに包まれた、小さな竹製の弁当箱に、玄米ご飯。真ん中に、梅干し。そして、大根、芋、豆の、煮た物。

以上である。

異常である。おおよそ一七、八の女の子のお弁当ではない。

しかしこれも、朝、昼を軽めにして身体に負担を掛けない、守口流の壮健術と言う。小さい頃からこれ一本であるが故に、合宿のお昼でも食べきれずにおつこつとしていた。もちろん、ももが慈愛の心を剥き出しに残飯処理に当たったのだが。

「シノ、ダイコンが好きなノ？」

「好き、というか、やりたくて、というか、やらなきゃ、というか……」

「肉食べなきゃ力でないヨー……お肉なきゃごはんじゃないヨー……」

マキがそうやって肩を落として嘆息すると、二つ目まで開けた胸元に、『なるほど肉はそこへ行ってますか』という塊が二つばかりチラつく。なんだかやたら説得力がある。

ユミが無理に例えてみた。

「ふふ、マキ、それが忍の『普通』なのよ。えっと、マキがお肉たくさん食べるのと同じ。マキのお肉はお肉、しのお肉は、大根」

「フワアアア……シノ、凄いネー」

「いや、じゃなくて……ふふ、ま、いいかな」

どうも伝わらない。日系とはいえ四世、南米ブラジルリオデジャネイロからやつてきた彼女に「禁欲的（ストイック）」という概念を伝える方が、難しそうだ。「マキの方が凄いよ、あんなにお肉ばかり食べて太らないんだもん」
またすぐそういう話になる。

「だってアタシ、モモチンみたいにごはんばかり食べないモン」

「なんですとー!? ごーはん食べずになーにが食事ですかー! 炭水化物食べなきゃ力でないよっ!」

ぼいゝん。

擬音そのもののわけのわからん巨大物体を突き出し、腰に手を当て轟然と言いつ放つ。嗚呼こちらにも抜群の説得力が。

しかし、世間は厳しい。

「食べ過ぎダヨ……」

「確かに……」

「ももちんの場合」

胡桃のトドメ。無口が口を開くと、効く。

「肉は肉、ごはんも肉、乳製品も肉、なにかもが肉」

「そうですとも！」

しかし今日も、ぱっくり綺麗に開き直った。

「パワー・フードは人それぞれ！」

マキはお肉、しのは大根、そして私はケーキ！

取るぞ糖分・乳脂肪！

行きますじよい！」

「じよい？」

「じよいはENJOYのジョイ！ 楽しまなきや人生わ——!!!」

ずしんずしんと、大手と大胸を振って歩き出す食の勇者梅田もも。やれやれ、と付き従うデコボコ三銃士。

人には、それぞれの「普通」がある。

ss

「……ママ、お待ちせう」

「しのぶ」

破顔する母に、忍も思いつきりの笑顔になって、手を腕ごとぶんぶんと振った。いつものとおり、駅前瀟洒な喫茶店での待ち合わせ。週に何度か、母と娘はこうして会う。

娘に似ぬ丸顔童顔、姉妹はさすがに厳しくとも、年の離れたいところ同士と言わなくても不自然ではない。帰った実家で娘をやり直しているからか、気も若い。

「ママ」という呼び方がピッタリ来る。

いつものようにケーキセットをオーダーする母。彼女は、ケーキにまるで目がない。いつも二つ頼む。「忍の分」と言うが、忍が食べないのをわかつてそうする。娘は、ストレートティーをホットで。無論、砂糖も入れない。

何でもない世間話が、花のように咲いた。

母は忍がごく小さな頃、家を出た。

奇妙なことに——どうも父との不仲ではないらしい。愛情が冷めたわけでもなく、証拠に、未だ母は籍を抜かず、「守口」の姓を名乗る。もちろん、再婚もしないければ類する話も一切聞かない。母の実家へ行けば、祖父母も、叔父叔母も、いとこ達も歓迎してくれる。

それどころか。

母と会った日にその報告をすると、父は黙ってそれを聞いて、いつも最後に一

言、「母上は、元気だったか」と尋ねた。「はい」と応え、と、「そうか」と微笑む。気には、掛けているらしい。

離別と言うよりは、別居——なのだが、ただそれがもう、一五年近く続いている。こうして何日かに数時間の、ママとの語らいも。

おかしいと言え、おかしい。

しかし、それが夫婦二人のスタイルならば、一人娘といえども割って入るのははばかられた。

普段は格別に優しいが、こと修行に関しては厳格そのものの、年端もゆかぬ小さな娘を真冬の板張りの道場に正座させ続けた父。食事一つから禁欲節制そのものの家には未だに、テレビもない。

対する母は、良くも悪くも普通の女性だった。父に対する愛はあっても、つき合いきれない……というところか。

わかる。

特に忍は、年頃になってそう思う。

人生には、様々な楽しみがあるのだ。一つのことには、他の全てを犠牲にする必要などない。ましてや、それに誰かを巻き込むなど。

だからか、不思議と、出て行った母を恨んだことはない。むしろ、こうして会いに来てくれることをとても嬉しく思う。時間が許せばそれこそ、毎日でも会ってくれるだろう。目の前で、嬉しそうにショートケーキを崩す母を見ながら、そんなことを思った。

『パパだ。パパをなんとかしなきゃ』

もうよからう、と思う。

今はもう、真冬でも和装、下駄履きに日本刀を持って街を徘徊、刀こそ持たせぬが小さな娘に同じ格好をさせ、「奇人」の名を欲しいままにした街の変わり者ではない。テレビ雑誌に引つ張りだこの、古武術研究家、守口大拙である。

三桁を超える弟子を、スポーツジムさながらの最新道場で指導する。雑誌を

開いて右手に刀、正中線の立った凛々しい我が父の姿を見つけた時には、悪い冗談に担がれているのかと目眩がした。講演、執筆、対談。忍が帳簿をつける収入も、数年前に比べ幻かと思うぐらい多い。

母に好きな暮らしをさせて、自らは道を究め続ける……

そういうやり方だつて、あると思う。

ふと。

どういう話の流れか、話題がそこにいった。

たぶん、サッカーで一つ、もやもやを抱える忍が、いつものように言葉を選びきれなかったのだろう。カジュアル・モードの忍は、言葉の弾幕で本心を守る。

しかしその言葉自体に、裏切られた格好になる。

ほろり、と上手の手から、水が漏れた。

「……ママ。帰ってきてくれないかな」

「えっ」

そして自分でも驚くほど、手の中の水が、全部。

さすがに単刀直入、母はのけぞるように、フォークを止めた。一瞬目を伏せて、すぐ上げて、すぎるような目で、忍を見た。

「……それは、パパが言っているの？」

「うん。私」

「……」

伏せた。

やつぱり。

やつぱり私ではどうにもならない溝が、二人の間にあるんだ。

しかし押した。普段の忍からは、考えもつかない強引さだった。

「……今ね、お弟子さんとかも増えちゃって、お仕事も山みたいにあって、パパ、本当に大変なんだ。あのパパが、お稽古の時間も黙想の時間も作れないぐらいなんだもの。夜も明け方まで、朝はお天道様と一緒に。一日の睡眠時間なんてほん

の少し。私起きてて、パパが寝てるってこと、ないもの。私もできることはやるんだけど、ほら、パパ、あんな人だから、自分のやりたいことは全部自分でやっちゃうの。相変わらずトイレ掃除とかも交替でやろうとするし……」

それが父の良さだったが、少しは考えて欲しかった。もう、彼一人の身体ではない。

「娘の言うことはね、もう、全然聞かないの。お弟子さん達も皆さんいい人ばかりだから、逆にそういうことに口出しする人いないし……だから、言うこと聞かせられる人が居なきやダメなの。じゃなきや……パパ、身体壊しちゃう」

ぱつ、と瞳を上げて、母が驚きの表情を見せる。最後の一言が、効いた。そわそわと、落ち着かなくなった。

「……パパ、どこか具合悪いの？」

「ううん、そうじゃないけど。でも最近特に、お疲れ気味で。それでも、おもしろそうなことや、義理のあることがあると、飛んでいく人だから」

「……」

母の顔は、曇りっぱなしだ。

忍は逆に、不謹慎だとは思いつつも、ちよつぴり嬉しくなった。本当に、父が心配なのである。

「……じゃ、会って直接文句言うだけでも。ね、おねがい」

「あ……でも」

両手を合わせて拝む忍に、母は複雑な笑みを浮かべた。今すぐにでも飛んでいきたいのかもしれない。それを阻害してるのは……

「パパが、ダメって言うの？」

「……」

「それならまかせて。不意打ちでも待ち伏せでも」

「そんな、忍」

「なーにいつてんの、私達武術家だよ？ 策にはめられる方が未熟なの！」

「また……」

いささか無茶だったが、それも理屈だった。その覚悟で、忍は、そしてもちろん父も、普段の生活を過ごしている。

母もそうまで言われては、返す言葉はなかった。もう少しだけ考えて、やがて真っ直ぐな瞳を、忍に返した。

「じゃあ、忍に……まかせます」

「うん!! やった!」

素直に、嬉しかった。

パパとママが顔を合わせるの、いつぐらいぶりだろう。パツと思い出せないほど、長い歲月ぶりだった。

難問は、人の心を読むに長ける父上をどう騙くらかすかだが、なに、父上は私には、稽古以外ではすこぶる甘い。まして目の前ではいい娘一辺倒の私に騙されるなど、夢想だにせぬだろう。

仮病でも使つて、「母上を呼んでください」とでも言うか。困る父上を、そこから見てみたい気もする。

「約束だからね！」

「……ふふ……忍」

「なに？」

「そういう強引なところ、パパそつくりよ」

「ひえ？」

つき合つてゐる時間が、そもそも違う。父親似になるのが当然だったが、少し嬉しくもあり、少し面はゆくもあり。

「……ねね、じゃあママもパパに少々強引に？」

「ふふ、ま、そんなところね」

「へへ、あのパパがねええ」

もちろん、今の「守口先生」に女の影など髪の毛ほども無い。

しかし言われてみれば、あの執念と合目的性、思いこんだら全てを犠牲に突っ走る潔さ。恋の面でそれが現れても、なんら不思議ではない。

幸せを手にいれた方がいいが、それに溺れては思う道極められぬ。だから……そんなところか。ならば。

『そのぐらいで心乱されてどうします父上』とでも迫るか。

「ふふ……忍、嬉しそうね」

「ママの方が」

「えっ!？」

狼狽えて、まるで高校生のように、頬の火照りを確認する母。

その仕草そのものが、ウキウキの証拠。

嬉しくなつて、ただ、笑っていた。

母もすぐ、「もう」と一言呟いて、冷めた紅茶で緩む口元を、隠した。

そーっと、部室のドアの隙間から、中を覗く。

頭を壁にゴリゴリ押しつけてようやく、コーチの顔が見えた。

今日はいつにもまして、一段と厳しい。

腕組み、唇は真一文字。眉間に皺、虚空にある何かを、射殺すばかりの視線で見つめていた。

古都、ひとつ大きく深呼吸。

手だけドアの内側に回して、小さく、ここん。

「こうおうち」

「……ん。」

「……どうぞー」

声が普段の、優しく甘いそれに戻ったのを確認して、ひよいと顔を出した。

机の上に目をやると、おおよその議題は、読める。世界中から掻き集めたのではないかと思われるほど多種多様な……ゴールキーパーの、関連書物。

『やつぱり』

問題点がはつきりしていて、それを把握しているからこそ、難しい顔で解決策を練るのだ。それはどうも、そこにあるらしい。

でも、とりあえずトボけた。つまらない質問をして、コーチの負担を増やすことはない。

「お手伝いすること、ありますか？」

「ん。今日はオフだよ。いいよ、遊んでおいで」

「もー、こーち、まるで子供みたいに」

「あ。ごめんごめん」

言われてみればその通りである。学年歳わずか一つ下、共に戦う、仲間。

「こーちこそ。根詰めてると、出るアイデアも出ませんよ?」

「ま、ね。だけど引つかり抱えたまま遊びに行けるほど、豪気な性格じゃなくて、さ」

「ふふふ」

笑って言ってるが、そんなに簡単なことではない。

ミラクルズは昨年——その頃はまだその名ではなかったが——あれよあれよの勢いで、クイーンズカップに出場を果たした。今年も、去年より遙かに分厚くなった選手層を考えれば、まさか地区予選で敗退するわけにはいかない。しかし、近年は年毎に女子サッカーの質も向上している。一年で、どのような強豪が出現するかもしれない。事実、ミラクルズも昨年に比べ遙かに強くなっている。

指揮官・上町大地の双肩には、予選突破、そのプレッシャーが重く重く、のしかかっていた。

大地が無意識に首を左右に鳴らした。それを見た古都、すつ、と後ろに回る。

——破壊的な攻撃力を売り物にここまで来たミラクルズは、逆に安定した守備をいくらか犠牲にしている。いや、選手の質はいい。練度も高い。可憐やナナのような経験者がいないDFラインにしては、充分以上に及第点だ。しかしどうしても攻めに重点を置くために、システムとして高いラインを維持し、敵に大きなスペースを与えるリスクを背負って、戦っている。

そのツケを一人で払っているのが……GK、守口忍。

失点が、多い。

信じられない反応速度、的確で堅実な判断力、ずば抜けた身体能力、極めて冷静な戦術眼とコーチング……少し、サッカーを見る目があれば、彼女のGKとしての能力に疑いを抱く人間はいないだろう。

事実、凄まじいスーパー・セーブを連発して、チームの危機を何度も何度も救ってきた。忍がいなければ、ミラクルズの失点はこのものではなかっただろう。しかし、高く上がったライン裏を独走され、一対一に引きずり出されて失点を喰らう姿もまた、お馴染みの光景ではある。

確かに、失点は、みんなの責任。

で、あればこそ。

みんなのミスを最後に止めるのは、私しか居ない。

忍は苛烈なまでに、己の能力向上を欲した。その追い込み方は、可憐やナナはもとより、胡桃やエレナといったトップアスリートで鳴らした連中も、舌を巻くほどである。

どう見ても一流GKの忍にそこまでされては、他の選手がサボるわけにはいかない。この真摯な姿勢も、「忍様」と呼ばれるゆえんの、ひとつ。

『……だが、それがおそろくは、あの失点につながった』

「お肩でもおもしましようか？」

自分が居るにも関わらず上の空の大地に、ちよつぱり拗ねと甘えを混じえて、
古都がその鼻にかかった声で尋ねた。

「いや、いいいいよ」

「そんなことおつしやらずに」

「わ……はは」

肩をすくめたが、遅い。着やせする古都、イメージよりはるかに柔らかく丸い
指が、大地の肩をぐにゅぐにゅといじりまわす。たまらず、逃げた。

「く、くすぐりたいよこつとん、ゆるしてよ」

「そ、そですかー……」

悲しげな顔を作る古都に、譲歩した。

「じゃ、じゃあ叩いてくれるかな。それなら」

「あ、はい！」

満面の笑顔に戻って、叩き出す。

「たんとんたんとんたんとんとーん……」

「はは……」

しばらく、まかせた。

ストロークばかり大きくて打力の軽いその肩たたき、さほど刺激は無かったが、血行ぐらひはよくなりそうだった。あまり、強くしないように意識してくれてるのかもしれない。なによりその気持ち、ありがたい。

マネージャーの、鑑。

たんとんたんとんたんとん……

肩に意識を集中していると、凝っていた思考までほぐれるような気がする。

「……ゴールキーパーのご本がいつぱい」

「ん」

頃合いを見計らって、古都が言った。大地も応える。

なるほど、ごほうび、か。

「でも、『ウチはキーパーは見なくていいから楽だ』って、おっしゃってませんでしたっけ？」

ことあるごとに、そう言った。忍に加え、セカンドGK、吹田千里も、「総合運動センス」的なものを考えるなら、和泉流乃と並んでチーム最右翼。背は低く小柄だが跳躍力も俊敏性もやたら高く、よそのチームなら間違いなくエースGKである。この二人が競い合うGKは、ミラクルズで最も堅牢な部分……の、はず。」「……これを見てもらえるかな。

ありがと。もういいよ。楽になった」

背もたれから身を起こす大地、後半のセリフは棒読み。感謝の意がないわけではない。サッカーのことになると、他の全部が飛んでしまうだけだ。いつものこと、古都も気にせず、手を止めた。

大地の前のP Cディスプレイに、前戦のデジタル化された録画がある。再生ソフトのバーをぐつと右へ持つて行つて、試合終了直前。選手が、動き出す。

「失点シーンですか」

「よく覚えてるね」

なに、「気になる」といえば絶対にそうだからヤマを張つただけだ。コーチのように、全戦の動きを選手一人一人に至るまで覚えているような能力は、古都不是ない。

でもちよつと鼻高々に、そのシーンを見つめた。

——ナナのミスパス。蘭ともものお見合い。動き出す二人に挟まれながら、強引にシュートを放つ敵選手。忍、捕りきれずに、ゴール。

このシーン、強いて責任者を上げればナナだ。ヴェテランらしくもない軽率なプレー。なのに、なぜ、キーパー。疑問は、訊くに限る。

「でも、この距離のシュートはいくら忍様でも捕れないですよ」

「ああ。捕れない。イタリア代表のGKでも無理だ」

口調が変わる、表情が変わる。

古都はいつもぞくぞくする。

大地先輩から、上町コーチに変わる瞬間。

これを誰よりもたくさん、しかも一番近くで見ることの出来る私は、なんて幸せ者なんだろう。選手のように試合後に誉めてもらったり撫でてもらったりしなくても、これだけで余りある。

「では、なぜ」

「しかし、スペイン代表のGKなら、失点は、しない」

「？ と、いいいますと？」

「……見せようか。これがイタリア代表」

よほど繰り返し見ただろう。慣れた手つきでデスクトップのショートカットをダブルクリック、その映像が再生される。

素晴らしい盛り上がりを見せるスタジアム。どうやら真剣勝負の大一番。激戦を繰り広げるのは、いつもの地中海^{アスリー}青のユニフォーム、イタリア代表と、白に赤と青のラインは……フランス代表。強豪同士の好カードだ。

フランスにチャンス。

黒人系、いかにもバネのありそうなFWが、ゴール至近距離からシュートを放った。イタリアらしい男前のGKの、足元を襲う。

さつき見た忍のシーンに、酷似。

GKは、忍のように手を出し身体を倒すが、間に合わない。

ゴール。

爆発的な歓喜に包まれるフランス代表、ぐったりとうなだれるイタリア代表。大地はすぐに止めた。

「次はスペイン代表——のGKの、リーグでのゲーム」

同じように映像を再生すると、もう既に一对一のシーンだった。

独走する敵FW、半ば諦めているディフェンダー、しかし、まだ二十代前半らしい、純白のユニフォームに身を包む結構可愛いタイプのGKは、顔に似合わず少しも慌てず、非常に落ち着いている。

GK眼前まで斬り込んだFWが、満を持してシュートを放つ。それを。

ぽーん……

目にも止まらぬ超反応、GK右足がそのシュートを蹴り弾いた。

「なるほど！」

よくわかった。ほぼ同じ位置から、似た球威のシュートが、同じ右足元すぐ外側を襲った。それを二人のキーパーは違う対応をし、違う結果を得た。

だが……

「でも、これはその……腕前とか、得意不得意とか、そういうのではないのですか？」

「ナイスクエスチョン。さすがこつとん」

またマントヒヒ天狗のようにびよろーんと伸びそうな鼻と鼻の下を必死で我慢しつつ、聞く。大地、デスクの上の分厚い洋書を取り出した。英語ですらないタートル。が、サッカー関連であることは間違いない。

ポストイットの貼られたページをめくると、文字とイラストがぎっしり並んでいた。イラストから察するにどうも、GKのセオリーが書いてあるらしい。しかし、読みようもない。

「え、えう……読めましえん」

「はは、僕もさ。だけどイラストが充実してるから、なんとなくわかる。それ、イタリアで定評あるコーチングの入門書なんだけど……さっきのスペインのGKみたいなプレー、つまり蹴って弾く、なんてことは、どうも書いてない」

「む」

「イタリアでは、キーパーは、『できるだけキャッチ』するらしい。もちろん、

その方が正解だよ。イタリアといえば守りの国、世界一のGK大国だ。子供の頃からその基本を叩き込むから、優秀なGKに育つんだろう。ただ」

「ただ」

「あの一点に関しては、あのシチュエーションに関しては、スペインのあのGKの方が、正しい」

「ですね」

確かに、ゴール前で「弾く」プレーは危険だ。リバウンドを拾われてもう一度撃たれることも多い。しかし、弾かなければゴールになるのなら、そんな贅沢は言ってられない。

「……忍様に、さらにこのプレーを、ということですか」

「逆だ」

背もたれにとん、と背をのせて、嘆息混じりに大地が言った。

「忍は、これができてたんだ」

サッカー選手は、ピッチでお互いを呼び合う時に、短い愛称を使う。年齢差や経験差は関係ない。ルーキーもキャプテンを呼び捨てにする。状況がめまぐるしく変わるサッカーでは、そんなことに時間を使つていられない。

だが、ピッチを離ればやはりそこには、遠慮も配慮も生ずる。

なおそれを捨てて、短く呼ぶあたりが、コーチの本気。まるで年上の「女」を呼び捨てにするような、ちよつとセクシャルな香りすらして、少し……いやかなり、カッコイイ。

と、古都がまるで関係ないことで恍惚してると、それを「理解できなかった」と取った大地はご丁寧に、また動画を選んだ。

——忍の、名セーブシーン。

ちなみに古都と、ミラクルズプロデューサー・空堀三十六の力作である。こちらのチームでもこれを見ればこの選手がどうしても欲しくなる、というファイナルのオンパレード・ダイジェスト。チーム全員分が揃い、今も更新が続けられ

ている。

主な用途は、メンタルトレーニング。調子を落とした時に、自分のいいプレーを振り返るのは、「あそこまではできる」と自信を持ち直す、効果的な方法である。

さらには、Webでその簡易版がストーリーミングされ、今日もミラクルズ・サポーターを増やし続けてもいる。

ナナ・伝説の五人抜きや、可憐の必殺シュート「レイザードライブ」など、見るだけで身体の熱くなる名シーン満載、「あんなのがいつでもできる思われると困る」と本人達が恥ずかしがる、嘘くさいほどの上出来だ。

画面の忍が躍動する。

あらためて、大地が「GKは見なくていい」と言った理由がわかる。

バネのように弾ける。蝶のように舞う。豹のように走る。

狙った獲物は逃しはしない。必ず仕留めて、正確無比の高速ロング・フィード

を最前線に送り込む。

キャッチング、パンチング、そして……キッキング。「変幻自在」などというGKに似つかわしくない単語が、脳裏に浮かんだ。

圧巻は、ラストを飾る、古都もよく覚えていいる一シーン。

敵のFWの地を這うミドルシュート。威力はさほどでもないようだが、球速はそこそこある。それを、なんとこのふざけたGKは、二歩、駆け寄るや、

ガッツ!!

真正面に、蹴り弾く。

グリーンと低く長く伸びる球筋、それに反応して、センターフォワード森之宮胡桃が、飛んだ。

ドン。

ゴール。

……いかにピンチとチャンスが表裏一体のスポーツ、そしてそれが魅力のサツ

カードだからとて、あまりにもあまりにもなプレーである。

敵も味方も、何が起きたかわからずに、ただただ立ちつくしていた。

その中で忍は、平然とゴール前に、いつものように、何事も起きてないかのよう
うに、たたずんでいた。

そうだ。むしろ、これは忍様の得意技ではないか。

「……ね？」

「ですね……」

言いたいことを全部言つて幾分肩の荷が下りたのか、優しい声に戻る大地に、
古都は腕組みして考えた。

「……不調、でしょうか」

忍様は、その辺がよくわからない。

「歩く前から武術をやつてた」というだけあって、調子の波のコントロール、悪
く言えば誤魔化し方が、非常に上手い。ちよつとしたことで波が激しく上下する

千里とは好対照だった。そしてこれがあるから、千里はまだ……主戦GKとしては、使いにくい。才能はある。「当たれ」ば、忍にも負けない。上に力量差のある相手に一発を狙うなら、博打としては面白いかも知れない。が、ノックダウン・トーナメントでミスを出されたら、一卷の終わりである。

優秀なGKが二枚揃っているようにいて、実は、忍の不調は、チームパフォーマンスそのものに甚大な影響が出る。

「うーん……忍様は、その辺よくわからないからね……ただ、他の動きは特に重そうでもないし、アップ見てもいつも通りだし」

「ふーむ……特に表情とかも変わってないですね。」

……なにか、精神面でしょうか」

それは、このチームでは非常によくある。

だがそれを言い出すときりがない。

地区予選真っ最中、大地はただでさえ、猛烈に忙しい。これでも学校側の半超

法規的措施を多段で入れてもらって、それでなお、だ。ケアしたいフォローしたいのはやまやまだが、選手は忍だけではない。しかもそういう問題の場合、根が深く時間が掛かることも多い。これ以上は……

「……」

いや。

何を言ってるんだ、僕は。

僕がそれをやらずに、いったい誰がやるんだ。

「こーち」

……たんとたんとたんと……

なってしまった難しい顔をほぐすように、古都がまた、大きく肩を叩きだした。いけないいけない。これじゃ、負担を重くしてるばかりじゃない。

「3年のみなさんに、それとなく訊いてみます。ユミ姉さんとか」

「……ん。お願いしようかな。僕が訊くと、いかにもになっちゃうし、嗅ぎ回つ

てるみたいになるしね」

「そうですね。そーゆーときこそ、こつとんの出番です」

「ははは……頼りになるなあ」

事実、そうだった。この、ドジではあるが非常に賢明で懸命なマネージャーが居なくて、このチームは、ここまで来れてない。

『神様に、感謝しないと』

と、思えば。

「……あれほど素晴らしいGKが、いるだけでもありがたいんだ。あれだつて、別に間違ったことをやったわけじゃない」

「……」

自分のえげつないほどの貪欲さに気が付いて、幾分、反省する。

そう、イタリア代表のGKでも、あれは取れないのである。

たんとんとんとんとん……

叩きながら古都、すこし、大地の肩が下がったような気がした。もしそれに、一役買えたのなら、そんな嬉しいことはない。

できるだけ明るい、のんきな声を出した。

「そうですね。忍様を、信じましょうか」
信じる。

いい言葉だ。

そして彼女は、それに足る、敬意の持てる人物である。

「だねえ」

大地先輩も、のんきな声で返してくれた。

古都、少し、とても、嬉しかった。

母と語らっていると、いつも時間を忘れる。すっかり陽が落ちてから、家に着く。

今日は、私が食事当番。急いで作らないと、父が空腹で倒れてしまう。

北風と太陽。父はそんな時でも、文句一つ雷一つ落とさない。

「これも修行」

それが口癖だった。いつ、食事も出来ぬ状態に陥るかも知れぬ。その時に、精神肉体を乱さないことこそ肝要だ、と。そう言われては、逆に時間通りに食事を作ることこそが、自分の修行に思えてくる。

——部屋にも帰らずまっすぐに台所、接ぎだらけのエプロンをまとい、用意を始める。

と、いつでも簡単。

祝い事でも無い限り、夕食も簡素である。玄米を土鍋で炊きながら、若芽や葱のお味噌汁をこしらえる。主菜は野菜の炊き合わせ。大根と、灰汁を抜いた牛蒡

と、人参。最近はやっぴり贅沢になつて、油揚げを入れたりする。蒟蒻を入れることもある。あとは、香の物と、梅干し。それで終わり。

先日、食の細い父を案じ、思い切つて鳥の胸肉を入れた。父は驚き、笑つて言つた。

「墮落したものだなあ、我々も。金を持つと、いかん」

「これも修行です」

「ははは、こりや一本取られた。しかしあまり妙なものは駄目だぞ。特に甘いものは無理だ」

「ふふふ……父上は甘いものが苦手ですね」

「いやあ、好き嫌いは無くさねばと思うが、こればかりは避けられるものなら避けたい」

「私の友人に、ケーキならお味噌汁に入つても食べそうな者がおります」

「はっはっはっは……私も、それに近いほど甘いものを好む人を知っているぞ」

「女の方ですか」

「よくわかるな」

「チームには、それほどでなくても甘いもの好きが、たくさん」

「……娘時分はそれでよいと思うぞ。忍は、苦手だな」

「苦手というほどではないですが……」

手づかみでピザのようにケーキを頬張るも、両手にドーナツを握りしめて喰いまくる可憐、巨大パフェ目の前にとろけそうな表情で両頬を押さえるエレナ、チームに差し入れ、三六個入りのシュークリームを一人で食べきった胡桃……

「全部無かったら、バレないと思った」箱が残っていた。猫の浅知恵である。

あれらを普通というなら、私は苦手な部類に入る。

——立ちのぼる醤油の香ばしさと、土鍋が噴く柔らかい蒸気が、甘いものとチームメイトが乱舞する空想を白く消した。小さく味見をすると、いつものとおり。ほっとする滋味深い味わいが、口中だけでなく空いた胃と食道も、優しく撫でた。

『……うむ』

あとは、ごはんを蒸らせば、完成。

質素に見えて実はこの食事、ものすごく贅沢な食事でもある。

米も野菜も醬油も、水までが、父を慕う全国の知人から送られてくる、自然で安全で手間暇の掛かった、最上質のものばかり。シンプルな料理でも、いやシンプルな料理だからこそ、素材が光った。

——それは忍の自惚れでもない。大昔、初めてキャプテンと一緒に、学校の屋上でお昼ご飯を食べた時のことだ。

「うおおっ!？」

減多なことではそのぶ厚いタヌ皮を剥がさない長居美緒が、忍の弁当を一目見て衷心からの唸り声をあげた。天下に聞こえる料理オタク、食材の出すオーラが見えるらしい。くれというので与えると、

「ううううう……」

とまた、唸りをあげた。

「……食材だよ!! 私だつて、私だつてこの大根さえあれば!」

「みーちゃん、興奮せんでええから。誰も負けてるなんて言うてへんて、負けるなんて。だいじょうぶ、忍様の素朴く優しい味わいの健康お弁当より、みーちゃんの派手なちやらちやらしたパチンコ屋みたいな弁当の方が、人心をよりよく惑わしてゐるって」

「そそ。違う魅力。例えるなら老舗和風旅館の心のこもったおもてなしと、脱サラオーナーの小綺麗で小洒落たペンションの違いかな。外壁白、屋根パステルカラー。壁に斜めに『PENGUIN HOUSE』とか描いてあるの」

「個室風呂ユニットバスでジャグジーついてんねんな。三百年続いてる天然温泉露天風呂なんか、屁でもないで!」

「でえやゝ……シヨッキング・ミー」

また奇怪な唸りと、八〇年代風の奇妙な英語を呟いて、ガックリとうなだれた。

ナナも流乃も、親指を突き出して「グッ！」と目配せをくれた。それほど、この人からイッポンを取るのは難しいらしい。

しかし、あとで美緒のものを分けてもらって、驚いた。ナナも流乃も言い過ぎである。その弁当は、忍の「弁当」の概念をひっくり返すほど、美味かった。唐揚げを一つ、頬張ると、唾液が滝のように口内に溢れた。

『……この女、ただ者ではない』

改めてサッカー小娘・ナナが主将の座を任せている理由がわかった。と同時に、これほどまでの腕前の持ち主が、自分のお弁当を認めてくれた、というのが、すごく嬉しくて、また自信になって、ハッキリ記憶していた。その頃から、食事の用意は面倒な作業ではなくなって、楽しい手業になった。

いい、想い出だった。

『そういえば……我々は、食い気で結ばれてるな』

弁当の話で、思い出した。

苦笑いをしながら、今や一番の親友と言える友との出会いを、思い出す。

「……忍ちやゝゝゝん、お昼ご飯どうするのゝゝゝん」

高校入学。同じクラスに、女の忍から見ても、「それはちよつとどうなの」というぐらい、実にグラマラス・スタイルの女の子がいた。もちろん男子の視線釘付け、女子も実に複雑な目で注目していた。

瓜科の果物のような胸がゆつさゆつさと揺れ、長く艶やかな黒髪をなびかせて、太いが白く美しい脚が伸びる。よせばいいのに長さが選べる制服のスカートは、一番のミニだ。目のやり場に困るつたらない。しかも顔もまた、泣きぼくろつきの小さめのたれ目に、厚く大きめの唇。可愛く美しく、そして少し、エロティック。そのくせ、

「うめだももでゝす。

好きなものは食べるもの、好きなことは食べることでゝす」

などと甘ったるい声で実にナチュラルに、ほわ〜んとしゃべった。自分の魅力に気づいていないのか、気づいてても使う気がこれっぽっちもないか。

そんなところに、忍は好感を持った。その彼女が、最初のお昼休み、まだ友達も誰もいない、みんながお互いに様子を見てるさなか、
どどどどど

と地響きを立てながらやってきた。

「忍ちゃ〜ん、お昼ご飯どうするの〜」

初めて会話するというのに、もうファーストネーム。自己紹介を覚えていたら
しい。

「私は、お弁当です」

「わ。あのね、わたしもお弁当なの。一緒に食べていい？」

「私は構いませんが……」

「やった！ お昼一人で食べなきゃならないかと思ってそればかり気になって

たよ」

「……」

「みんなで食べる方が絶対美味しいよねえ！」

「……そうですね」

なぜ私に、という疑問がバカバカしくなるぐらい、満面の笑顔だった。

忍は、自分も恐ろしいぐらい目立っていることをすぐに忘れる。女の子フェチのももにしてみれば、一番目立つ、そして一番美しい子に、声を掛けただけ。

『……悪い人間ではないな』

忍は自分の直感を信じて、質素極まる例のお弁当箱を取り出した。万が一ここでバカにされても、数分、我慢すればいいことだ。

「うわあ……」

予想外に、嬉しそうな声があがった。

「ちっちゃい!!」

それも、予想外の反応だった。確かに小振りだが、女の子ならばこのぐらいは特に……

どすん。

どすどすん。

間もなく眼前に構築される、アルミで出来た高層建築。三段重ね。お弁当箱三つ。アルミの男性用、いや肉体労働の皆様向け古語を用いれば「ドカベン」三つ。これは、もしやして……

「まさか、それを」

「あげないよ!？」

「いや」

誰もそんなことは要求してない。

見てる間に繰り広げられる花見弁当三つ四人前お電話いただければ宅配いたします。絢爛豪華な冷凍食品でんこ盛り、一番下にはまっちらなごはん、いやメシ

がぎつちり詰まっていた。

忍は、座りながら立ちくらみがした。

まさかあれを、一人で喰らうというのか。なるほど、あれほどのセクシーバデ
イはこうして作られるのか。

それをなんとかこらえて、曲げわっぱのお弁当箱を開いた。初日だからとて、
特別なことはしてない。昨日の夕食の残りを詰めた、いつものお弁当。炊き合わ
せは一日置いて味が染み、より美味しくなっている。

「うひょ」

いちいちの嬌声に、いちいち反応してしまう。今度は何だ。あまりに貧乏くさ
いから驚いたのか。

「美味しそう」

呆れた。世辞でもなんでもない。目が銀河になっている。あれほど豪華な弁当
を目の前に広げて、まだなお他人のメシが気になるのか。

「よければ」

す、と押した。忍は、食べなくてもいいぐらいだ。

「ホントに!? うっしやっしやっしやっしや! あ、忍ちゃんもどれでも食べてもいいよ! あ、ハンバーグ全取りだけは勘弁して欲しいかも……あ、あと焼き肉の全取りとローストビーフの全取り……」

「フフフフ……」

たまらず、笑った。肩の力が、抜けた。肩肘張るのを、やめた。

「いいよ、いい。要らないものがあったら」

「そんなものないもの……」

見るからに、好き嫌いなど無さそうである。

「やつぱり、忍ちゃんの好きなもの取って! 私にはどの子を捨てるかなんて決められないよ!」

「あはは、じゃ、ごはん、少しちょうだい」

「ノウ!!」

ももは大げさに頭を抱えてかぶりを振った。実に痛々しい。

「よりによつて一番大切なものををを!!」

……忍ちゃん、ひよつとしてイジメっこ?」

「つたくもーしーがないわねー」

引きずられるようにつるつると、舌が回った。

「好きなもの、つていうから。私あんまり白米って食べないから、あ、久しぶりだなーと思つて。よし、じゃわかった。こっちのお米もあげる。玄米だからちよつと固いと思うけど、よく噛みしめれば味が出て美味しいよ?」

忍は、自分で自分に驚いていた。

私は、こんなペラペラ話す人間だったのか。

「う、うむ。等量交換ならよからお……うむ、うむ」

自分を納得させるように何度もうなずくも。白米を失う衝撃と、玄米に対す

る興味の天秤が、ゆらゆらと揺れているようだ。

そうだ。

この子は、私を、なんでもない普通の人間として見てくれてる。

奇人の子、かわいそうな小さな子でもなく、

奇抜な美貌を持つ、近寄りがたい存在でもなく。

だから、緊張を保つ必要がない。

そして普段から張ってるだけに、緩めると反動が来る。

冷静に分析しながらも、忍は、楽しくてしょうがなかった。

新しい出来事に触れるとき、

新しい自分を見つけるとき、

それが何より、武術で楽しい瞬間である。

「じゃあ交換するね、はい」

「あつ、あつ」

「もう、同じ量か気になるならもがやってよ！」

「い、いや、忍ちゃんを信じるです。信じるです」

「そんなご大層なことか！」

ツツコミまで入った。

生まれて初めてじゃないだろうか。

笑顔が、止まらない。

「……OK？」

「う、うん、た、たぶん」

何度も見直して、ようやくゴーサインが出た。

「じゃ、おまけで」

忍は笑いながら、炊き合わせをもものお弁当の上に、バラバラと降り注いだ。

とたん、予想通り、目に銀河。

「あうゝん、こんなおまけがあるなら早く言つてよ」

「あはは、じゃ、食べよ」

「うん!! ……では!!」

ももは大きなアクションで、両手をあわせて目を閉じた。

「いただきます!」

同じ動作をしながら、忍は思った。

『……悪い人間では、ないな』

『……変わらないな、ももも、私も』

変わったのは、父が猛烈に忙しくなったことと、

『や。ミラクルズがある、か』

食器を出しながら、想い出を繰る。

——美形でかつ人柄魅力もある二人の周りには、自然、人波が出来た。

体育の授業で胡桃と知り合う。幸か不幸か、バスケ。

一目見て、本物。

まず、たたずまいから、そこらの子とは違う。身体のライン、腕や脚の付き方、位置がそもそも違うのだ。腰骨、下腹部がグッと前に出るような独特の姿勢。達人の風情である。

『できる』

動き出せば、もはや誰にも止められなかった。

忍、立ちはだかる。

もちろん、バスケは遊び程度でしか経験がない。が、複雑な戦術やパスワークの攻めではなく、襲い来る選手を止めるなら、いつもやってることだ。

——凄まじいキレと目も眩む速さのドリブルがくる。

胡桃の得意技。

センタープレーヤーにもかかわらず、ガードばりのクイックネスと小技を持つ。彼女の元・所属チームの強さの源泉、それはどの選手もがどのポジションをも兼ねられるフレキシビリティ。素人が相手に出来るレベルではない。

飛ぶ。

まさに飛ぶ。

跳躍などという甘いものではない。羽根が生えたように、鳥が飛び立つように、ありえない位置から水平飛行に入る。そのまま軽やかにボールを、置……くところを、狙い撃った。

パンツ！

手から離れた瞬間、弾いて、得点を阻止した。

——着地すると同時に、胡桃が振り向いた。

一瞬驚愕、次瞬、瞳が、ネコ科の猛獣のように、光った。

『本物だ』

手応え。ボールの行方など見てもいないのに、手応えで、必殺のシュートが入らなかったことを把握したのだ。何千何万と同じことを繰り返してきた人間でなければ手にできぬ、五感外の直感。

そしてあの闘志はどうだ。

静かな、しかし強烈な光の爆発のようなものを、体内に感じる。あれほどのエネルギーの持ち主は、いや、引き出し方を知っている人間は、そうはいない。

挑発するように、顎を軽くしゃくって、斜め下の視線で見てみた。

まるで動じない。

彼女を止めたことで沸き上がるギャラリーの声も、まるで耳に入っていない。

『修羅場をくぐってきている。あるいは、私よりも』

忍の驚きは、すでに敬意に変わっていた。

——ボールが、胡桃に渡った。

美しく伸びる長い手足、ショートヘアに猫目が光る。

さきほどよりもさらに、輝いている。

忍の前。歓声が沸いた。

飛んだ。

今度は「胡桃の」プレーである。忍の手は見せた。どうかいくぐつてくるか。

シミュレート。

TVで見るような背中を回す持ち替えか。

タイミングをさらに遅らせて、着地寸前に上げて入れるか。

あるいは、パスに切り替えて私をあざ笑うか。

どれでもなかった。

忍が垂直に跳んだ瞬間、

グンツ!!

伸びた。

胡桃の身体が、その軌跡が加速して伸び上がった。

『!!』

私の跳ぶ力、すなわち跳ぶ高さや速度を見極めた上で、空中で加速した。もう、手立てがない。間に合わない。

ズガアアアンツ!!!

パシ——ンツ……

ダンク・シュート。リングをはたっておまけつき。

もうギャラリイからは、声も出ない。

もちろん、忍の手ははるか虚しく宙を泳いだけだった。

——とん。

着地して、見られた。

先ほどのような、鋭利な刃物のオーラはもうない。そうして見れば、丸顔が実に愛らしい、猫のような美少女だった。

『どっ・』

さつきの忍同様、顎をしゃくつて斜め下の目線。だがその眼には、微笑みがある。

私の真似？

ツンケンしてるようで、案外、おもしろい子かも。

「二本ずつじゃん。次は止めるよ？」

言つて、髪を縛る紐を解いた。ばさり。振りほどくと、戦闘態勢。

「来い!!」

「……」

無言でうなずき、胡桃も微笑みを消した。

……その後の死闘は、今も学年で語り草になる。

『ついこないだ中学日本一なんだもん、そんなのズルイよね……』

胡桃は、前年日本一に輝いたチームの、センターだった。いわばその時点その年齢で、日本で一番得点を獲れるバスケットボール・プレイヤー。

後で聞いて、驚いた。と同時に、それをど素人の自分が何本も止めたことは、非常な自信に繋がった。

やってきたことは、間違っていない、と。

『……ユミと知り合ったのは、いつ頃だっけ』

頃合いはよく覚えてないが、彼女はもはや胡桃とは逆に、私の「変わった」部分を、積極的に認めてくれる人だ。特に武術・体術に関心がある。さすが学年で一二を争う優等生、知的好奇心が非常に旺盛である。

もちろん、忍も彼女の異国の旅話はいつも面白く聞いた。純和風で、しかもテレビラジオ抜きで育った忍にとって、ユミの話はまるで童話を聞いているようだった。

また、学科の学習も、術理を学ぶのと同じである。

自己の能力の把握、目標への計画立て、実際の学習で使う様々な手法……いわば科学的に整理された手法で問題にアプローチするのが、見ていて非常に参考になる。

そういう話は、二人で論じ出すと止まらない。「語れる相手」というのは、貴重だ。そんな時には、ももはお菓子を食べ出して、胡桃がアクビをして、寝る。

マキは……

『パメラはいい子だねえ……』

手帳を持ち出して、難しい日本語をメモる。

マキといえばアホキヤラだが、それはみんなと本人がそう言ってるだけで、実は結構な努力家だった。さもあるう、地球の裏側から異国に一人でやってきて勉強しているのだ。それだけでも、尊敬に値する。

でもそんなことはおくびにも出さず、もちろん悲壮感もなく、底抜けに陽気で明るく、表情豊か。

人間というのは、そもそもこういうものではないか、と、マキを見るといつも思う。

私達は、余計なものを抱えすぎてやしないか。

好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。楽しいこと大好き、嬉しいこと大好き、気持ちいいこと大好き、そしてそんな時には、全身で笑う。

彼女は太陽だ。居るだけで明るく、暖かく、楽しくなれる。彼女一人が踊り出せば、その場がリオになる。

3年生はチームで唯一五人しか居ない学年だが、2年にも1年にも負けず存在感がある。それはマキのおかげかもしれない。そんな素晴らしい特技を持つ人は、周りを見渡しても、彼女しか思い浮かばない。

『……幸せだな、私は』

いい友人に恵まれた高校生活だった。

そして今は、ミラクルズがある。

2年、1年、みんな、敬意を持って接すべき素敵な女の子達。

ナナの陽気、ありすの人柄、エレーナの優しさ、可憐の本気、千里の元気、流乃のセンス、蘭の自然さ、はなこのガッツ、古都の気配り、愛の雰囲気、明日葉の……その、なんだ、楽しさ。そしてキャプテンの、タヌキっぷりと……想い。

『結局、最後は』

特に美緒の、チームとチームメイトに対する愛情は、嫉妬さえ起きるほど、深く、強い。だからこそ、全員が全幅の信頼を置く。

そして本気になった美緒の、あの爆発的パフォーマンスはどうだ。人間は、あそこまで出来る。

『そこだ。どれだけ、想いを込められるか』

サッカーを始めて、忍の体術は飛躍的に向上した。

「誰かのために」

それがこんなに力を出すとは、思いもよらなかった。

私が難しいシュートを止めるたび、「忍様忍様」と古強者の可憐やナナが最上級の謝意を口にする。胡桃が微笑み、ももが抱きつく。マキが踊って、ユミがガッツポーズをくれる。

それが、どれほどのエネルギーになるか。

『……だから、父も』

父は今、多くの人に求められている。だから、少々の無理をしても、力を出すことができるのだ。

しかしそれにも、限度がある。父の業は、サッカーのように九〇分で終わるものではない。

『……ともかく、力をつけていただこう』

今日は、無理矢理にでも食べさせよう。そして。

『いずれ、母上に』

娘だから聞かぬ言葉もある。また、娘だから、わかりすぎて父の意を尊重しすぎることもある。

『なるべく、早く』

土鍋の蓋を取ると、白い湯気がいい具合に舞い上がった。芳ばしい香りが立ちこめる。

三人で、食卓を囲むまぼろしまで、一緒に。

『……』

それはまだ、幻だった。

蓋を閉めて、道場へと足を向けた。

ス

街で羽根を伸ばして、駅で別れ際。いつものように学校へ帰る道を指すと、

「じゃ、『コーチ』のことしつかり頼むで、『キャプテン』」

「まーったく『コーチ』つてさ、『キャプテン』が居ないと家にも帰れないんだから」

「ふふ……」

うるさい、と。

なぜ大ちゃんみーちゃんではないのか、と。

しかしそれは別にツツコめるようなことでもない。流乃ナナ二人でニツタ〜り笑ってるのがまた、軽く腹立たしい。ここは一つ。

「「じゃね、『キャプテン』」」

「おまかせ〜」

左手を腰に当て右手人差し指を振ってみた。腰をくいっ、と横に出す。

「「……」」

無言の二人を捨て置いて、踵を返してスキップを踏む。

どおだ、声も出ないぐらい羨ましかろお。

——見送る二人、どんなに遠く離れても、小声。コワイから。

「……あれはなんや、まさかアイドル気分とか言うつもりやないやろな」

「まさか。いくら美緒でもそこまでは存分にあり得るね」

「古い」

「今に始まったことじゃないじゃない」

「恥ずい」

「今に始まったことじゃないじゃない」

「若作りが、キツイ」

「いちおー、あたしたちまだ若いよ？」

「あのおぼはんは年齢不詳や」

「あんたに言われたくないと思うけど」

「ウチは『若おぼはん』やねん」

「違いがわかんない」

ほんの少し羨ましい。

まあしかし、それがキャプテンの特権でもあり、苦勞でもある。特に最近、一人とても気になる男の子が居るナナは思う。

『確かに、アレは大変や。みーちゃんやなかったら……ムリかも』

あの大物、難物をモノに……いやコントロールするには、長居美緒ほどの野太い神経が必要だろう。そう、駅コンコースで古式ゆかしき決めポーズを見せちゃうような。

美緒も冷静に見ればすごい美少女なのだが、少なくとも媚びポーズはこれっぽっちも似合わない。通常その場合似合わないこと自体をネタにするが、ヤツは半ばマジっぽいのが、始末に負えない。現実には世の男性陣はほとんどあれに騙されてる。

しかし……騙されないような賢明な例外は、ことさらに彼女を恐れた。二人の

時に、三十六に訊いたことがある。

『キャプテン!?

ぶるる、勘弁してくれ、俺程度でどうにかなるタマじゃない』

じゃウチは俺程度でどうにかなると思うてんのか。

いやまあ、結構どうにかなってんやけど。

それはさておき、そういう意味では、悔しいが、よく似合ってる。悔しいが。

「……ま、ともかく。『アレ』を動かすのは、キャプテンじゃなきゃね」

「せやな。それは、ウチも認める」

「いこ」

「ん」

——暗がりの中、部屋に辿り着いた。いつものように、明かりがついている。
コンコン。

「大地君」

「あ……もうそんな時間か」

時計の針は、夕飯時を軽やかに超えていた。返事がしたので、ドアを開ける。本に埋もれて、机一杯にコピー用紙を散乱させた大地が、ピンクのマークカーをちよつ、と上げた。もう少し待ってくれ、の意。

ならば、と静かに後ろに回る美緒。覗き込む。

おや。キーパー。珍しい。

「……肩、揉んでもいい？」

「ん」

手を掛けると、背を背もたれに預けてくれた。ツボを軽く探って、力をこめる。

「……つく……」

「ふふ、もつとキツく？」

「はは……このぐらいで、ちょうど」

きゅつ、きゅつ、きゅ——つ……

きゅつ、きゅつ、きゅ——つ……

「……こつてる？」

「ん……少し」

かなり、効いた。

ソフトにリズムカルに、優しく柔らかく、でもじんわりじんわりと大きく広がる刺激に、いつしか全身の力が抜けていく。ペンのキャップをはめて、机に置いた。しばらく、身体を預けていると、静かに訊かれる。

「……キーパーは珍しいね。千里？」

「いや。忍様」

「忍様？」

「ん……」

肩の刺激が心地よくて、「うん」の返事が鼻に掛かった喘ぎのようになってし

まう。少し、照れる。

「どこか、問題でも？」

「……美緒は気づかなかった？ 前の試合の失点シーン」

「ああ……」

きゅ——つ……と、一際長く押して、ぽん、と肩を叩く。

「いつもなら、止めてるね」

「だろ？ で、どうして……ってさ。たまたま不調だったらいんだ。だけど、千里ならともかく忍様に、そういう調子の揺らぎは考えにくい。で、僕が思うに」

「うん」

「たぶん、忍様は、あれを捕りたいんだ。キャッチして、リバウンドを狙われる危険を減らし、攻撃に繋げたい」

「うん。キーパーなら、誰でもそう思うだろうね」

「だけどそれはできなかった。それはいいんだ。しょうがない。だけど、忍様と
もあろうものが、失点のリスクまでしょって、そして実際に失点までして、本番
でそんなバクチを打ったのが、どうしても解せない」

「……」

「思うに、忍様は『まず捕るスタイル』と『まず止めるスタイル』の間で、揺ら
いでるんだ。だからその境界線にあるプレーに、迷いが生じてる、だから……」

「……」

大地は、ばき、と机の上の紙束を持ち上げて、自分が見るとも、美緒に見せる
ともなく、ざくざくと繰った。

「こういうスタイルが忍様に向いてるか、どこでそれを線引きすればいいか……
それをずつと、考えてた」

「大地君……」

呆れられたか誉められるか、大地の予想は、外れる。

ぽこ。

「いて。なに？」

美緒の両の手刀が、大地の頭を優しく叩いた。

……ぽこん、ぽこん、ぽこん、ぽこん……

美容室でやってもらおう、頭皮マッサージ。

「考えすぎです」

ぽこん、ぽこん、ぽこん……

頭こつてる、つてことか。

「考えすぎ？」

「大げさだよ、だって7－0だもん。1点ぐらい、どうだっていいじゃない」

「いや、それは……」

コーチとしては許せない。7－0だろうが70－0だろうが、何かなんでも次の1点を狙い、0を守ってもらわねば困る。しかし、

「そんなこと言ったら、ナナのバックパスも私の攻め上がりも、全部ダメってことになっちゃう。あの場面、ちよつとリスク覚悟で、もーさんからフィード一本のカウンターを狙ったんだけど」

それは建前だ。選手としては、せつかくのめった打ち試合、大胆なプレーをピッチに描きたい欲も出る。

「失敗しちゃった。忍様も、そんなところだと思うよ」

「試してみて、ダメでした、残念、って？」

「そ」

そんな簡単なものだろうか。だが……フィールドで間近で見てる、キャプテンの言には重みがある。

「むー……それなら、いいんだけど」

大地がいつものクセで腕組みをしたので、それをほどかせるように、また、肩を揉み始める。

「気になるのなら、ナナや可憐ちゃんに訊いてみれば？ 二人とも、問題にもし
てないと思うよ」

「……」

そういわれてみれば、そんな気も。

……独り相撲か。

首を左右に振ってみた。ぽきぽきと鳴った。

吐く息にまぜて、小さなため息をついた。

しかし、それが見つかからないはずはない。

「……もう少し、強くするね」

ぎゅ——つ……

「んっ……」

美緒の指に、力がこもった。

痛気持ちよくて、自分を責めたり、落ち込んだりする間も無い。

だけでもあえて声にしてみた。

キャプテンだからか、美緒だからか、その両方だからか。声にできた。

「……僕が考えてるより、みんなしつかりしてるなあ……」

「上町コーチの、チームですもの」

間髪入れず。うまいなあ、と他人事のように感心した。

肩の力が、すーっと抜けていく。

手業ばかりでなく、言葉でも、ほぐしてくれている。

「……なんかさ」

「うん」

「もつとやんなきゃ、もつとやんなきゃ、つて思っていたよ」

「もつとやつても、いいよ？ ふふふ」

「はは……」

もつと……倒れるほど、調べたり、悩んだりしていれば、また美緒が、こうし

て肩を押してくれるのだろうか。

支えられてるな。

美緒だけじゃなく、いろんな人に。

昼、同じように肩を叩いてくれた古都の声も思い出した。

自分一人で出来ることなど、たかが知れてる。いや、自分が頑張れば状況が好転すると思いこむこと自体、とても、おこがましいことかもしれない。

もう少し楽に、楽しく。

「……で、忍様は、なんて言ってたの？」

「え？ いやまだ、訊いてみたりは」

「だめじゃないそんなのー」

ぽかん。

また、頭皮マッサージ。今度はわっしやわっしやと髪ごと頭皮を鷲掴み。

髪は……確か、昨日洗った。

「脂、つくよ」

「いいよ。大地君のシャツで拭くから」

「ははは……ごめん。確かに独り相撲だね」

「ううん、そうじゃなくて、なにか気づいたのなら、なんでも声を掛けてあげないと」

「忍様だから任せようと思って……僕、キーパーのことはあんまりわかんないし」

半分言い訳、半分拗ね声。美緒、今度は首筋を揉む。

「大地君はそう思っても、忍様にしてみれば頼れるのは上町コーチしかないんだよ？　嘘でもいいからこうしろって言われた方が、安心するよ」

「そんな極端な」

「それにね」

もう一度、肩に指。ひときわ力を入れて、押した。

「忍様も、女の子だから」

「つつー……だから？」

「ほったらかしは、イヤ」

「……ん——っ……」

なにか言外の意味があるようなその強い刺激に、たまらず背筋が伸びた。

「わ、わかった、わかったよ、美緒。少し、声も掛けてみるから」

「よしよし」

ようやく指が離れた。肩こう骨の内側が、じんじんする。

「痛かった？」

「ちよつとね」

「ちよつと、見てもいい？」

「ん？」

思う間もなく、前に回した手で、シャツのボタンをひとつ外される。斜めに襟

口を引つ張ると、声を上げた。

「あー……真つ赤つか。こりや相当こつてますねえ……」

「そう」

「ま、それだけ一生懸命、つてことだね。えらいえらい」

わしやわしやつ……と頭を撫でられて、思わず笑った。

美緒にかかつちや、子供扱いだ。

「はは……まあ、ね。あ、みんなにはこんなこと、言つちやダメだよ」

「もちろん」

「今晚は貼り薬でも貼つとくよ」

「いやいや。こんなに酷くなったら、そんなのじゃ間に合わないね。血行を良くするのが肝心だから……そうだ、いーこと思いついちゃった」

「む」

「じつとしてて」

なんかこう、ヒジョーにやな予感がせんでもないのだが、好奇心と樂になりたい欲と、それから嫌がると後がヤヤコシイので、じつとした。

シャツが整え直されると、柔らかい圧力がかかって、

ふ——っ……

じわーつと、熱さ。

すぐくやわらかくて心地よい暖かさが、肩に広がった。目頭の凝りが溶けて流れていくような、すごい快感。これは一体……

って！

「み、美緒、ちよっ、それは……」

「じつ・と・して・て」

ふ——っ……

「……あう……」

シャツ越しに、肩に唇押しつけて、息を吹く美緒。

確かに、確かにものすごく気持ちがいい。いいんだけど……

いいのか!?

「……気持ち、いい?」

「いやっ、いや、き、気持ちは……いい……」

「じゃもつとするね」

「んだけど……あう……」

ふ——っ……

すぐ近くに、頬とか鼻とか髪とか香りとか、いろんなものまで感じられる。視界に入らないのがまた、要らない妄想を掻き立てる。

うかつに動くと、どうにかなり、いや、どうにかされそうだった。

ふ——っ……

ふ——っ……

ふ——っ……

『もう……たまんないなあ……』

……なんかいろいろ』

目的とは裏腹に硬直する大地おかまいなし。美緒の拷問、いや治療は、満足りくまで続けられた。

どちらの満足かは、言うまでもない。

父と娘

エプロンを外して、道場へ足を運んだ。

薄い明かり。だが、父が動く気配はない。

『――黙想か』

だが、黙想ならば明かりは要らぬ。技の術理を、沈思黙考されているのか。邪魔にはならぬか……と一瞬思ったが、気を取り直した。やはり、しっかり栄養を摂っていただかなければ。

「……父上」

戸越しに、声を掛けた。反応はない。

「父上？」

外出されたか。いや、ならば明かりが点いてるはずはない。

胸騒ぎが、した。

「入ります」

立て付けの悪い扉を引いた瞬間。

「……父上ッ!!!」

叫んだ。

父は道場の中央で、うつぶせに倒れて、いた。

顔元に、頭のゴムバンドから外れた子機が、転がっていた。

「父上!! 父上!!」

駆け寄り、名を呼ぶ。揺り動かさず、首筋で脈を、鼻元で息を。

——生きてる。

身体も暖かい。まだ、なんとかなる。

なんとかする。

飛びつくように電話を取った。脳なら、一秒が分かれ目になる。握りつぶさん

ばかりに、三つの数字を、押した。

繋がるまでわずか数秒、それが何分にも思える。

震えそうになる手を叱りながら、子機を握りしめた。もう片手で、父の身体を横寝の姿勢に、顎を上げて気道を確保。父に教わった救命措置。まさか、父に使うとは。

首筋に当てた手に感じる、規則正しい脈と体温。

ただそれを抛り所に、精神の平静を保った。

——救急センターとの応答を終えると、痛いほどの静寂が戻った。

忍は父の身体を、覆い被さるように抱いた。

暖めるために。

生命を確かめるために。

一秒も、離れるなんて、できなかった。

思っていたよりも、記憶よりも、ずつとずつと細く、小さな身体に、己の注意

力の無さを恨みながら、己の無関心を責めながら、

「……父上……父上……」

何度もその名を、呼びながら。

ss

睨み付けるように、ただ、父の顔を、見ていた。

「——大丈夫ですから。絶対に大丈夫ですから、安心してください。大丈夫ですから。大丈夫ですからね」

自らに言い聞かせるように、三十過ぎの若い当直医は繰り返した。それでも、そうして患者の家族の気持ちを思ってくれる、その気持ちに信頼が置けそうだった。モノクロームの映像を映しながら、何度もうなずく。

「……おそらく、過労からくる一時的な昏睡です。身体が、スタンバイモードに入っちゃったんですね」

「スタンバイ……」

パソコンなどとは縁遠い忍が怪訝な顔を見ると、
「あの、ま、難しいことはないです。しばらくじつくり休めば。遅くとも明日の昼には、お目覚めになると思いますよ」

と、笑ってくれた。知らず、大きく息をついた。

「ただ」

真面目な顔で、釘を刺す。

「栄養状態もあまりよくないようですし、お体拝見しますとかなりお疲れです。しばらくは入院されて、しっかり休まれた方が」
「そうさせます。先生からも、脅してください」

逆にそれは、ありがたかった。

「ははは、わかりました。……結構、頑固者？」

青年の顔に戻って、お茶目に訊く。またそれで、空気がほぐれる。実は、かなり腕の立つ医者ではないか。

「はい。私の言うことは、まるで聞いてくれません」

「なるほどねえ。いや、まだ四十代でいらっしやるのにピシッと和装されてるから、これは何かの道のひとかどの方かと」

「いえ……」

どう説明したものか迷っていると、それ以上詮索はせず、

「普通、父親は娘には甘いものですけどねえ。いやもう、ウチにもチビがいるんですけど、可愛くてしょうがなくて」

「可愛がつてはくれます。しかし、思う道には、頑固です。先生も、そうではありませんか？」

「うーん……そういえばそうかな。確かに、診察にあれこれ言われちゃ、娘とい

えども黙つてられないですねえ。ははははは……」

信じられる。そう思った。

「……よろしくお願いします、先生」

「わかりました」

医師は真顔で、応えてくれた。

——それから数時間、身じろぎもせず、見ている。

二人きりで知らない空間に居ると、小さい頃を思い出した。

よく、手を引いて、歩いてくれた。

記憶がある頃には、もう母とは別れて住んでいた。散歩。買い物。それに、ごくたまに、行楽地。父はいつも、私の側にいてくれた。

貧乏だった。

でも、満たされていた。

当時から、仲間や弟子が、ひっきりなしに訪れては、笑って話し込んでいった。その折に、さまざまな手土産を置いてゆく。今思えばあれは、彼らなりに父を応援していたのだろう。小さな忍には、お礼ばかり言っていた記憶がある。その後の、彼らのこぼれるような笑顔と共に。

「変わり者」と避けて通っていた街の人も、小さな道場で、剣道といわず柔道といわず空手といわず合気道といわず、子供達に優しく教えるその様を知り、また子供達が楽しんでいるのを知り、徐々に温かい目を向けてくれるようになった。

当時はまだ、そう、あの当直の先生のように若かった父は、今にして思えば、キリリとしたいっぱしの男前だったのだろう。誠実な人柄もあって、子供達の両親にも、人気があった。

自慢の父だった。

だから……どんな鍛錬も、我慢してやった。
いや。

父の組む練習の段取りは、常に「楽しくやること」を大前提にしていた。忍が辛いといえ、違うやり方を考えてくれた。思えば……疲れはしても、苦しんだ記憶など、なかった。それは。

『——コーチ』

ふと、思いついた。上町コーチの、練習と、同じ。

決して押しつけることをせず、私の話に常に耳を傾けて、話し合つて疑問を解決してゆく。今もなんの違和感もなく、武術とサッカーを両立できるのは、二人の師、コーチのやり方が、同じだからだ。

そういえば。

優しく、少し変わり者で、やると決めれば寝食を忘れて打ち込んで、ハンサムで、みんなに愛されて。

そして真剣なまなざしが、誰よりも魅力的で。

『——ファザコンだね、私』

照れて、いつもの方になる。

だから、パパが好き。だから、コーチも好き。

それで、何が悪いって言うの？

大切な、大切な人だった。

守られてばかりだった。

だから……守ることを、忘れていた。

私が、父を。

と、目の前のシートが、わずかに揺れた。

——気がついた。

飛びつくように、頬を寄せる。

「父上」

「む……」

私がわかりますか？

用意したそんな言葉など、出てきようもなかった。ただ、そこで詰まった。ゆつくりと、目を、そして首を巡らせる、父。

「しのぶ」

「父上……」

途端、涙腺に涙がいつぱいになる。

必死で、こらえた。

視線を天井に戻した父は、すぐに状況を呑み込んだようだった。

「……」

何も言わず、ただじつと、天を見つめていた。ややあつて。

「……すまぬ」

「何を申されますか」

声が震えた。もう、隠すつもりも、なかった。

ぽん……ぽん……

きちんとしてる布団を、なお押さえた。

ほんとうは、抱きつきたかった。だが、父の身体を考えて、懸命に、止めた。

「……修行が、足りんなあ……」

しゃがれた、しかしのんびりと、しっかりと、冗談めかしたその言葉に、何かが切れた。

「父上!!」

枕元肩口に、すがりつくようにして顔を伏せた。

「父上、父上、父上……うっ、うっ、ううううううう……」

涙が止まらなくて、嗚咽が止まらなくて、

押さえても押さえても、漏れた。

どうしていいかわからなくて、両手を、目と口元に往復させた。掴んだシート

が、濡れた。

「忍……」

大丈夫だ。私は、大丈夫だぞ。忍。

……すまん……忍」

「うつ、うつ、うぐつ、ううううつ……うつ……」

遠慮の塊のように、小さく小さく縮こまりむせび泣く我が娘。

たった一人の娘に、こんな配慮をさせて、こんな苦勞を掛けて、こんな心配を掛けて、おのれは、一体、何をしているのか。

「忍」

手を伸ばし、その髪に触れた。力をこめると、娘は、可愛い娘は、飛び込んできてくれた。

「うわあああああああああああああ……」

その髪の毛やかさを掌に感じながら、その重みと暖かさを胸に感じながら、己の不明を、恥じる。

「忍。父さん、大丈夫だ。すまぬ。心配を掛けた。忍。もう大丈夫だから、泣きやんでおくれ。忍を泣かせたと思うと、父さん、つらい」

「うつ、うつ、うつ……うつ……」

願いを言えば、聞いてくれた。

なんと素直で、なんと優しい娘だろう。

「……いい子だ、忍。」

「……ありがとう」

足りぬのは、修行ではなく、目配りだった。

宝物は、求めなくとも、ここにある。

「ふう……」

家にたどり着くと、小さな玄関先に、へたり込んだ。

消灯に追い出された。父はもちろん、帰れと言った。「気を遣って眠れない」と言われては、従わざるを得ない。帰る間際にはもう、普段と同じように話し、笑った。娘に助けられたことからか、あるいは修行修行といいながら体調管理もできなかったことからか、終始恥ずかしそうに、頭を掻いていた。

『とにもかくにも、なんでもなくて、よかった』

フラフラ立ち上がると、台所に向かった。

食卓の膳は冷え、乾いていた。

が、見れば、空腹が襲う。激しい感情の起伏に、エネルギーを使っていた。父

を叱って、自分が同じ轍を踏むわけにはゆかぬ。

箸を取る。

せめて熱い湯でも沸かそうかと思つたが、やめた。面倒よりも、こんな状況でわずかな快さを求めようとする自分が、あさましかった。

「……いただきます」

虚空に礼をして、暗がりのまま、箸をつけた。冷えて固まった玄米飯が、茶碗の形ごと持ち上がった。そのまま、齧りついた。

味など、わかりようもない。心ここに、あらず。

いっぱいの胸に押し込むようにして、一汁一菜を摂った。

ごちそうさまを言うと、立ち上がる。

クタクタの足が自然、向いたのは……道場。

明かりが点いていた。

『動転していた。消すのを忘れたな』

しかし、あの状況で電気を消すのも、おかしい気がした。してみると、古の達人達のコミカルなエピソードが、なんとなく理解できた。

生死を賭けた刺客達の一撃を、笑いながら芝居を見ながら小便をしながら、見事避けてみせる。

達人には、電気のスイッチが、見えているのである。

何が起きても、いつもと同じように、消すだけだ。

『……まだまだだ』

しかし、あの父の姿を見て救急車を呼ぶまでの手順と冷静さは、悪くなかった

……と思う。

『いかん』

こんな点まで反省して、自らの栄養にしようとする。

一種おぞましき、道。

『だが』

道場の中央に進んで、落ちていた父の愛刀を取る。これにも、気づかなかつた。抜刀術の鍛錬中だったのか。抜き身でなくて、よかつた。

正座する。

刀を置き、背筋を伸ばし、両手を膝に、黙想する。

『……可憐や胡桃ならば、おそらく同じ』

特に可憐だ。

あれほど普段は表情豊かな激情家が、フィールドに立つと冷徹極まる狩人に変わる。獲物がどれほど哀れで小さな子兎でも、なんの感情も見せずに、一閃のものと噛み殺す。

ああでなくては、達人ではない。

思い立ち、刀を取り、立ち上がる。

息を整え、半眼、柄に手を掛けた。

膝を抜く、足裏を浮かす、身体が沈む、抜く。

パンッ。

右半身、腰を落とした低い姿勢で、抜刀完了。下段の攻撃を薙ぎ払った。切っ先は、畳上わずか数ミリ。

『……駄目だ』

傍目から見れば完璧な、神速の抜刀術も、忍の基準で言えばまるで駄目だった。まったく身体がバラバラで、言うことを聞いてくれない。いや、精神が、身体の各部に言うことを聞かせるだけの力を、失っていた。

『なんと、弱い』

絶望的だった。

いくさ場では、例え身内が死のうと友が死のうと、戦わねばならぬこともある。それがどうだ。もう安心していい父のこと一つで、完全に、精神の強さを、つまりは闘志を、失っている。

これが、幼い頃からあの父にあらゆる術理を叩き込まれ、門下の人々に師範代扱いされる、あの守口忍の正体か。

しかし、その絶望さえ、奮い立たせてはくれなかった。

一瞬の後に襲い来たのは、諦めという名の死神。忍は、抗う術もなく、身体中を崩して、へたへたとだらしなく横座る。

ごとり、と普段あり得ない音を立てて、父の刀が手から離れる。

「……ふ……ふ、ふふ……」

あまりに情けなき過ぎて、笑うしかなかった。

「……はは……は……あはははは、あははははははははは……」

笑い出すと、止まらなかった。

忍は、自分がおかしくなったのかもしれないながら、身体の底から沸き上がってくる衝動に、身を任せた。それ以外どうしようも、なかった。

「……なしゃけねえ……きよれが守口忍ですか、きよんなのが。きよれ

キャッチしてやろう。私なら、このシュートなら、できるはずだ。

そんな気持ちが出てくる時点で負けだ。

そんな判断の前に身体が動かなければ、本物ではない。

要するに私は、その程度の、ゴミのような、クズのような、駄目なキーパーなのだ。素晴らしい選手達が輝くように戦う、ミラクルズに似つかわしくない、相應しくない、そのゴールを守る価値も資格もない、つまらないGKなのだ。

なにより、こんな簡単な事実に今まで気づかなかったこと自体、実に愚かしい。「……やんたってきた」

電球ひとつが眩しくて、身を起こした。座る。

さりとて。

さりとて明日からまた、戦わねばならぬ。

ミラクルズにG Kは、二人しかいない。

そして、千里はまだ、私から見ても、全幅の信頼を置けるG Kではない。
そう。

そう考えれば。

そう考えれば、私しか居ないのだ。

ミラクルズのゴールを守るのは、泣いても笑っても、私しかいないのだ。
だからか。

皆が私を大切にしてくれるのは。

しようがないキーパーでも、他に居ないから、「忍様忍様」と、ああやって持ち上げてるのか。あれは揶揄か。皮肉か。からかっているのか。馬鹿にして、いるのか。

……違う。

あの、あの連中が、あの素敵な友人達が、あの尊敬すべき人々が、そんな卑屈

な人間であるはずがなかった。みんなは、本当のことを言っている。

私は、事実はどうであれ、少なくともみんなには、

少しは、必要とされている。

すこし。

ほんの少し、気魄が戻った。

そうだ。

情けなさに情けなさを、弱さに弱さを上書きして、なんになる。

弱いのなら、ほんの少しでも、強くならねばならぬ。

守るには。

みんなを守るには、父を守るには、

強くなる以外に、手立てなど、無いだろう。

——忍には、宝物にしている言葉があつた。

いやおそらく忍だけではなく、チームのみんなが一人一人、そう思っているだろう言葉があつた。一人、後から別に一人だけで聞いたありすなど、その内容をいくら問うても、顔を真つ赤にするばかりで決して誰にも教えない。

それぐらい大切な、ことば。

ミラクルズがミラクルズという名になった試合。

上町大地が、初めて指揮を執った試合。

ハーフタイムに現れた彼は、さもそれが当たり前かのようにその場に馴染み、さもそれが当たり前かのように、一人一人に、的確なアドバイスを与えていった。砂漠に水が吸い込まれるように、その言葉は一人一人の心に染みこんだ。

今も忘れない、いや、今も実践している、その言葉。

『どんな手段でもいい、とにかく』

その澄んだ瞳が、その瞳に見つめられることが、なんと心地よいのだろう、と心動かした。

今思えばそれは、父と同じ瞳だった。

道を知る者の、己の価値観を信じ、それに殉ずるも辞さない、透明な瞳。

『ボールがゴールを割らなければ、キーパーの勝ちだ。』

勝て、忍』

途端、身体中に力が湧いた。

悩みも迷いも、全て吹き飛んだ。

そうだ、私のやることは、それだけだ。

吹っ切れた忍は、神がかった、いや鬼神そのもののセーブを連発して、勝利に貢献した。それまでもそれ以降も、同じぐらいいいやそれ以上に「当たってる」試

合はいくつもあれど、今も忍のベストゲームは、あれだった。

『勝て、忍』

身体が動いた。

左手が、無造作に投げ出した父の魂を惑うことなく触れ取る。

足、膝下、膝上、腹、胸、腕、肩、首、頭。

脚を投げ出した姿勢から無反動一動作で、風に吹かれた紙人形のように、
ふわり、

立ち上がる。

左手がすでに鯉口を切っていた。右手がすでに柄を包み込んでいた。

重さゼロの紙人形は、そのまま、風に吹かれるがままに、

崩れて、開いて、しなって、揺れた。

——シュンツ。

忍自身が気づいた時には、もう、地すれすれ、まさに一髪の上に、白刃が美しくその身を伸ばしていた。

あまりに完璧な型終わりの姿に、酔いか驚きか、自分自身、動くことができない。

生まれて初めて、これほど完璧な技を出せた。

自分でもまったく理解できないほどの、完全な技が。

今の抜刀なら、父の全力の下段斬り込みでも薙げる。いや、どんな相手が来ようとも、まず、負けない。

まず、負けない。

いや、

勝つ。

「フーツ……」

ようやくにして、息をつく。吐ききると同時に、刀を鞘に収めた。カティリ。

完璧な噛み合いの、静かな音が心地よく響く。

父が手を取ってくれた。

コーチが背を押してくれた。

正座に戻った。刀を置いた。心が平静を、安らぎを取り戻した。

ふう、と緩んだ両の瞼から、涙が一筋ずつ、零れた。

忍は、それをそのままにした。

愚痴も、卑屈も、もう言わぬ。

私は、皆に守られている。

私が、皆を守らないで、誰が守るといふのだ。

守口忍は、ミラクルズの守護神である。

神は、迷いなどしない。

技と心

「……忍様！」

「おー」「わー」「忍」

「しの〜！！」

声を上げて驚くミラクルズの選手達。

練習の終わり。今日は見舞いと聞いた忍が、GKユニフォームで姿を見せた。いつもと同じに、静かな、土埃一つ立てぬ足捌きで、小走りに駆けてきた。

周りに、集まる。

「しの、今日ぐらい来なくていいのに〜！！」

「いや。たいしたことではない。見舞いといつても、することもない」

顔を我が事のようにぐしゃぐしゃにして心配そうに見つめるものに、微笑ん

で見せた。

「……忍様、お父上は」

代表して、コーチが訊いた。

「大丈夫だ。心配を掛けて、すまぬ。

単なる過労に過ぎぬ。目を離すと、布団の上で上半身の鍛練を始めるほどだ。始末に負えぬほど、元気だ」

「そうですか……それは、何よりです」

父と離れ、母はもう世に居らぬ大地の言葉は、深く染み込。

「氣遣わせた。すまぬ。礼を言う」

深々と頭を下げた。勝手に下がった。コーチだけではなく、みなに下げた。

「そんなのいゝより、しのが一番大変なんだものゝゝ」

ももの優しい声が、みんなの気持ちを代弁していた。目を合わせると、にっこりと微笑んでくれた。

まったく、ここは、居心地が、いい。

照れ隠しに、くつろぐみんなを見渡して、言った。

「……練習は、終わりか。間が悪かった」

「忍様、やるならつき合います!!」

千里が右手をピンと伸ばして、大声を上げる。可憐がその肩を抱いて、茶化す。

「忍様、コイツねえ、今日メチャメチャ寂しそうでねえ、『しょぼくん』って一

日中!」

「ばっ、んなことないよ!!」

「「あはははは……」」

肩を落として、背中を丸めて、眉を八の字にして、いかにも情け無さそうな姿をする可憐の頭を千里がはたいて、皆が笑った。忍も思わず、微笑む。

G Kの技術練習は、G K同士コンビを組んでやる。G K同士は、他のどのポジションよりもライバル同士だが、どのポジションよりも、仲間でもある。

「すまぬ、千里。だが、コーチのメニューには従った方がいい」

「でも……」

昨日、父と並べ、改めて思った。

上町大地の、メニューの細やかさと、その考え抜かれた組み立てに。そして彼はそれを、常にその選手の調子や理解度に合わせて、細かく修正していく。

しかし本来、身体の動きの修練、というのはそういうものである。

父ですら、そのように精密に手取り足取り教えられるのは、一度に一〇人、できるか否か、だと言う。それを彼は、一六人を相手に、毎日。

無論、誰一人手を抜いていない。運動のうの字も知らぬ深窓の御令嬢、明日葉を、わずか数ヶ月で絶対的な防御力を誇るディフェンダーに、育て上げてしまった。

『間違はなく天才だ』

向き不向き、という意味では。その天才は、笑った。

「ははは、別にちよつとぐらいならいいよ。特に、本人にやる気のある練習ならね」

「やった！」

「いや、もし借りられるなら」

コーチに向いた。急ぐ話ではない。しかし、身体が疼いていた。忍は、彼女にしては実に珍しく、願望をそのまま述べた。

「可憐を借りたい」

「はい？ アタシ？」

「へえ!？」

妙ちきりんな顔で肩を落とす千里を見て、笑いをこらえるのに苦労する。先ほどの可憐のモノマネ、実によく似ていた。

「いや、千里、すまぬ。気持ちほもらつておくが、実は試したいことがある。パワーとコントロール、それを気配なく出せる、シューターの協力が欲しい」

「なるほど」

千里だけでなく、みなも納得した。力と技もさることながら、「気配なく」と言われれば、経験と実績のエースに限る。オフENS陣への、忍の気配り。もちろんエースは胸を叩いて、承諾。

「そーゆーことなら、まかせてください！ お望みのシュート撃ちます！ 一〇〇本でも二〇〇本でも！」

「そのぐらいで済めばよいが……」

「はい!? マ、マジすか!？」

「冗談だ」

「あははははは……」

笑いながら、不思議な気持ちに囚われるチームメイト。

忍様が、あのモードのまま、冗談を言うなんて、珍しい。

「……よろしいでしょうか、コーチ」

「もちろん。ただし、大事な可憐だ。制限がある。」

……ま、一〇〇〇本以内なら」

「コ~~~~チ~~~~」

「「あははははははは……」」

——二人だけになる、暮れなずむグラウンド。

可憐は、その前の練習で疲れ切っているだろうに、嬉しそうだ。珍しい練習、プレーにウキウキワクワクしてる。根っからの、サッカー好き。少し、羨ましくすらある。

ペナルティスポットを指しつつ、言った。

「……まず、復習をやりたい。狙いは」

「足元ですね。右でいいですか」

鋭い。

顔つきまで違う。普段あんなにおちやらけてるのに、こと、サッカーになると、あんな小さなプレーを、覚えているのだ。

「……いや。狙いはそこだが、右、左、撃ち分けてほしい」

「順番に？ ランダムに？」

「ランダムだ。できれば、蹴り脚も適当に両方を。ただ、P K練習ではないので」

「タイミング外しは無しですね。助走とモーションは揃えます。スピードは」

「適当に。ただ、『レイザードライブ』だけは」

「了解です」

ニヤリ、笑って、助走距離を取った。

改めて一対一で差し向かうと、嫌な圧迫感が忍を襲う。こんな練習でも、可憐からは「点を獲る」オーラが出ている。

ならば、私は逆に。

ボールを、見るともなく、見た。

ふわり、と立った。

忍のその圧力を感じてか、可憐の瞳が、光った。
切り結ぶ。

「……お願いする」

「……行きます！」

右手を挙げて、小さく助走。

シュッ――

パ――ンッ!!

忍の右足が、見事にその目にも止まらぬ高速シュートを、撃ち抜いて、弾いた。
天高く舞い上がるボール。

『駄目だ。読んだ』

「……今の、左が良かったですね、すいません」

「いや」

その心さえ読まれたかのように、可憐が声を掛けた。試合でのあの弾をイメージした初弾。プレゼントボールだ。

「今の調子で、どんどん頼む」

「はい!!」

——二〇本も撃つただろうか。

忍は、全てを見事に、足で弾いた。可憐が先に、音を上げた。

「へこむ〜」

「フフ……すまぬ。しかし、ここに来るとわかっていて足を出すなら、素人でも止められる」

それは嘘だ。例え照準がわかっていても、可憐の弾を弾けるのは、忍だからである。しかし、例えそうだと頭で理解していても、可憐の負けん気が許さないの

だろう。さらに、氣遣った。

「では、次は可憐に決めてもらおう」

「お！」

途端、嬉しそうになる可憐に、

「同じ場所を狙って、同じように蹴ってもらいたい」

「今度は、捕るんですね」

静かに、うなずいた。

「……では、まいります」

可憐も笑みを消して、またあの、ストライカーの顔に戻った。

助走を取って……撃つ。

バシユッ!!

ドーン……

「うし！」

可憐思わず、右手で小さなガッツポーズ。忍が、ゆつくりと立ち上がる。ボールは、身体を倒した忍の右の脇の下ギリギリを、くぐり抜けてゴール。

シューターにすれば、あんなにGKの間近を通ったのに、捕られない。針の穴を通すような、相当の快感があった。例えれば、インハイのストリートで三振を取る、のはこんな感じなのだろうか。逆にGKにすれば……

「むう……」

その快感分、悔しい。

意識して、半分「置いた」プレーをした。インチキに近かったが、右読みで、右足の畳みも、右手の引きつけも伸ばしも、早め早めで動かした。それでなお、間に合わない。

ということとはつまり、絶対に間に合わないのだ。

身体を倒す、その重力加速度以上のスピードには、どうしてもならない。引力は、誰にも等しく作用する。

「……同じ感じで、どんどん頼む」

「ハイッ！」

現金に元気を取り戻した可憐が、嬉しげにうなずいた。その方がいい。気兼ねもないし、ボールも良くなる。

「……行きます！」

——また二〇本も撃つだろうか。

忍は、一本一本、身体の動かし方を変えてみた。倒すだけではなく、ひねってみる、手に意識、手から動いてみる、脚と手を挟むように動かして、脚の感覚を手に乗せてみる……

体幹からスムーズに、準備無しに動かしていくのが守口流の体捌きだったが、あえてそれに反することまでやってみた。それでも、間に合わない。

「……行きます！」

半ばヤケになった忍は、思い切ったプレーに出た。

来る。左。

身体を思い切り、限界まで後ろに倒す。

膝を抜いて背中を抜いて肩を抜いて、足裏を飛ばせて、一気に平たくなる。
すばんッ！

おお見事、ボールは忍の眼前で、その腕にすっぽりと抱えられた。

……だが、違和感。

「しのぶさま……」

苦笑いの可憐に、言われずともわかった。

そこは、思いきりゴールの内側。髪が触れそうに近くに、ネットがある。捕る
捕らない以前に、ゴールだ。

「……わかってる。冗談だ」

負け惜しみひとつ、立ち上がる。

三步前でこれをやれば止められるかもしれないが、他のボールが、止められなくなる。

——弾くしか、ないのか。

「……休憩しよう」

「アタシはまだまだいけますよ！」

「私が、へこんだ」

「あはははは……はい！」

どきり、と胡座をかいた。可憐はそのカモシカのような美しい脚を投げ出して、後ろ手で鼻歌を歌っている。

目を閉じ、頭の中を、真っ白にしてみた。

——やはり、無理か。

捕れないボールを無理に捕る鍛錬をして、身体全体の感覚を歪めてしまう方が怖い。あのボールは、弾けばいい。いやむしろ思い切り遠くに弾いて、リバウン

ドの危険をできるだけ減らす方向の訓練をした方が、よさそうだ。

「……忍様、一つ訊いていいですか？」

「ん」

目を開くと、可憐はいつの間にか、リフティングで遊んでいた。まったく、動いていない時間が無いのかとすら思える。

ぽーんぽーんぽーんぽーん……

糸が付いたように、ボールは空中と可憐の身体のどこかとを往復する。視線こちらのまま。彼女にとってはボールは、手や足の一部と同じだった。

上手いな……と素直に感心する。

「どうして、キャッチにこだわりを？」

「……」

少し、考えて、自分でも意識していなかった、原因らしきものに思い当たる。

「……聖愛学園の、ビデオを見てからだ」

「ああ……藤枝師匠」

藤枝智子。万人が認める高校最強校、聖愛学園の守護神。もちろんのようにユース代表でもNo.1を背負う。フル代表への招集経験もある。若い、実力では女子No.1 GKとの声も高くなりつつある。

「師匠は上手いッスからね〜！ 師匠が守っていると、ホント安心できます」

どんな時でも重厚にどっしり構えて、ぶ厚い守りで敵のシュートを迎え撃つ。冷静沈着、堅牢無比。安定感安心感では、群を抜く。鉄壁の守りを誇る聖愛学園の、扇の要。「師匠」とは言い得て妙、聖愛でも、そしてユースでもそう呼ばれていた。

「安心、か……」

「あ、あ、もちろん、忍様が安心できない、って言ってるわけじゃないですよ！じゃなくて、なんというかこー、ちよつと違うタイプの安心、かな」

「気を遣わなくてもよい。……それに気づいたから、こうしている」

「あー……」

忍は、GKはゴールを守ればいいものだと思っていた。

だが、ビデオで見る藤枝選手は、全く違った。

ボールコントロール。タイムコントロール。オフエンスコントロール。ディフェンスコントロール。

『後ろからの声は神の声』と、GKやDFのコーチングの大切さを教える格言があるが、声だけでなく、プレーでも、彼女はフィールドプレイヤーを、味方も、そして敵をも、コントロールしていた。

劣勢では、時間をギリギリまで費やす。押し込む時は、迷いなく一瞬でフィードする。ディフェンスに的確に声を掛け、陣形を整える。間合いの取り方が実に上手い。

同じGKの忍から見ても、惚れ惚れするような、素晴らしいキーパーだった。あれこそが、キーパーのあるべき姿だと。

「それに、ぼんやりしていると、皆の成長に、置いてゆかれる」

「……」

特に本番の予選が始まる前後から、チームパフォーマンス、個人パフォーマンスが、それこそ日一日と伸びていた。忍が持っていた、子供の頃から鍛え上げた貯金など、瞬く間に無くなった。常に同じプレーをしていては、成長はない。そんな気持ちだが、新しい技への渴望を生んだ。

まず第一歩として、ボールはできるだけキャッチする。

もちろん、知識としては知っていたが、それが試合を支配する効果を生む、と、藤枝智子のプレーを見て初めて実感した。このあたりの感覚は、高校から、かつフィールドプレイヤーの経験がゼロの忍には、わからなかったところだ。

なれば、最も簡単に見えて最も難しい、足元を。

「でも忍様、ホントに。ゴール守る、っていう点なら、忍様も師匠にこれっぽっちも負けてません。いや、ホントにお世辞じゃなくて、守るだけなら、忍様の方

がちよつぴり上かも」

照れるセリフだからか、可憐は額の上でボールのバランスを取りながら、言った。将来、代表の9番をになう逸材にそう言われては、悪い気はしない。

「フフ……ありがとう」

ならばなおのこと、自分の得意技……「まず守る」ことを、徹底した方が、いいのかも、しれぬ。

考える。

しかし時間が……無い。

これからどんな強い相手と当たれば、先日のような実戦での試技じみた真似はできない。実戦で使う経験無いままでは、いざという時に……

いやしかし、どんな技も、武の技はぶつつけ本番ではないのか。

命のやりとりでは、技が出る時とは、相手か自分か、どちらかが倒れる時ではないのか。

「……忍様、迷ってます？」

「考えている」

頑固なんだから……と可憐は心の中で苦笑した。悪い気はしない。だって、自分もそうだから。

「そーゆー時は、思い切ってコーチに訊いてみるべきですね」

「……コーチには、負担を掛けたくない」

「忍様」

ボン、とボールが地面に落ちる音がした。目を上げると、可憐が足を載せて、腰に手を当てていた。顔は、真顔。怖いほどの。

「もう、掛けてます」

「む……」

「古都に聞きました。コーチ、昨日、山のようなキーパーの本に囲まれて、うんうん唸ってたって」

「……」

まさか、と思った。

しかしそれは、充分に予期できたことだった。

合わせた目を背けたのは、自分。

「あ、責めてるわけじゃないですよ、それが、コーチのやり方だから。あたし達にはどうしようもないし、何を言ってもそうするだろうし。ただ」

「……」

「コーチは、あたし達のことを、死ぬほど考えてくれます。

いつも」

可憐は言いながら、覗き見たノートに書かれた一節を思い出した。

文字通り死ぬほどの、自分への想いが凝縮したあの言葉。

あたしは、一生、忘れない。

「だから、今さら何訊いたって、何してくれって頼んだって、同じです。もう苦

勞させてるから。へへへ」

可憐は笑うと、リフティングに戻った。忍はそれを、黙って見つめた。

なればこそ。

なればこそ、だ。

コーチも気づかぬような凄い技で、

止められないボールを止めて、捕れないボールを、捕りたい。

それが教えを受ける弟子の、師に対する唯一の恩返しではないか。

師を上回る、ただ、それだけが。

見つめる先ではボールが、踊っている。まるで命を持つかのように、可憐の身体にまわりつく。頭、肩、胸、腿、膝、脛、足、また頭、そして頭頂で、ぴたり、バランス。映画のCGでも、見てるようだった。

目が楽しむと、肩の力も、抜けた。

「可憐。根を詰めても、出ぬものは出ぬ。今日はここまでにしよう。礼を言う」

「いえいえ。それはそうですね。じゃ」

ぽん……

頭のとっぺんのボールを、ごくわずか跳ね上げた可憐は、そのままぐつ、としやがみこんだ。しばらくして、

ぽとり。

前に倒したうなじに、ボールが見事に乗った。

「可憐!!」

「わ」

驚いた可憐が、ボールを取り落として尻餅をついた。

——考えるより先に、大声が出た。

おかしい。

何かがおかしい。今の動きは、何かがおかしい。

「すまぬ。今の、今の技を、もう一度やつてくれぬか」

「へっ!? や、技つてほどたいしたもんじゃ……じゃ、じゃあ」

立ち上がった可憐、もう一度頭頂に置いて、

ぽんっ……ぐっ……ぽとり。

ボールをうなじに乗せたまま、四つん這いの可憐がぐぐもった声で言う。

「これ、最後乗せる瞬間が見えないから難しいんですよ。感覚掴むの練習で。

というか、頭からどのくらい上げるか、それを一定させるのがコツかな?」

忍はまるで別の所を見ていた。

ぼんやりと、ほんの一条、光が見えたような気がした。

また、怒鳴った。

「可憐!!」

「わ」

「すまぬ、あと二〇分、あと二〇分つき合ってくれるか」

「あ、は、はい、それは別にいいですけど……次は、どんな弾を？」

「二五分は私にくれ。そこで休んでてくれていい」

「え？」

問う間もなく、忍はいつものポジションにすつくと立つと。

コロリ。

転げた。

立ち上がった。また補球姿勢を取って、

ゴロリ……

……バタリ……バサリ……バタツ……バサツ……ゴロン……

可憐の姿など目に入らぬかのように、真正面を見据えたまま、その美しい髪を泥だらけにして、その美しい顔を砂だらけにして、様々な角度、速度で、転げ回り始めた。鬼気迫るその様は、知らぬ者が見れば狂ったかと思うだろうが、

『……来た、かな？』

自分にも経験のある可憐は、熱い視線でそれを見た。

リフティングを再開する。しかしもう、曲芸ではない。ボールの中心をよりの確に感じる、真剣勝負。

いざとなれば、『レイザードライブ』も撃たねばならぬ。

もしそうなったら……どちらが、勝つのか。

楽しみも恐れもあった。しかし、

『……負ければまた、鍛えればいい』

さつきまでとは桁違いのワクワクに身を震わせながら、身体を暖める可憐の前で、忍は、一心不乱に転げ回っていた。

翌日の練習には、頭から顔を出す忍。

「……いや、来客が多いので、夜にゆつくり来てくれ、と父が」

留守電に入れていた。まいった、と言いながら、どこか嬉しそうな父の声。さもあるう。数多くの人々に、心配してもらえる。それは単純に、とてもありがた
いことだ。しまいには、「私は病人だぞ」などと、父らしからぬ冗句も出た。

大拙の多忙に遠慮がちだった旧友達も、ここぞとばかりにやってくる。昨夜は、
自宅の電話が鳴りやまなかった。

——練習スケジュールは、熱くしかし淡々と進む。

身体をほんの軽くほぐした後、五分単位で区切られた基本全体練習を一時間。
ここが一番、密度が濃い。休憩を挟んで、個別技術練習、一時間。ごく軽く、ク
ールダウン。それだけである。陽が落ちてなおやる、というスパルタではなかつ
た。

大地は己の経験から、一日に六〇分ステイントが三本、それが「訓練」の限界だと考えていた。身体よりも、頭脳の集中力が持たない。集中力がなければ、技術は向上しない。できれば三本行きたいが、授業のある学生では、これが目一杯、子供の頃から、はるかにキツイ練習を父や兄とやってきたナナなどは当初、「甘つちよろい！」と否定的だった。仲良しクラブでよかった去年とは事情が違ふ。これだけの選手が揃っているのだ。欲も出る。鍛えれば、なんでもできるというのに……

だが、一月もしないうちに、慣れた。

そうになると、いかに自分が無駄の多い、ダラけた練習をやっていたか、痛感した。いや、初めは一生懸命やつてたつもりだった。だが、区切りが遠いと、ふと気を抜くと楽をする。ヤバイほど時間が足りなければ、そんなおそれもない。

凝縮。時間と空間の。

大地の練習には、その要素が多い。5対5ミニゲームも、徐々に、小さなコー

トに押し込めていく。スペースがない。すぐ隣に敵選手。動作の「速さ」だけでなく判断力を含めた「早さ」と確実性がなければ、なにもできない。

事実最初は、なにもできなかった。ただ、ボールがウロウロするだけだった。それが今では、見るものが見とれるほど、空堀などは「コレの方がおもしろいんじゃないのん？」と言うほど、スピーディで機敏で目まぐるしい、サッカーの試合になっていた。

いつしかナナも可憐も、同様にキツイ練習に慣れていた胡桃もエレナも流乃も、何も言わなくなった。いやむしろ、率先して密度を上げ、早さとの確性を追求した。

それがプレーに、ダイレクトに結びついた。

やれることを、できるだけ素早く、しつかりやる。

簡単なようだが、敵のプレッシャーの元では一番難しいこの命題を、ミラクルズの選手達は非常によく遂行した。

それが、チームパフォーマンスに直結する。

特に、受け身になる守備ではなく、自分達のペースを掴める攻撃で、それが実を結んだ。ボールを奪つてからの電光石火の組み立ては、個々の能力だけではなく、その個々を繋ぐネットワーク、その早さが生きる。

「少しずつ相手より早い」ことが積み重つて、大きなズレが生まれ、敵の守備を破つて、ゴールを奪う。

個々の能力を短期間で急激に向上させるのみならず、そのセル同士のネットワークを徹底して磨くことで、全体としてのパフォーマンスを飛躍的に高める。

忍はその方法論にも感心したし、現に、それを具体的メソッドのレベルに落とし込み、少しずつ身につけさせていくコーチの知恵と根気と細やかさ、そして優しさには、脱帽するしかない。

上町大地が、普段あれほどブーツとした、鈍感さんなのは、しょうがない、と思う。

サッカーで、全てを使い切っているのだ。

厳然たる事実として、結果も出ている。少し、格下を相手にすると、二桁ゲームが連発した。サッカーでは、いかに格下でも難しい。また、同格あるいは格上の相手でも、一旦ギアが噛み合いネットワークが発火し波に乗ると、もう全く止められなくなる。

チーム名「ミラクルズ」とはよくつけたもの。

奇跡のような大逆転を、当たり前のように起こせるチーム。

その、最後をこうして守れるのは……

「……楽しい」

「ん？ 何か言いました？ 忍様」

「いや。なんでもない」

笑顔の千里と、シューター役を交替した。

父との武術の鍛錬も、とても楽しいものだった。自分の身体が、またその使い方が変わっていく驚きと喜び。

小学生の頃、友達の女の子をいじめる男子達を、ばっさばっさと投げ飛ばしたことがある。そんなことは、忍にとつては造作もないことだった。コツを掴めば、誰にでもできることだと思っていた。

だが、魔法のように軽やかに投げ飛ばしまくる忍を見て、男子達は「魔女、魔女」と恐れおののいた。

『魔女だったり神様だったり、忙しいな、私も』

しかしその時初めて、自分のやっтерることが、そして父のやっтерことが、み

んな——大きくなつて、「世間」という便利な言葉を知つた——と違うことを知つた。

そんなやりとりを、父に言うと、叱られるかと思いきや、大声で笑つた。

「悪いヤツは、投げ飛ばせばいいんだ」

シンプルで明快な答えに、胸をなで下ろしたのを良く覚えている。

だがそれ以来、喧嘩では使つたことはない。

倫理的な自戒ではない。レベルが違うのだ。素足で駆ける相手に自転車を使うような真似は、なんとなくやりたくなかつた。

しかし……せつかく日々身につけていくいろんな技を、術を、体捌きを、ただ、道場で己を磨くためだけに、というのにも、いくらかくぐもつたものを感じていた矢先。

サッカーと、出会つた。

「……サッカー同好会でゝす！ 入りませんかあゝ！

ウチ、こう見えてもユース代表でつせゝ！ えっへん！

あ、初心者の方でも手取り足取り腰取り頭取り教えまっせ！

練習も厳しいです、楽しくやりましょゝ！」

「……ねね、しの、サッカーだつて」

あの日のことは、鮮明に覚えている。

食堂で、おさげの、丸顔のとても可愛い新入生が、サッカー・ユニフォームで、背を伸ばして笑いながらぎゃあぎゃああと関西弁で叫んでいた。

うるさかった。

だが、どうにも、ひっかかった。

よくある泡沫同好会の呼びかけではなかった。新入生のクセに、なにか堂々とした、自信のようなものを感じた。

——忍はその頃まだ、「ユース代表」というものがどれほどの価値を持つものか知らなかった。それは、代表の青いユニフォームだった。胸には名前と同じ、「7」。

「無くした、言うてパクツたつた」

代表のユニフォームは返却が基本である。あの頃から、あの子は、無茶苦茶だ。その横で、こちらは白い、街で売ってそうなシンプルなユニフォームに身を包んで、いくらか気恥ずかしそうに手伝ってる女の子がいた。初々しいその様子、こちらもかなりの美少女である。少し鼻に掛かった甘い声で、

「いかがですか」

と微笑んでいた。

思い出すと、嘔き出す。主将はあの頃から、狸流木の葉術大全開だ。

「……もも、別にサッカーなんて興味ないでしょ？」

「うゝん、わたしこう見えても運動得意なんだよ？」

「『デブ』ゲーノージンにも運動得意な人多いモンネ！」

「ま」

「ぶっ……くっ……マ、マキ、それは、失礼よ……ぷ」

「ユーミも笑いたいのら笑ってよも！」

ど、ど、くーちゃん、ね、ちよつと話聞いてみない？」

「サッカー……やったことない」

「なぐに言ってるんだよ、くーちゃんだつたらどこのクラブもちよ大歓迎に決まってるじゃない！」

『……運命、というものがあつたのなら、これはそうかもしれない』

思えばどうしてもが、あんなに熱心にみんなを誘つたのか、わからない。後から訊けば、本人もわからないと言う。ダイエットになるかな？　なんて軽く思

った程度だそうだ。

「しの、ね、しのもそうじゃない、学校でも身体動かすとか！ ほらほら、技の応用ができて、研究も進むかもよ」

「むう」

それもそうだ。

過去に様々な武術・武道を研究・実践し、あらゆる場所へ出かけあらゆるジャンルの人々と交流のある父と違い、自分にはそうした経験も、ネットワークもない。そんな不満が、ボンヤリと鬱積しているのは、感じていた。

ももが、あとの四人を引きずるようにして行つた。

するとその関西弁の（後で聞くと大阪弁だそうだ。彼らはここに非常にうるさい）女の子は、大声を上げ、いきなりももに抱きついた。

「うわあ~~~~!! 五人も!! 大漁や~~~~!」

も~~~~逃がさへんで~~~~!!」

「きや~~~~!!」

ん~~~~…

入った!!」

「決まりやッ!!」

呆然とする間に、話がまとまった。

女の子大好きのものには、一番効く攻撃だったらしい。

——そこからは、ズルズルと。

やってみれば、こんなにもしろいスポーツがあつたのか、と思った。

なによりひかれたのは、「個性を活かす」ところ。

ももはその巨体を活かしデیفエンス真ん中に突つ立つ。脂肪分で、壁を作る。

その前で、ジャンプと接触プレーに慣れた胡桃が、ポンポンとボールと刈った。

さらにその前で、ユミがその火の玉のようなガッツを剥き出しにして、猟犬のように駆けまわる。マキはその快足と本国での経験を活かして、最前線で踊る。私は……

最後方、最後の砦となり、ボールを、敵の攻撃を、全て凌ぐ。

耐えて、しのぶ。

これ以上の適職は、ありえない。

また、ヴェテラン・ナナのプレーと対峙していると、感じたこともないような闘志も湧いた。

小馬鹿にするようなフェイント一つで見事にゴールを割られた悔しさ、驚き、あれは忘れられない。

己のやってきたことが、いかに限定された環境で硬直したものが思い知らされた。古の達人達は、こんな環境でも見事止めてみせるだろう。

まだまだだ。

きつといつか、全てのシュートを、誰のどんなシュートをも、止めてみせる。
いつしか。

武術の鍛練よりもサッカーにのめり込んでいた。

父は、この時も予想に反して、まったく反対しなかった。またもや、すごく明快だった。

「やりたいことがあるのなら、それを思い切りやった方がよい」

思えば父は——私に、武術を教えたかったのではなく、武術を通じ、なにかに打ち込むこと、上達していくこと、成し遂げること、それによって生まれる自信、自分への信頼、そうしたものを、教えたかったのかも、知れぬ。

「なにかを極めれば、なんでも極められる」

父の口癖の、ひとつだった。

術一つ極めれば、他の術でも、という狭い意味ではなかった。

そして現に、サッカーを始めてから、術理の研究も飛躍的に進んだ。昔は全く

齒が立たないと思つた父の技、それを、部分的にも凌駕できるようになつたのは……ひとえに、サッカーのおかげだ。

——練習が終つた。

密度の濃いそれに、心地よい疲れはあつたが、まだ、やることがある。

「……可憐」

「もちろんです！　ちゃんと許可取りました！」

皆まで言う前に、やる氣十分で駆け寄つてくれる可憐。コーチに許可を取り、シュート練習の振り替えまでしてもらつたと言う。

「すまぬ。わがままを言う」

「いえ。あたしの方こそ、昨日は凄くいい練習になりました。基本シュート練習と同じなんですけど、ちよつといい加減にやりすぎてた、と反省しました。今日も、ぜひ」

「うむ」

シンプルな基本練習は、上級者がやれば、単調な練習にはならない。一本一本を深く反省し精密に行うことで、逆に非常に効果的な練習になる。可憐は、教わらずとも、そういう意識をもったり、自分の身体の変化で、そういう効果を見極めることができるのだ。まるで、野生動物。

そうまで言われては、遠慮は要らぬ。

「行こう」

「忍様あ！」

すつとんきょーな、ちよつと情けない声が後ろから掛かった。

振り返ると、千里がその声よりもさらに情けない顔を見せる。

「私も〜」

「……」「あー……」

思わず可憐を見て、目があつた。

「うわ——！ 仲間外れいや——ん!! 秘密練習する——い!!」

「いや、ではなくて」「や、そうじゃなくてさ」

泣き出しそうなマネをしている千里に、説いた。

「やつてることは、普段のシュート練習、PK練習と同じだ。変わったことはない。いや、同じ所にばかり撃つてもらうので、より、つまらぬ」

「こそ、なんか特別なこととかやつてるわけじゃないし、忍様なりの微妙な身体感覚？ それ見つける作業みたいなもんでさ……」

「ううう」

「コーチの練習では足りぬのか？ なら、口添えする。直接コーチに言おう」

「へっ!? いや、そゆわけじゃなくて!」

コーチの名を出されて、千里は慌てに慌てた。可憐が助け船を出す。

「てかさー、じゃ、今日は見学してみたら？ どんだけワケわかんない練習か、すぐわかつから。ね、忍様」

「そうだな。フフ……私が一人で転げ回ってるだけだ」

「エヘヘヘ、その横であたしが遊んでるだけですな」

「うう……なんか二人でいい感じなのが疎外感……」

——千里は制服に着替えて、ゴール裏で体育座り。頬杖をついて、二人の練習を見ていた。

『……確かに、ワケわかんないな』

一本、シュートが足元に飛ぶ。それを、忍様は、奇怪なポーズで捕ろうとして、捕れない。すると、次の数分、忍様はゴロゴロと転げ回る。可憐はその間、リフティングで遊んでいる。そしてまた、一本。今度は違う変なポーズで、捕れない。またゴロゴロ。一本、捕れない、ゴロゴロ……

数十分もそれを繰り返したところで、さすがに「どういう意図か見抜いてやろう」という根気が尽きた。頃合いを見計らって駆け寄って、訊いた。

「……忍様、なんすかこの練習？　どういう目的です？」

「へへ、わかんねーだろー」

「あんたにや訊いてないよ！」

「フフ……いや、簡単なことだ。可憐、一息」

「ういゝつす」

手ぬぐいで汗を軽く拭いつつ、忍は右の足元を指した。

「……このあたりのボールを、キャッチしたい」

「ああ……その辺、難しいですね！　でも、捕れるにやこしたことないですし。でも、間に合わない……」

うんうん、と腕を組んでうなづく千里。GK同士、話が早い。

「だが昨日、可憐にヒントをもらって、ひとつ、気づいた」

「ホントか！？」

「ホントだってば!!　てか忍様の話を聞け！」

「あ、す、すいません」

「フフ……それは身体の使い方感覚なのだが……

要するに、身体を『落とす』と間に合わない」

「ですね」

「ならば落とさなければいい」

「……？ それは」

「『たたむ』のだ。やってみよう」

シュツ――

言うが速いか、忍の姿が消えた。

千里、慌てて視線を下げて、確認する。

身体を屈曲させて、しゃがみこんただけである。だが、そのスピードが、千里の良い動体視力を持つてしてもなお、残像も残らない。

「……す、すごい、こ、これってどういう!？」

「身体の各部分を、それぞれ同時に下へ動かすような感覚だ。足も膝も腰も腹も胸も腕も首も頭も、同時に下へ」

千里、しゃがみこんでみた。

違う。抜本的に違う。

「じえんじえんダメ」

「わかつてる言われなくても！」

「ふふ、さすがにこれは、一朝一夕では身に付かぬ」

千里の、トータルでの運動センスはチーム屈指だったが、で、あるがゆえに逆に、今までの常識を超えた動きに、感覚がクラクラする。

「下手に意識するとフォームを壊す。忘れてくれ」

「で、ですよね……う、うん……」

でも、これなら！」

「うむ。上手く畳めれば間に合うと思うのだが……今のように正面なら、抜刀や

体術にもあるのですぐできる。が、体側で、横あるいは斜めに身体を折りたたむ技、これを私は、まだ持たぬ」

「な、なるほど」

千里、ラジオ体操のように横に身体を曲げてみた。

これで「たたむ」なんてのは……ものすごく難しそうだ。

「で、昨日から忍様は転げ回ってるってわけ」

「うむ。可憐のリフティングが身体の『折りたたみ』を気づかせてくれた時には、もらった、と思ったのだが……もう一押し、足りない」

「うーん……足元、ですよ……」

千里、軽く親指の爪を噛む。真剣そのもので、可憐の足元のボールを見た。自分なら、どうするか。

……閃いた。

うん、あたしは、あんまりそんな難しく考えない。

いつも、同じ。

「可憐！ 一本！」

「えー、あんた制服じゃん！ 汚れるよー！」

「かまわない！ 一本！」

「千里」

忍の掛けた声をわざと無視、ぶわさつ、と上着を脱いで、大きく投げ捨てる。

ほら、もう、泥だらけ。

戦闘態勢を取る。

忍よりもお低い、地を這うような、アメリカンフットボールのラインメンのような、千里独特のそれ。忍が無時間で静から動に変わるなら、千里は動そのものを、静に封じ込めていた。

「……うし」

可憐も眼差しを変えて、リフティングを止める。

コイツはこーなったら、言っても聞かない。

忍、感情を全て殺した。外していたキーパーグローブを、手渡す。無言で受け取る、ボール睨め付けたままの千里。上着を拾ってやって、下がった。

グローブをつけるのを確認して、可憐、かつきり五歩後退。

ぴたり、静止。一瞬の、間。

刹那。

だッ――

可憐が、そして千里が、大地を蹴った。両者、猛然たる勢いでその距離を詰め
る。

『ムッ!』

が。

ずさつ……

矢のように突進する千里の身体が、バランスを崩した。

『いかんッ!!』

思う間もなく、そして可憐が修正する間もなく。

ズガンッ!!

足を滑らせて転けた千里の顔を、至近距離から可憐のシュートが直撃した。ボールが、まるで冗談のように跳ね飛んでいく。

「ちー!!」 「千里ッ!!」

顔を両手で押さえ、声も出ない。が、駆け寄ると、ジタバタと足を掻いた。死んではない。

「……し、死ぬー、死ぬー、死ぬー」

大きく弾いた、ということは、それだけエネルギーがボールに乗ったまま、ということである。元気なその声に、二人はほっと、胸を撫で下ろす。

可憐が無理矢理めくつてみると、おでこが真っ赤。幸運か千里の反射神経か、ヘディングになっていた。

「バッカ、んなスニーカーじゃ滑んの当たり前じゃん！」

「アンタこそあんだよその親の仇みたいなシュート！ 今は練習！ 練習だろ練

習!! 手加減しろつつーのも——!!」

「可憐、私の手ぬぐいを絞ってもらえるか」

「あ、はい！ つたく世話焼かせやがつて！ バカ！」

「アンタにだけは言われたくな……っあ！」

怒鳴る千里を、忍は軽々と持ち上げた。

「し、忍様、いいです、歩けます、大丈夫です！」

「そこまでだ、気にするな」

お、お姫様だっこなんて、あたし、一生縁がないものだと思ってた。し、しかも女の人に……

なんだか身体中がカーツと熱くなる。

校舎のそばの、芝生の木陰に横たえられる。細くて滑らかな指で、グローブも脱がせてくれた。ドキドキしながら、なされるがまま。

「……す、すみません、なんか、邪魔しちゃって」

「気にするな。……フフ」

「うー……」

照れる千里に、思いがけず、笑みが出た。この連中は、どうしても真っ直ぐなのだろう。

シューターの足を襲い、シュートを撃たせなくする。

それなら確かに、どんなシュートも止めたことになる。

だが、なんでもかんでも飛び出せばいいというものではない。あるクラス以上の熟達になれば、その隙を狙ってくる。そもそも、今やつてる練習はそうではな

く……

……いや。

違う。

千里は、一〇〇%正しい。

現に、不意打ちとはいえ可憐の剛弾を弾いて見せたではないか。

『——これか』

——ポン。

ポン、ポン、ポン……

頭の中を整理しながら、もう解けそうな方程式を解く、軽い興奮と開けていく感覚を味わいながら、千里の胸のあたりを、赤ん坊をあやすように、軽く叩いた。感謝の表現だった。

「……あ……」

千里、猛烈に顔が熱い。でもそうしてもらえるのは心地よくて、されるがまま

になっていた。

——可憐が忍の手拭いと、自分のタオルを濡らしてきた。手拭いを額にそつと置くと、千里の足元にしやがみ込んで、その細く健康的な脚にこびりついた泥を、タオルで拭き始める。

「……ッたく、飛び込み一辺倒じゃいつか頭蓋骨蹴り碎かれるよ?」

「今日は滑っただけだって見りやわかんだろ!? あにさ、シュート弾かれて悔しいのかい?」

「キーツ! あんな卑怯な手があるかー!」

「戦いに卑怯も何もねー! ね、忍様!」

「フフフ……」

お互いを大事にしているのに、口で殴り合う可憐と千里。微笑ましい。

わかつてみれば、空気のように当たり前のことだった。

弾くとか、捕るとか、それよりももっと大切なことがある。

こんな簡単なことに気づかないなんて、私はやはり……

「はいはい、もうおわりもうおわり！」

忍様、こんなのほつといて、もうちょいやりましょ！」

「いや、可憐、……千里」

「はい？」 「はい……」

修行が、足りぬ。

もつと真面目に、もつと真摯に、そしてもつと楽しく、もつと激しく、己を鍛え上げねばならぬ。

「うふふふふふ……」

「?」 「?」

自分を縛り上げていた鎖を、初めて自分で、解いた。

「……見つけちゃったような、気がするよん」

「え?」 「忍……様?」

「うん、あのね、たぶん大丈夫。ううん、完璧ばつちり問題ナッシン、絶対に大丈夫。間違いないよ、つかだっていつもやってることだもん。にゅふふふふ、こんな簡単なことに気づかないなんて、私もまだまだ未熟だわ」

GK姿なのに、いつもの守口先輩。初めてみるそんな姿に、面食らう二人。だが忍、お構いなし。

「あ、なに、すつごい不安そう。大丈夫大丈夫、この守口忍を信じなさいって。あ、ちゃんと家の道場でもチェックしとくし。それよりカレ、こんなこまかい

練習にしつこく付き合わせちゃってごめんね、それにちーちゃん、君のとのおとゝい犠牲のおかげで、ひとつ、壁を乗り越えることができました。ありがとう」

「は、はあ……」 「忍様……」

「てな——こと——で——。」

「ていあんで——す」

すつく、立ち上がって、右手人差し指を高く高く上げて、伸びをした。梅田先輩の真似だ。さすがに回数浴びてるだけあって、そっくり。

「えすぼわ——」

「ぶっ！」 「……あはは！」

もも先輩独特の甘ったるい節回しと、脳天気極まる言い方がとても似ていた。ま、どっちでも。

厳しくても明るくても、頼れるGKでも愉快なおしゃべり娘でも、忍様は……忍様。

忍様がいいというなら、私達には異論はない。

「「奢りッスか！」」

「あう。しょ、しょがないね、今日は二人の勇者に感謝デー！」

「やりい！」「いやっほうお！」

「ドーナツ屋さんの方が良くない？　ねね、いつも行ってるドーナツ屋さんの方が馴染まない？　いつも食べてるドーナツ屋さんの方が、安心できない？」

「いえ全然」　「エスポひさびさー、やつぱあたし達だけだとちよっぴり敷居高いよなー」　「こそ」

ちなみにドーナツ屋さんは、ミラクルズはタダ。『エスポワール』は、ちよっぴり取る。

「「喰うぞ——!!」」

「はは、は……お手柔らかに」

額赤いまま跳ね起きる千里、ジャージ着こんで帰宅準備完了の可憐。

「あ、カレ、着替えなくていいの？」

「ヤー、これつくらいの時間に」

もう、オレンジから蒼に変わっていた空を見回して、可憐が苦笑い。

「部室行くと、割とやなものがよく見られるもんで。そのデンジャーを避けたいかな、って」

千里と忍はそのデンジャーが何か、三秒ほどで思い当たった。

「ああ……ひよつとして私達、いわゆる『負けてる』ってヤツ？」

「喰いましょう!! 全てを忘れて喰いましょう!!」

腹が一杯になると、頭が空っぽになります!」

「そしてそこに、夢、詰め込めるしね」

「いいこと言うなあ、さすが忍様!」

「腹一杯だいさんせうい!」

「なんだよアンタはもういいだろー勝ってんだからこの二股女!!」

人が強くなるには、何かひとつの種が必要だった。
ウチの連中は、みんなそれを、ひとつずつ、持つてる。
私の場合は、なんだろう。

「行こうか!!」

「はい!!」

考えるまでもない。

この素敵なみんなを、守ることだ。

∞

「――忍。上機嫌だな」

「はい。今日はひとつ、技が完成した感触が得られまして」

「ほほう」

ゆつたりと、ほの暗い個室に言葉が流れた。

六人部屋に、と父は言ったが、なにせ来客がきわめて多い。その方が迷惑だ、と個室を借りたまま。見舞いの品が、ベッドサイドにまさに山になっていた。花など、どこのパチンコ屋が新装開店したのかと目を疑う。

しかしそれでも父には、もちろん、娘の訪問が一番、嬉しい。

「どのような」

「子細はいずれ。実戦で通用せねば、技とは呼べませぬ」

「はは、それは厳しくてよいな。」

……しかし身が疼くなあ。のんびりしていると忍に置いていかれそうだ」

「まさか。父上ははるか先を走っておられます。少しぐらいは、忍を待っていて

くくださいませ」

「ははは……そうそう、野原先生が来られて」

「おお。なんとおつしやつておられましたか」

忍は思わず身を乗り出した。野原先生は、整体を中心に東洋医学一般に極めて造詣が深い。人の身体の調べをただで把握する、一種の異能者だった。打ち出す方策もどれも的確、親子とも、身体のことについては誰よりも信頼している。

「ふふ……また、難しい表現をされた。

『天駆ける駿馬が、初めて森から野に出たようなもの。心配ない。それどころか、とても良い徴候だ』とか」

「うーむ……」

忍は、考え込んだ。父の身体のことだけに、できるだけ正確に、いや、良いように解釈したかった。懸命に、考えた。思考が、口について出てしまう。

「……またソムリエみたいなワケのわかんない表現だなー。野原先生そーゆーの

で楽しんでるところあるからちよつと困ったりするんだよねー……でもなんだから、身体の馬力はすごくあるんだけど、森から出て方向感覚を見失ってるってカンジ？ てことは野の次は天でも駆ける、ってゆーこと？ だったとするとものすごくいいこと言われてるよね、パパ！」

一呼吸で言つて、は、と気づく。

父を見ると、ただ、微笑んでいた。

「あ……す、すみませぬ」

「はは、何を謝まるやら、忍」

「い、いえ、あの……」

「ここは道場でもなし。肩肘張らなくてもいいではないか。いつものとおり、自然にしていれば」

「いつも……ご存じでしたか」

「それでも私は、お前の父親だぞ？ ハッハッハッハッハッハ」

家では出していないつもりだったが、そんな小細工が通用するような、父ではなかった。

「……はじめを、つけねばならぬ、と思うておりました」

「うむ、うむ」

「父上にも、修練中以外は先ほどのように接しても良いかと思っておりましたが、気恥ずかしく……すみませぬ」

「ほら、だからそう、肩肘はらずとも」

「は、はあ……」

忍は困って、額を掻いた。いざ、そうしろと言われても、難しいし……恥ずかしい。大拙が、そんな娘を見つめながら、言う。

「実は……私の方が、心苦しかった。」

娘にそういう固い言葉ばかり使わせておって……学校やその他で、それが原因で妙な目で見られてはいないかと。だが、私にはその辺はよくわからぬし……逆

に、そうして若者らしい話し方をしてくれた方が、安心する」

「……先程のように話しておりますと、しゃべりすぎだ、と、ももあたりによく叱られます」

「ははははは、そうか……あの忍が。やはり血は、争えぬ……」

最後は、消え入るような声になった。

リラックスしすぎたのだろう。大拙には珍しいミスだった。

逃げようとする父を、逃がさない。

「父上。その血で、お話が」

「忍、そこにあるものはなんでも持つて行つていいぞ。食いしん坊チームでぜひ、平らげてくれ。特に甘いものをお願いする。ナースステーションにもお配りしたのだが、とてもとても」

「父上！」

「う、うむ……」

明らかに狼狽える父に、内心笑みさえ零れながら、顔は真面目をキープする。
形勢逆転、押し込みどころ。真正面から、斬り込んだ。

「母上に、一度、会ってくださいますか」

「う……」

「父上、父上は母上を、お嫌いなのですか？」

「い、いや」

手でシーツを捏ねた。まったく、四十過ぎの男の仕草としては可憐に過ぎる。

「母上は今も、父上のことを大変に想っておられます。父上さえひとことおっしゃれば、今からでも飛んでこられます」

「い、今から!? 今、今は少し勘弁してもらえぬか」

「いや、今呼ぼうというわけではありませんが……ならば、いずれ近いうちに、会っていただけますか」

「う、う……い、いやその……」

ぽりぽり、と今度は大拙が、節制で艶やかな黒髪を搔いた。色は違えど、娘によく似た髪質だった。

「……私が、自分の道をあまりにも譲らぬがゆえに、聡美に苦勞を掛けたのだ。今さら、甲斐性もできませんでした、娘もこう言ってる、だから会おうか、などと、都合のいいことは言えぬ」

「父上……」

忍は、心底安堵した。そういう気持ちを持つほど、大切に想っているのだ。

「母上は、そんなつまらぬ女ではございませぬ。父上を、そのお言葉を、一五年待ち続ける、強いお方でございます」

「強すぎるのだ……」

「はい？」

「い、いや……」

……忍、本当に聡美、いや母上は、私に会いたがっているのか？ 会わせてみ

ればなんとかなるだろう、では困る」

「それはもう、保証できます。母上の瞳は今も、恋する乙女のそれです」

胸を張って、どんと叩いた。娘の見慣れぬそんな仕草に、大拙も遂に落ちた。

「うーむ……し、忍がそこまで言うのなら……」

「素晴らしい！ 父上、素敵です！ 母上もきつと大変お喜びになります！」

「う、うむ……しかし、どのような顔をして会えばよいものやら……」

「そのままです。きつとそんなことを考える余裕もなく、飛びついてこられますよ。

ふふふ」

「洒落にならんなあ……」

苦笑する大拙に、忍も、母の娘つぼさを思い出し、ありうるかも、と想像した。

でもそれは……とても楽しい、情景だった。

「しかし」

「はい？」

諦めたのか、父はいつもの笑顔に戻って、忍を見た。

やはりわが娘ながら、とても美しい。

そういうことのひとつやふたつも、あるのだろう。

嬉しくもあり、少し……寂しくも、あり。

「忍の口から『恋する乙女の瞳です』などという言葉が聞けるとはなあ……気になる人でも、いるのかな？」

「へい!? いや、あー……」

気になる、といえば気にならなくてもないが、それはその、恋愛とかそーゆーものじゃなくて。

「例のコーチかな」

「い、いや」

形勢再逆転。言い斬る父に、反論できない。

「なにせ忍のサッカーの話は半分がコーチの話だからなあ」

「そ、そんな」

はずはないと思うが、自信はない。

「一度、連れてきてはもらえぬか」

「は、はい!? いや、それはさすがに、そんなところまで行つてなくてね、いやそんなところもこんなところもぜんぜん行つてなくて、ていうかコーチがびつくりしちゃう」

「ん? 一度、術や身体の鍛え方、使い方について、じっくり話がしてみたいのだが」

「あ、ああ……び、びつくりした」

大拙も、案外人が悪い。

「ははは……どなただったかな、小さな軽い子に、ウェイトもストレッチも高負荷もさせない、と聞いて、非常に興味深い」

「あります。体力訓練は一人だけ完全別メニューです。最初、みんなで『依怙

鼻肩』と冗談めかして言っていたのですが……結果が、出てます」

「まるで魔法のように、敵をかわすとか」

「華奢な、こんな細い脚から、稲妻のようなシュートを撃ちます。私にも、信じられぬほどです。」

……そういえば。父上の身体の動きにも、通じるものがあります」

「うむ。その子の天性もさることながら、その天性に沿った修練をオリジナルで考えていくあたり、ただ者ではない」

「それは間違いありません。コーチは、ただ者ではありません」

「うーむ……ぜひ、話がしてみたいな」

「では、練習を見に来られては。その旨、伝えます。コーチはとても勉強熱心です。きつとコーチも、喜ばれます」

「おお。それは何よりだ。すまぬ、頼む、忍」

「おまかせください」

「うむ。『忍の父です。娘をよろしく』と怒鳴り込むことにしよう」

「母上に、母上よりもコーチに会いたがつていた、と告げ口しますぞ」

「ウツ……そ、それは……」

「フフフフフフ……」

「ハッハッハッハッハ……さすが忍、油断も隙もない」

「父上の、娘ですから。フフフフフ……」

「ハッハッハッハッハ……」

『私のパパに会ってくれない？』

いきなりそんな風に迫ったら、コーチはどんな顔をするだろう。みんなの目の前で言つたとするなら、誰が、どんな反応をするだろう。

血の雨の一つも、降るのだろうか。

そんなことを想像すると、笑いが止まらなかった。

大拙は、そんな娘の楽しげな様子を見て、笑みが止まらなかった。

ss

忍の特訓は、たった二日で終わった。

大地、報告を受けると、いつもどおり平静な忍の表情。だがそこには、今までよりもなお一層の、落ち着きと自信が感じられた。

この表情の忍様を信じずして、誰を信じられよう。

大地は、G Kについて深く悩むことを止めた。代わりに、キャプテンの言葉を思い出す。『なんでも言つてあげなきゃ』。

「忍様」

「……」

ふと、こちらを見るルビーのような瞳に、言葉を失う。というよりも。

言葉だけが、なにかを伝えるわけでは、ない。

「……次戦、先発です」

「まかせて」

にこやかに微笑んだ。そして小さく右の拳を握って、Wink一つ。声までが、艶っぽい。

普段あり得ないその反応に、驚いて軽く絶句する。と同時に。

『……こりゃとんでもないことが起きるかも……』

楽しい予感が、胸の底から湧いてきた。

それでも——自分でも半ば呆れながら、可憐にそれとなくを仕掛けてみる。好奇心もあった。

「……え？ 特訓ですか？ ええ、もう、バッチリ。千里の顔を犠牲に」

「なつてないよ！ ホウ！ 今日もボーイッシュな魅力が満載だろ!？」

「自分でゆーな！　でもちーた、ホンットエライんですよ、敵に塩、宅急便で送りまくり。もうこれで二度と先発の可能性無くなったつーのに」

「言うなそれを！　あたしだって後からよく考えてガック来てんだから!!」

「へえ」

負けず嫌いの千里に、そんなことを言わせるとは。忍様に、相当の進境があったようだ。

「強くなりましたよ、チーム。

背骨が決まると、強いです」

可憐が、真面目に帰って、言い切った。

「デیفエンスはGK含めたユニットですからね。忍様にその余裕とコントロールの意識持たれると、もう、あたしじゃちよつと太刀打ちできないな」

千里までもが、そう断言する。

「ほお」

背骨。

G K忍、D Fリーダーもも、ボランチ美緒、トップ下ありす、センターフォワード可憐。確かに、センターラインには替えの効かない選手達がなんだ。ここが決まれば、少々の事では動じぬ、負けぬチームができあがる。

可憐は、その手応えを感じている、という。

数は少ないが、千里が忍よりも優れている点を上げるとするなら、「最後のデイフェンダー」という意識を強く持ち、D Fラインと連携・連動して、ピンチを未然に防ぐ能力が上げられた。鋭い飛び出しはその手段でしかない。

それも、忍は身につけたという。

「……まま、諦めない諦めない。『セカンド』G Kもチームにはとつても大切だから。『セカンド』G Kも。ファーストにケガだつてあり得るし。そもそも『セカンド』オッツ!？」

千里の軽くひねった右フックが、綺麗に可憐の頬を捉えた。

「ヂグジョー、来年見てろよ、アンタにだきやフィードしてやんねーから！」

「へへん、先発してないからあたしがどんなにステキなFWか、わかってないのよん。やれるもんならやってみれ〜」

「ウキー！」

「けけけけ！」

「そうか……そりや、楽しみだねえ」

「……ええ。コーチ。とりあえず今年」

不意にじゃれ合うのを止めて、大地を真正面から、見る可憐、そして千里。

「優勝、狙いましょう」

ユース代表、多くの優秀な選手と、優秀なチームをよく知る可憐が、初めてのその二文字を口にした。

歴戦の猛者が、その可能性がある、という。

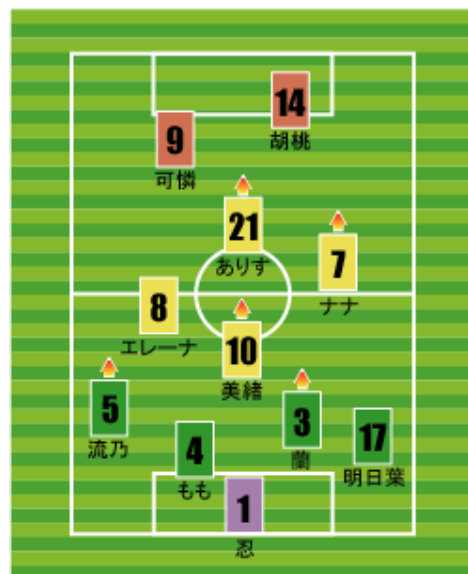
しかし、大地にはまだ、それはない。

「……その前に、次戦だ。ひとつずつ、行こう」

その慎重さこそがしかし、選手達にとつては、頼もしかった。
可憐も千里も、静かに、しかし力強く、うなずいた。

ミラクルズ・フォーメーション変遷図
(クイーンズカップ・地方予選)

System 4-4-2 "Double Diamond"



Reserve

GK20 千里 DF2 はなこ MF16 由美子
MF19 マキ FW11 愛

After 46min... 4-5-1



Reserve

GK20 千里 DF2 はなこ MF16 由美子
MF19 マキ FW11 愛

76min 3-4-3 (美原提案)



Reserve

GK20 千里 MF16 由美子 FW11 愛
OUT/ DF17 明日葉 MF21 ありす

After 82min... 3-3-4



Reserve

GK20 千里 DF2 はなこ FW11 愛
OUT/ DF3 蘭 MF21 ありす

包囲網

丸珠公園第二球技場。クイーンズカップ、地方予選。

詰めかけた四桁に及ぶミラクルズ・サポーターは、息苦しさに喘いでた。

相手は、大学生中心に高校生・社会人を交えた、地元有数のクラブチームである。歴史もあり、ことに前年地区代表を勝ち取った、同じクラブチームであるミラクルズに、ライバル意識を剥き出しにしていた。

その闘志を最大の武器に、しっかりとした組織と、豊富な経験で、落ち着いたボール回しをする。特に守備がいい。DF―MFの4―4ブロック、ディフェンスと中盤の計八人が、見事なオートマティズムで、コンパクトスペースを守る。しかも闇雲なプレスではなく、ボール奪取ゾーンをギリギリまでこらえて、体力の

消耗も抑えていた。そして……

『——またか』

「はっば！ デイレイ！」

「……クッ……」

ナナの突破を止めた敵DF陣、強引に縦へ。タッチライン際、敵左MFが、そのトリッキーな動きで明日葉の前でボールを持った。見れば10番。彼女から、このチームは攻撃を組み立てる。

津波のように、4―4ブロックが押し寄せる。

右サイドバック・明日葉の「止める」能力は天下一品だったが、逆に、飛び込まず堅実を守るその姿勢は、キープと決め打てばいくらか持てた。そこを、徹底的に突く。10番に持たせて、グッ、と全体を押し上げる。

明日葉と共にズルズル後退するミラクルズDFライン、業を煮やしたキャプテンが、明日葉をカヴァー。ボールを掻き出す。スローイン。息つく間もなく、す

ぐにゴールライン側へのスロー。ノーウェイトで速いクロス。蘭が跳ぶ。弾く。セカンドを敵のMFが拾う。正確なミドル。忍でもギリギリ。弾く。CK。早いセツト。ショートコーナー。ゴールから遠ざかるイヤラシイクロス。蘭ともが追う。上がっていた敵の長身DFが落とす。また、ミドルが来る。忍、反応。キヤッチ。ようやく、一段落。

カウンター一本から、チャンスと見るやの波状攻撃。

敵ながら、天晴れである。

『……これだけなら、プロでやれるほどだな』

大地、冷静に現況を判断。

ライバル意識が、熱心な研究を導いたのだろう。明日葉の守備のクセをよく把握していた。遅くする、決定的パス・クロス「だけ」は撃たせない、そこに特化しているからこそ、数ヶ月でここまでのDFに育ったのだ。それ以外を突かれても、明日葉を責めるわけにはいかない。

攻撃陣の抑え方も、堂に入っていた。例えば、ナナ。わざとスペースを空けて、ドリブルを誘った。走らせてから、コーナーで囲んだ。そこでは、クロスに逃げられない。潰された。ナナからのクロスが無ければ、胡桃はさほど怖いFWではない。押し込めるが故に逆に前線にスペースが無く、スピード命の可憐、アイデア勝負のありすの持ち味も、生きない。

『——だが、それだけじゃない』

しかし、少々のそうした小細工は、力づくで吹き飛ばしてきたミラクルズである。どこか、かみ合わない歯車、外されてる勘所、そこがある。だから、ゴールラッシュ・マシンが、機能しないのだ。それも敵の研究の成果か。だとすれば、それを、繋がれた鎖を見つけ出し、解き放たなければならぬ。

——前半終了、0—0。

固い顔引き上げる選手達。

その上から、声が、音が降り注ぐ。

『うううううおおおおおおおおおおおお……』

ミラクルツズ!!』

ドンドンドンドン……

サポーターの、大声援。

ナナなど、不甲斐ない自分が恥ずかしくてしょうがないのか、真下を向いて駆けて通路へ引っ込んだ。可憐はそれでも、その強い瞳を温かにすぎるサポーター達に向けて、黙礼をした。キャプテンも同じ。そして、最後に引き上げる、

すつ……

ゆつくりと頭を下げる、忍。

「がんばって!」 「後半期待してるぜ!」 「頼むぞ忍様——!」

その頭上から、口々に声援が飛んだ。

ハーフタイム指示。

「……気づいてる通り、明日葉のところを狙い撃たれてる。フォーメーション変更。底をキャプテンとエレの二枚にして、右と左を分担しよう。キャプテン、すぐ明日葉をサポート。明日葉」

「はいっ！」

「キャプテンも蘭も飛んでくる。今までどおりでいい。落ち着いて」

「はいっ！」

あまりにも徹底的に狙い撃たれて、さすがの明日葉も心身共に少々へばつていた。その一言で、元氣を取り戻す。

「ほな、ウチとあーが右左に開いて中盤ボックス？」

「そうなる。カレ」

「はい！」

「最前線にスペースがない。トップ張りは胡桃に任せて、縦並びでその手前のス

ペースを活用しよう」

「4―5―1つぼく行くねんな。さらにボール支配率を上げる、と」

「そうだ。敵のDFとMFの間のスペースで、ボールを回そう。

敵に合わせる必要はない。自分達の持ち味を最大限に活かし、自分達のサッカーをすれば、勝てる相手だ。落ち着いて、戦おう」

「「ハイッ」」

力強くうなずき、選手達が輪を解こうとしたその瞬間、

「……はは……いや、ごめん」

ふと、大地が笑った。そして、謝る。両手を振って頭を下げた。

「「?」」

怪訝な顔で、コーチを見つめる選手達。

コーチ、一体、何を？

「いや……4―5―1でボール支配して、DFとMFの間を通そう……なんて、

僕、何言つてんだろ。そんなことどうでもいいんだ。どうも、いかん。ごめん、すまん」

「「????」」

「一番大切なことを言い忘れた」

どうも、いけなかった。

勝てば勝つほど、上手く行けば行くほど、人は消極的になり、守りに入る。自身が睨め殺すような目線で射抜いた、ジュニアユースの監督を思い出す。

悪い人ではなかった。日進月歩の日本のサッカー界で、今も若い世代の指導を受け持つっている。優秀な監督だった。

勝ちたいから。だから、守ったのだ。

それを、誰も責める資格などない。

『すみません。でも』

だが。

だが、勝つためには、勇気が必要だ。

サッカーは、守っていればどこからか友軍が現れて敵を蹴散らしてくれるスポーツではない。

リスクを怖れず前に出る一歩。

その勇気を忘れては、勝利はない。

そしてミラクルズは、その一歩その一歩で、勝ち上がってきたチームである。

大きく息を吸い込んだ。

吐き出した。

「一歩前へ！

攻めろ！！

勝つぞ!!!」

「「……ハイッ!!」」

一瞬の間を置いて、笑顔が溢れた。

その、当たり前のような反応に、大地は照れた。

一番、それがわかっていなかったのは、忘れていたのは、他ならぬ自分だった。選手達はみな、その気持ちを、これっぽっちも、忘れてはいない。

『——これが、僕のやり方です』

一八人は、それぞれの闘志を燃やして、ピッチに立つ。

——三〇分後。

サポーターのイライラは、頂点に達していた。

これほどまでに圧倒的にボールを支配し、これほどまでに良質の絶対チャンスを作って、なぜ点が入らない。

時折サッカーには、こういう試合が現出される。神様のいたずらのような、ワ
ンサイド・スコアレスドロー。

ならばまだいい。

ここから、1点入ると、まず、そちらが勝つ。

ミラクルズに入れば、いつものゴールラッシュがわずかな時間で戻ってくるかもしれない。だがもし敵陣に入れば……さらに固く甲羅に引き籠もられて、ジ・エンドだ。

ナナの、これでもか、という低く速く美しいクロスが、GKとDFの間を通った。針の穴を通すピンポイントミサイル。

だがそれは、胡桃の足の後ろを、可憐の足の前を、虚しく通り過ぎた。意味もなく美しい曲線を描いて、左タッチを、割った。

「ぐあああああ!!」

誰にぶつけるでもない、イライラを、絶叫で晴らしきれないナナ。

自分のミスだ。通すことだけを考えすぎて、FWの撃てない球を送った。なん

て独りよがりの、クソクロス。

「ナナッ！」

キャプテンが、珍しく名指しでクールダウンの手真似をした。ナナも心得ている。顔中をくしゃくしゃにして、右手で手刀を切った。ごめん。

だがナナのヒートのおかげで、皆はある程度冷静を保てた。

可憐も胡桃も、届かなかった一步を噛みしめて、走り戻る。

『——こーちー……』

古都はもう、見ていられなかった。すがりつきたくなる先はしかし、平静な横顔。それを見ること自体でしか、崩れそうなキモチを支えきれなかった。

「こーち。誰か替えない？」

「はななら、どうする」

「ボール回しが機能しないなら、放り込みよ。3―4―3。3バック蘭、私、も

ーさん、4ハーフフラット、ナナ、キャプテン、エレ、るー、3トップ、PK、くー、可憐」

「却下。パワープレーは、負けてる時に使うものだ」

「しかし」

「ボール支配が点に結びつかない原因、そこが問題だ。パワープレーは、ロスタ
イムでもできる」

「……なら、明日葉だけでも」

「駄目だ」

参謀・はなこにはどうしてもそこが気になった。さすがにキャプテンがすっ飛んでいくようになって、前半ほど酷くはなくなつたが、それでもやはり、明日葉狙いは変わらない。ここを私、もしくはユミ姉にすれば、俄然後ろを気にしなくて済む。さらにチャンスが、増えるかも知れない。

大地にももちろん、そこがひつかつていた。だが、はなことは感覚が逆だ

った。

そこそが、この試合のキーだ。

そう感じていた。だからこそ、明日葉を替えてその「目」を消したくはなかった。頭脳がめまぐるしく回転し、その「意味」を、探し続ける。

「……また！」

はなこが、ほら！とでも言いたげに、鋭く叫んだ。

カウンター一本、10番の明日葉狙い撃ち。手練れのテクニシャンに、1ON
1でズルズルと後退させられる明日葉。

その横に、黒い影。

「「あつ!!」」

ベンチで声が上がった。敵ボランチ、初めての攻め上がり。明日葉の背中を、
駆けていく。

「いかんッ！」

足元に集中していた明日葉、それに気づかない。

パスが、出た。

ボランチは悠々とそれを足にした。振り向く明日葉、もう間に合わない。突進するボランチ、ミドルか。ゴール前パスか。

豊富な選択肢こそが、ミラクルズに幸いした。その一瞬の間を。

——ズシャアッ!!

ボールが、タッチラインへ跳ね飛んでいく。ボランチが、前転で派手に転がった。

「キャプテン!!」

泣き出しそうな声で、口元を覆った古都が叫んだ。

美緒のスライディングが、危機を救った。

「……フーッ」

「だから!」

「はな。今は」

「……ッく」

大地も息を吐く。イエロー、あるいはラストマンファウルで赤を出されるのも覚悟のプレーだが、そこはさすがにキャプテン。足裏地面べったり、ボール直撃で、審判を唸らせた。しかし、さすがにフリーキック。

「集中——!!」

ももが手を叩いて陣形を整える。忍、いつもどおり、真正面をぐつと開けさせる独特の指示。ボールは、見えている方が有難い。

ミラクルズ自陣右・奥深く、FK。距離三〇mと少し。キッカーはここまで散々苦しめられた10番。あのテクニックなら、直接もありうるか。様々なパターンが考えられる、対応の難しい位置。キッカー側、ゴールニアサイドに敵FWと長身DFが集まった。

後半三五分。このプレーをモノにすれば、勝利がぐつと近づく。

勝負所である。

押し合いの中、キッカーはギロリ、真正面を見据えていた。

間合い。

助走。

蹴る。

右脚で、長目。

『——ニアと見せてファー』

忍はボールを目で追いながら、素早く身体の位置を変えていく。視線を右に切つてない。ということは、相当練習を積んだサインプレーだ。案の定、敵選手一枚、真正面、来る。

グッ、と落ちたボールが、突進してきた選手の正面へ。足を振り抜く。

大丈夫。その位置なら、おおよそどこでも、捕れる。

——と、読んだ瞬間。

左の視野に、赤い影が飛び込んだ。

流乃。

『——るの、いい！』

その選手の突っ込みをマークしきれなかった左サイドバック流乃が、慌ててシュートコースに入った。そして反射神経。流乃でなければあり得ない反応で、左足を突き出した。

当たり所が、悪かった。

ボールは、軌跡を変え、スピードすらさらに増して、

——バスッ!!

ゴール右サイドネットに、突き刺さった。

それは、さすがに忍にも、どうしようも、ない。

わあああああ……

ピッチには歓声。スタジアムには落胆。その絶叫が、木霊した。

「あああ……」

ベンチでも、ピッチでも、幾人かが、崩れ落ちた。

攻めに攻め込んだカウンターチームに、セットから1点。自分達には最悪の、そして相手には最良のパターンである。

流乃は、何が起きたかわからない、という顔で、突っ立っていた。

まさか自分が、こんなオウンゴールみたいな、こんな。

センス抜群、無様な真似などサッカーでも日常生活でもあり得ない流乃には、目の前の出来事が、今の短期記憶が、そもそも信じられなかった。

『るー、駄目』

駆け寄ろうとするキャプテン、だが先を越される。

「流乃。すまぬ」

忍がその手を取り、肩を叩いて、頭を下げた。

「……しの……ぶさま」

「私のミスだ。また、守ってくれ」

「……」

嘘だ。

絶叫したかった。

いや普段なら、していただろう。

だが、流乃は、すんでで、こらえた。

今は、そんなことを言ってる場合じゃない。

「……はい」

暖かい言葉と手を振り捨てるように、まるで何事もなかったかのように、左サイドのポジションへ駆けた。頭が真っ白で、足が震えた。自分がどこにいてなにをしているのか、わかってなかった。

ただひとつ、わかつてることがある。

『……勝つ』

なにがなんでも。

それだけが、今、流乃にできることだった。

流乃が駆けるのを見て、美緒は振り向いた。

そしてまた、先を越されていた。

『……駄目だ、私。キャプテンともあろうものが』

それが美緒の闘志にも、火を点けた。

私は今日、何もしていない。

明日葉を忍様に任せて、美緒は定位置に、ピッチの中央へと駆け戻った。

側でエレーナが、不安げに私を見つめた。

自己のないその態度を、己の愚かしさと共に、叱りとばす。エレには、これが

効く。

「エレ。しつかりなさい」

「は、はい！」

責任は、みんなにある。そしてこの逆境を乗り越えるのは、一人一人の、力でしかない。

「点、獲るよ」

「ハイッ!!」

エレの顔に気迫が戻った。ほんの少しだけ、肩の荷が下りた。だが。

『……こんなことで満足してる場合じゃない』

それすらも、エネルギーに換えた。

明日葉は、疲れ果てていた。最後の一撃だった。

どうして今日は、わたしばかり。

そして後ろを開けて、パスを通されて、そこから、失点。

もう一步も動けなかった。いや、動きたくなかった。

みんなの足を引っ張るのは、耐えられなかった。

コーチはどうして、替えないのだろう。今日一番酷いプレイヤーのわたしを、
どうして替えてくれないのだろう。

ひよつとするとコーチは、わたしのが、憎いのだろうか。嫌いなのだろうか。

そんな意味のないことを、ぐるぐると考えていた。

「明日葉」

ポン。

肩を叩かれて、よろけるように振り向いた。

忍様が、微笑んでいた。

「一步、前へ。」

コーチがおつしやつただろう。

頼む」

微笑みのままそれだけ言うと、踵を返して軽やかに帰っていく。

『——たのむ』

身と、涙腺に、染みた。

忍様に頼まれては、たとえこの身が砕けようとも、守りに守る、ほかはない。
細い腕が力で震えた。細い脚に、力が戻った。

『一步前へ』

汗を拭うフリで、涙腺を乾かした。

『とめる』

もう、そのひとつしか、頭になかった。

——大地は、実に不思議な感覚に囚われていた。

この世の終わりのように嘆くマキ、活火山のようにやり場のない怒りを燃やすはなこ、ただ震える古都。平静を装うユミ姉も小刻みに脚を動かし、愛もギョツ、とユニフォームの裾を握りしめていた。

そんなベンチに居て、なお、平静な自分。
いや、負ける気が、しない。

『——なんだろう、これは。予感だろうか。』

それともただ腑抜けて、闘志を失っているんだろうか』

試合巧者相手に、攻めても攻めてもゴールをくれない相手に、残り一〇分、1点差。厳しい。しかし。

見方を変えれば、あと一〇分もあつて、たった1点。

流乃や明日葉のショックは大きかった。だが、替える気には、ならなかった。

忍様が声を掛けていた。たぶんあれで、大丈夫。

大地は考える。

なぜ失点してこう平静なのか。

失点が、あまり問題ではないからだ。

なぜ問題ではないのか。

当然だからだ。

相手のプランが上手く行き、こちらのプランが、上手く行っていない。それなら、点が入らず点を入れられる。当たり前だ。

当たり前の結果は、悪い結果でも、ショックではない。

そう、こちらのプランは、ボール支配率やチャンス数とは関係なしに、上手く行っていないのだ。強力な背骨を中心に、攻めて攻めて攻めまくるそのプランが、向こうに潰されている。

では向こうのプランはなんだ。カウンターだ。サイド、特に左、こちらの右一辺倒でボールを送る。そのボールを刈るのは、主にこちらの最前線、向こうの最終ライン、それもゴールの水際……

『——そうか!!』

絡み合っていた糸が、一気に解けた。

大地、飛び出す。

ピッチサイド、キャプテンに絶叫した。

「美緒!! 中央突破だ!! ゴリ押せ!!」

ボールを回すから奪われる。奪われる前に、シュートを撃て。

美緒の顔が、一瞬の後に、輝いた。

完璧に、伝わった。

『夫婦っていうのは、こういう感じなのかもしれない』

たったそれだけで全てが通じた手触りに、痺れる思いがした。なんと頼りになるキャプテンだろう。ピッチのコーチとはよく言ったものだ。今、僕と美緒の心は、ひとつ。

『……なに馬鹿なこと言ってるんだ』

大地、自分を笑いながら、ベンチへと引き上げる。

その笑みすら、ベンチの者には余裕に見えた。

「コーチ！」

たまらずその心は、と問うはなこを、大地は少し、焦らした。

「同点で仕掛ける。」

マキ、ユミ姉、アップ開始！」

「「ハイッ!!」」

「うううううううう」

輝く笑顔ですつ飛んでいくマキとユミの横で、はなこが笑いと悔しさの混じる奇妙な表情で、両手両足ジタバタ悶えた。普段は生真面目生一本、こんな崩れた姿など、一瞬も見せない。

『——だめだこの人。すごいすごいと思っていたけど』

古都は、今や薄く微笑みさえ浮かべる大地の横顔を見て、思った。

『すごい、女たらしだ』

天然なのがまた、あまりにもギルティ。

『——私も、たらされてるんだけど』

美原先輩の崩れっぷりを見て、私もああなのかと思うと、背筋がくすぐったかった。でも。

『格好にかまっていられるような相手は、恋の相手じゃ、ないよね』
思うと、笑えた。

『……なに馬鹿なこと言ってるんだろ、私。試合、試合』

古都は慌てて、マネージャーの顔を作った。

作ってみると、思ったよりずっと、崩れていた。

その指示は、チーム全員が聞いていた。

まさにエレナが、大柄の身体を張ってボールを奪う。キャプテンに差し出す。躊躇一つなく、美緒は真正面へパワフルなドリブルを敢行する。可憐が横を、サポートに駆ける。その動きに気を取られたボランチゾーンを、易々と突破。CB二枚がズルズルと下がる。下がる、下がる。胡桃のケアと可憐の飛び出しに留意すると、下がらざるを得ない。ギリギリ一杯、GK間近で、ようやく、美緒に仕掛けた。美緒、強引にシュートを撃つ。だがコースなく、GKが両手で弾いた。ルーズボール、転がる。

「よしッ!!」

狙い通りだ。錐のように一点で力を揉み込めば、さほどの守備力ではなかった。組織の堅守が印象的であるが故に、一対一にバラされると逆に弱く感じた。

ベンチにも活気が戻る。サポーターも、チャンスの質の変化を敏感に感じ取った。歌が戻り、手拍子が戻り、絶叫が、戻った。

いきなり変わったギアに、戸惑うのは敵陣。

1点リード、あとはプラン通り、堅守で逃げ切れるはずだった。

だが、なんだ、この圧力は。

リードしているのに、気持ちも逃げていないのに、どうして、こんなに、押されるのだ。

『……すごい……やっぱり、すごい』

古都はただ、目を見張った。たった一つ。たった一つのアドバイスで、まるでチームが生き返った。それを実行してみせる選手達も凄いが、それより、その

「ひとつ」を、あんな過酷な状態、私なんかがただオロオロしていた状態から見つけ出してしまふ、そのコーチは、やつぱり凄い。

『……こ、こんな風になるには、一体どうしたら……』

そんな欲が沸いた。人間として、こんな人物に、私もなりたい。まるで勝つてるかのような、充実したその横顔を見つめながら、古都は強く思った。

コーチを見るか、ピッチを見るか。

どっちが勉強になって、どっちが楽しいのか。

迷った挙げ句、欲張りな古都は、両方、見ることにした。

首をぶんぶん、振りながら。

守護神

ミラクルズ、迫る。

多段のシュートで、押し込む。押し込む、押し込む。

敵の陣形は、要するに上の空いた箱だった。

右攻めなら、「コ」の字で受ける。ドッジボールで言うと、正面で打ち合うのではなく、コート外側の三方から、攻め立てる。いくらボールを回しても、それは敵の手のひらで踊るようなもの。包み込まれて、奪われて、サイド、つまり「コ」の腕を通ってボールを前に運ばれて、撃ち出された。

頑強な背骨、センターラインを有し、それを活かすフォーメーション、中盤菱形のダブルダイヤモンド4―4―2を得意とするミラクルズを徹底的に研究した

結果の、サイド・最終ライン偏重作戦。徹底したサイド攻め・サイド受けによって、意識を中央から外させる。だから、美緒、もも、可憐、そして前半のありすが、全く有効に機能しなかったのだ。したがって、点も獲れない。

解決策は。

やはり、相手に合わせる必要などない。「コ」ならその底を、力尽くでぶち破る、ただそれだけのことである。そうなれば……

「うおおおおお!!」

咆吼一発、蘭の豪快な重戦車ドリブルがピッチ中央を切り裂く。そのあまりの迫力に、脚がすくむ敵ボランチ。よせばいいのに、芝居がかったキャプテンの、大袈裟な指示までも飛ぶ。

「撃て!! 蘭ッ!!」

「つしやああああ!!」

ドガアッ!!

ボールが、ひん曲がるほどぶつ叩く。破裂するかと目を覆う。まるで大陸間弾道弾のように、水平飛行で地上僅かを飛んでゆく。あまりのパンチに、DF、脚で弾く気すら起きない。

しかしG K、真正面。四〇mを超える距離が、ほんの少し、力を削いでくれているもいた。

勇気を持って、軀ごと覆い被さるようにして、止めた。止めてなお、摩擦で火を噴くかのごとく暴れた。

助かった。

こんなものが胸元の高さで飛んできていたら、逃げてたかもしれない。

安堵と、強烈なシュートを止めた自負が、G Kの目を拓かせた。

『あの子、CB。カヴァーなし。よし』

跳ぶように立ち上がると、フルパワーでパントキックを放った。

それを見た10番が、ピッチ中央めがけて、左サイドを捨て、斜めに走る。

「あつ!!」

「むっ!!」

声を上げる古都とはなご。ヤバイ。カウンター。どフリーだ。ももの脚だと、あの10番に追いつくのは難しい。

一対一に、なる。

だが大地、驚きもしない。

驚きもしない自分に、驚いていた。

今日はおかしいほど、冴えに冴えている。

『忍様なら、止める』

予感というより、確信だった。

一見、チャンスに見える。

だが彼女達は、自分達の強みを捨てた。勝ちに手が届くその手法を、今捨てた。GKはあそこでボールを握りしめ、両者の陣形が整う時間を、待つべきだった。そしてまた、サイド通しでじつくり時間を使うべきだった。なにせ、勝っているのである。それを、捨てた。

そういう戦い方に、勝利の女神は微笑まない。

気まぐれな女神を振り向かせるには、ただ、一途でなければならぬ。

10番が追いついた。トラップも的確だった。ドリブルも足についていた。だが忍、微動だにせず。

いつもなら飛び出してシュートコースを消す動きをした。

しかし今日は、身体が、「動かない」といった。「今はそうではない」、そう
いった。

ただボールを見て、身体から一切の力を、抜いた。

自分の接近などまるで無視するようなその姿勢その空気に、10番は苛立った。相手が動かなければ、その隙を突くこともできない。

なお迫る。動かない。

なお迫る。動かない。

なお迫る、動かない！

絶対的優位に立つてははずなのに、狼狽えるのはGKのはずなのに、追い詰められてるのは、自分。

『——ああっ!!』

ヤケクソになって、右脚を思い切り振り抜いた。枠にさえ飛べば、入るに違いない。そう、信じこもうとした。

そのシュートは。

ゴール真正面、ペナルティエリア入ったところから放たれたそのシュートこそ。

「ああ!!」

今まで努めて冷静に戦況を見つめていた千里が、初めて感情に心揺らした。

『——これを、運命というのかもしれない』

何度も見た、ついこないだ見た、あのシュート。

あの可憐のシュートと、あの特訓のシュートと、同じ。

忍の足元、右脚外側わずかに、飛ぶ。

一歩前へ。

忍は、実になにげなく、左足を一歩大きく、右脚の前に踏み込んだ。

ボールが来る。その軌跡と並行に、相對する。

身体を「たたむ」。

ひよい。

ひろいあげた。

左脚を元に戻すと、ボールを、真正面で、両手で、捧げ持っていた。

口元には、微笑みさえ、のる。

まるで海辺で、小さな女の子が、貝殻を一つ、拾い上げて、後ろから来る両親に見せる、そんななにげないさりげない、簡単な当たり前な、動きで、

強烈なシュートを、体側、GKには極めて嫌なシュートを、止めた。いや、捕った。

「おおおおお」

大地の喉から、唸りが上がった。

あれはなんだ。

あんなプレー、見たことない。あんな動きが、人間にできるものなのか。物理法則は、一体どうなったんだ。あの周りだけ、時間でも止まったのか。

恐ろしいのは。

それがさも当たり前のように見えることだ。

素人が見れば、平凡なプレーだと見流してしまうかもしれない。だが、サッカーをよく知るもの、知っていればいるほど、あのプレーの質的な異常さに、身震いがした。

身体の横を時速百数十キロ、秒速にして三〇m前後の速度で通過する、四五〇gの物体を捕捉、つまりその運動エネルギー全てをどこかに消し飛ばしたのも異常なら、体側では難しいからと「ゴール面をがら空きにして」身体を九〇度横に向け、身体の真正面ヒンポイントでボールを拾い上げるその決断も、セオリーに完全に反する。

要するに、無茶苦茶だった。

だが、目の前にある、事実だった。

大地はリアリストだった。止めてくれれば、ほかには何も要らない。

『――行け、忍！』

そしてリアリストは、もう一人。

忍は、ゆつたりと見える、しかし現実には恐ろしい速さのモーションで、パントに入った。ふわり、ボールを浮かせると、身体を思い切り横に倒して、脚を伸ばした。真正面から真正面に蹴るばかりでは、弾道を読まれる。ならば、横で蹴る。

千里の得意な南米風斜め蹴りよりもさらに大きく身体を倒し、まるでダンスでも踊るように、脚を回した。

低く強く速く長く、音もなく弾き出されたボールは、強烈なフェード軌跡を描く。まさに左タッチを割ろうかというあたりで、鋭角に軌道を変えて、ゴール真正面へ降り注ぐ。

敵も味方も、観客もベンチも、ただ呆然とそれを見送った。

その中で動いていたのは、たった一人。

忍がボールを捧げた瞬間、DFを確認して、飛び出した。

まさに絶妙、忍の脚が振り抜かれたその瞬間に、オフサイドラインを、超えた。リアリスト、そしてエースストライカー・此花可憐である。

可憐、背中左後方にボールの気配を感じつつ、真っ直ぐにゴール前へと突っ込んだ。イメージを描く。

忍様の意図はわかっている。身体を右に倒し左に開いて、左足でヴォレーを撃たせるつもりだ。それが確実だろう。だが、それでは、

『おもしろく、ない』

異常なまでに横にスライス回転の掛けられたそのボールにふと、ある夏の日を思い出す。

合宿の湖の畔、千里と意地になって競った、あの日。

ちは、運動神経抜群だった。ソフトでも格闘技ごつこでもアスレチックでも水泳でも、なんでもあたしより上手かった。湖畔で平たい石を投げて、水切りの回数を競うので、さえ。

ふわり。

考える前に身体が動いた。

ゴール真正面で、「左へ」身体を倒した。

脚を伸ばす。

右足の側面、スパイクのマークのあたりに、ボールが、降ってきた。

撃つまでもない。当てるまでもない。触るまでも、ない。

これは、忍様のシュートだ。

あたしの役目は、ただの水面。

小石が水面を、滑った。

パシューッ！

まさに水切り、軌跡を変え速度を変え回転を変え球威を変え、跳ねた小石は、ゴールへと吸い込まれた。

GK、反応も何も、どうしていいのか、理解も、想像も、できなかった。微動だにできず、見送ることすらできず、ただ、立っているしか、なかった。

なんだこれは。

なんだ、これは!?

「ッシャーッ!!」

会心のシュートに、同点では滅多に上げない雄叫びを上げて、可憐は駆け付けた。忍も珍しく、両手を広げて、駆け寄った。

「忍様ーッ!!」

「可憐!!」

飛びついた。高く高く、抱き留める。

「ナイスシュート。完璧だ。さすがはエース」

「なに言ってるんすか！ 忍様のシュートですよ、これ！

アタシ、ほんとになにもしてないもん!!」

「フフ……」

ぐりぐりとその頭を撫でながら、しかし忍は、強く思った。

予想など簡単に覆す、思いもかけぬ想像もせぬ素晴らしいシュートだった。こんなシュートを撃ちなさい、と諭すようにボールを送った自分が、恥ずかしかった。

すばらしい。

このチームに居れば、私は、いくらでも、どこまでも、成長していくことがで

きる。

「可憐のシュートに、目を覚まさせてもらった。

もつと自由に、もつと思いきり、心を感じるままに……」

いつの間にか、チームメイトが集まっていた。ゴール後の輪にしては実に珍しく、みんなが静かに、忍の言葉に耳を傾けていた。

忍、一呼吸置いて、力強く、言い切る。

「戦おう」

「「ハイッ!!」」

散る間際、ベンチを見た。可憐も同じにした。

千里が、小さなガッツポーズを、両手でくれた。

二人で、同じように、返した。

ミラクルズに、満面の笑顔が戻った。

そしてこれが出ている時のミラクルズは……

恐ろしく、強い。

——大地、予定通り、動く。

たたみ掛ける時には、一気に行く。振り向かぬ決断の早さこそ、将として欠かせぬ資質。

「形的には3―3―4になる。3バック、明日葉、もも、流乃。その前にトリプルボランチを置いて、ユミ姉、美緒、エレ。右のウイング張りっぱなしにマキ。ナナを左ウイングに回して、中央に今と同じ、胡桃と可憐の縦並びだ。マキ」

「ハイサー！」

「ボールを徹底的に送らせる。拾ったら個人技全開、ぶち抜いてぶち抜いて、ぶち抜きまくれ」

「切れ込んでイーノ？」

「構わない。シュートでもなんでも、好きなように暴れまくれ」

「ヤツタ！ リョーカイツ!!」

「ユミ姉」

「ハイッ」

「それでも明日葉を狙ってくるようなら……遠慮は要らん。後ろから刺し殺せ」

「ふふ……了解!」

トレードマークのガードグラスを掛けるユミ、驚くほどの垂直跳びでもう我慢できないマキ、二人がピッチサイドに行くのを見て、小声ではなこ。

「……3バック、それでいいの？ 蘭・もーさんに私がよくない?」

「あの二人から、戦うチャンス奪いたくはない」

見れば明日葉も流乃も、見たこともないほど厳しい顔で、まさに死にものぐるいで、走りまくっている。なるほど。

「はなこは、また次、頼む」

「別に出たいから言ってるわけじゃないけど」

と、半分、嘘をついた。

——ありますと蘭が帰ってきた。「今日は駄目でした……」と消え入りそうなありすに、「そもそも今日は左サイドにボールが行かなかったから」と、微笑んで慰めた。横で、蘭が、タオルを被って、俯き加減。明るく優しく気だてのいい蘭に珍しく、怖い顔、怖い顔。怒ってる。

「蘭、ほら、今日ははっぱとるーに取り返させてあげなきゃ。だからだよ。蘭は良かった」

「……」

見ればタオルで口元を覆って、目が潤んでいた。

「……ふたりに、ボク、でも3バック……」

あ。

ラインコントロールや統率力を考えれば、もーさんが私がラインに入ってるの

は当然だと思っていた。蘭は、ももの代わりができない自分が、悔しい、というでも。

その程度で泣き出すなんて、レギュラーの贅沢だ。

私なんか、出られただけで嬉しくて泣きそうになるのに。

「なら、泣いてたつてしょーがないでしょ。どう考えても外せない、キャプテンや可憐みたいな選手になるほかないじゃん」

「泣いてなんかいないよ、泣いてなんか」

目の回り水でびしょびしょ、震える声。はなこは、蘭の意外な一面を見て、それ以上言葉を掛けるのをやめた。

『……さしもの上町大地も、蘭のこんな気持ちまでは、読めなかったか』

汗でユニフォームの貼りつく大きな背を、ぽんぽん、叩いてやった。熱いその背は、自分への憤りが、マグマとなって噴き出しているようだった。ピッチ見つめる輝く瞳に、涙は、もう無い。

泣いてなんか、いない。

『……いや。それも計算ずくか』

だだとすると恐ろしい。いや、どちらにしろ、蘭の気持ちに火を点けたのは、事実。

『……たまんないなあ、もう』

はなこ呆れて、蘭の睨むピッチに、目を戻した。

二人して、見つめる。

まさにマキに、長いボールがピタリ、渡った。

ブラジル人のくせに、サムライのように、敵DFの前で半身の構え。忍の悪い影響だ。

「「いけ——っ!!」」

二人して、その背中を押した。

マキが仕掛けた。

——ロスタイム表示が上がった。残り一分、十二分。

敵陣は、とりあえずの逃げ切りに切り替えた。延長戦に逃げ込んで、休憩で作戦を立て直したい。このままでは、どさくさで押し切られる。

かつ、大地の思い切った用兵は、良くなっていたリズムを、結果的には一旦切ってしまう。敵陣、役割を明確化しすぎたマキとナナにマーカーを張り付け、2ボランチ6バックとも言うべきだった引きで守りに守る。

大地も、なかば諦めた。

ミスった。延長はDDに戻して、真正面から殴り合おう。

しかし美緒、ピッチのコーチは、別のことを考えてた。

——敵のチームプランに、一人苛つく選手がいる。

10番だ。

ボールさえくれば、カウンターでやってみせる。

その心の叫びが、動きに仕草に指示に、溢れていた。

だが、ミラクルズを怖れるあまりのチームメイトが、攻撃を仕掛けない。その消極的姿勢にまた、苛立つていた。

『——10番は、そうじゃなくちゃ』

同じ10番に、敬意を表する。

この数字は、それほど重い。

最後の最後まで勝利を諦めず、誰よりも死力を尽くして戦う。

それが、その数字を背負うものの、義務である。

ならば、私も。

賭けに出た。

奪ったボールを、敵のボランチに、プレゼントした。

「うわあ！」

大地、頭を抱える。美緒があんなミスをするはずがない。あれは、攻め手。あと三分、おとなしくしてくれればいいものを、出なくてもいい賭けに出た。

前言完全撤回。なんて女だ。油断も隙も、あつたものではない。

「来おいッ!!」

10 番が、絶叫を上げる。ボールを寄こせと、右腕を激しく振った。いきなりのチャンスボールを手渡され、どうしていいかわからなかったボランチは、脅されるように、その要求に従った。

ボールが渡る。

10 番が駆ける。引きずられるように、FWの一人がサポートに走る。MF D Fは動かない。二人で、攻め込めるだけ攻め込むつもりだ。

カウンター。

よく癖を知り、何度も思い通り押し込んできた右サイドバック17番が、目の前に迫った。今度も同じだ。また、押し込んでやる。

『——違う!』

ギリギリでかわした。間合いが違う。アタックに来てる。サイドへ逃げる、一歩、踏み込まれる。また逃げる、また踏み込まれる、また逃げる、また、一歩。追い詰め続けた相手に、追い詰められていた。

そして背筋に、ぞわぞわが走る。

悪い気配、殺気。ピッチに影が見えた。後ろから追われている。足元に、自分ものではないシューズ。背中に感じる、猟犬の牙。狙いを定める、眼光。

駄目だ。限界だ。失う、よりは。

思い切り、ゴール前めがけ長目のパス。

これだって、いつものプレー。私がサイドに切られたら、ここで待つて。これはパスだ。これは攻めだ。

そう吠える気持ちこそ、逃げである。

だから、ほんの少し、遅い。

FW、そのポイントに、走り込む。待ちかまえる。来るボール睨んで、シュートモーション。左足を、大きく振りかぶった。

刹那。

——ブオンツ!!

そのボールが、さらわれた。紅い髪だけが、目に残像。

『な、なに!?!』

左ストッパー流乃、FWの背後を回ってインターセプト。

流乃のスピードなくしては、ありえないインターセプト。

予想も出来ない位置関係に、頭と身体が混乱した。もちろん空振り、大きく体勢を崩す。宙を仰いで、転がった。

流乃、その左足で、バックパス。忍に任せる。

忍、一步出て、そのボールを、気持ちをも、受け取る。

見るともなく見ながら、身体が前へ、前へ、居つかず、動いた。

両ウイングに張り付くマーク二人。4バックが最終ラインに人壁を作つて、その前に、美緒とエレに寄り添うようなダブルボランチ。

つまり。

ぐんぐんと、身体が前へ加速した。

スペースを考えると、敵のいない場所を求めると、自然、そうなる。

敵はなお、ズルズルと下がった。ゴール前直撃のあのキッキングパワーが、強烈に印象に残っていた。ウイングでもセンターFWでも、一本、入れられれば、それが決定機になる。シューターを、殺すしかない。

だからまた、忍は駆けた。

前へ、一步、前へ。

「うわあああ！」

もう、大地、笑うしかない。

リードしているならまだ許せる。が、同点である。なにかあつたら、どうするつもりだ。いや、自分からその「なにか」の可能性を呼び込むなんて、あまりにも、あまりにも無茶苦茶だ。

だが。それこそ。

人の予想を覆すプレーこそ、サッカーの醍醐味である。

本質的に理に叶っていた。そして、忍の周りには敵選手無し。戦術的にも、理に叶っていた。

だからだろうか、出たのは、笑いだった。

まるで孤高なる野獣の女王、人影無き荒野を駆ける、忍の姿。

ヤケクソだろうか、好奇心だろうか、それとも、理性がGOを出したのか。最後に出たのは、またも、この言葉。

「行け！ 忍ッ!!」

いつの間にか、ハーフウエーを超えた。

『ありえない』

そんな思いが、アタックを躊躇させた。いや、10番にも8番にもミドルがある。離して、持たれて、撃たれたら、ヤバイ。私は、ここを守っている。ここだけ、守っている。

挑戦心の放棄と、消極性と、既成概念が、その脚を止めた。

勝つための守りが、守りのための守りになった。

その中を、忍、駆ける。

風のように軽やかにさわやかに、そして美しく。

長い髪たなびかせ、たった一人の、黒い姿。

それはまるで、喧噪渦巻く街人達を説き回る、清廉高潔な修行僧。

いやあるいは海を割り衆を導く、伝説の預言者か。

いや。

彼女はここでは、はるかそれ以上の――

「しのッ!!」

キャプテンが、消える動きで一発でマーカーを外した。あまりにも見事なその出来に、忍は思わず、目を見張った。

『やはり、すごい』

その動きに応えるように、ボールを、渡した。

重心を返そうとした瞬間、キャプテンと、目が合った。

『――このチームは、なんと』

全てが伝わる。

主将がそう言うのなら、私には異存はない。

前へ出た。

ようやく、キーパーがボールを離してくれた。10番だ。押さえつけて止めて、シュートだけ撃たせるな。突破もある、とにかくみんなで、囲め、倒せ、止めろ。相手選手達は、もう一つの可能性に、あえて目をつぶった。

ありえない、と。

だが、ミラクルズの連中は、そっちの可能性しか、考えていなかった。ただ、こみ上げる喜びと笑みを噛み殺して、その様子を、見ていた。

『すばらしいのだろう』

忍も、同じ。

美緒が取り囲まれる。

忍がその横を、易々と駆け抜ける。

たくさんの脚の間はいくぐつて、パスが出た。

パスが、出た。

前には、横には、もう誰も、居なかった。

キーパーと、一対、一。

放つなら、このシュートしか、無かった。

G K右脚のわずか外、足元。

シュパ——ン……

そのキーパーには、文字通り、手も、足も、出なかった。

しかし彼女を責めるのは酷だ。どんなキーパーも、キーパーにドリブルされてシュートを撃たれる練習など、してはいない。そんな異常事態に対応しろという方が、間違っている。

ボールがネットを揺らして、ようやくGK、ただ、崩折れた。

天を仰いで顔を覆って、わけのわからない感情が突き上げてくるのに、堪えきれなかった。

屈辱とか、そんな簡単なものじゃない。

一年掛けて築き上げた自慢の守備システムが、よりにもよって、よりにもよって、よりにもよって、キーパーのドリブルに、破られた。

これ以上の完敗は、ありえない。

完膚無きまでに叩きのめされた相手の顔を、よく見ようと、乱れる視界をそちらに向けた。

黒いその人は、ただ、静かに、たたずんでいた。

白い髪が、赤い瞳が、輝いて、いた。

そして小さく、うなずいて、くれた。

『神様』

顔を覆って、泣き崩れた。

その輝く人の周りに、ピンクの輪が、
歡喜の輪が拡がっていくのを、
音楽のよ
うに聞きながら。

仕掛け

「悪い悪い、待たせた待たせた〜」

「おつそ——い!! もうみんな腹ぺこで死にかけやで!!」

「せやから先やつてくれゆーたのに!! 選手最優先やで!!」

「ウチもそーゆーたんやけど! 大吉が! みーちゃんが! 極悪非道なこの二人が!!」

「カラ、心配しないで。ナナ除いてみんな異存無しだから。スタッフ抜きで戦勝会なんてありえないよ」

「そそ。サポーターの代理でもあるしね。一緒に始めなきや意味無いじゃん。あたし達、ナナじゃないし、だいじょうぶ」

「ちよつ、ちよー! そんな、ウチだけ悪モンみたいに!!」

「悪モンじゃん」

「ガ——ッ!!」

「あはははは……」

ご当地一番店、ラーメンの『山嵐』。

色気より食い気、ミラクルズの戦勝会といえば、まずはここ。ファミレス風の広い店内を、埋め尽くさんばかりに制服姿の少女達が集う有様は、異様でもあり、壮観でもあり。

集合時間にわずかに遅れた、空堀三十六、プロデューサー兼サポーター連絡会代表。千林哲哉、サポート実践部隊隊長つまり応援団長。実況アナ高安和輝は……浮かない顔。ミラクルズ男性陣とも言える、心強い仲間達。はなことのコンビでナナを撃墜した流乃が、その背中を押す。

「高ちゃん、鬱憤、ここで晴らして」

「うしや——!」

放送部・高安のアンプスピーカー越しのハートヒートな実況は、ミラクルズ名物の一つ。だがさすが予選、今日の試合には、スタジアム実況が付いた。もちろん、失礼ながらたいしたものではない。本人だけでなく、選手サポーターもなんだか今日は、不完全燃焼。

「さ！ 本日も大爆勝のミラクルズ戦勝会でございます！ あ、勝の字は『勝つ』でございますよ、『笑い』ではございませんよ、まどつちでもいいんですけど！ むしろウエルカ——ム!!」

「「Yeah~~~~~!!」」

必要以上にテンション全開、高安得意のノーブレーキ殺法。アクセルを踏める人間にブレーキを教えることはできる。だが、アクセルが踏めなければ、何事も始まらない。ミラクルズに、ぴったりのスピーカーだった。

「では早速乾杯から、みなさまお手元のグラスにシャンパンは注がれておりますでしょうか！」

「水、水！ 水道水！ コップもプラスチック！」

「ウチのはアルカリイオン浄水器通してるよ!!」

「あはははは……」

ナナのツツコミに、大将のツツコミが被る。

「シャンパンだと思って飲め!!」

「きやうん、カラン、高ちゃんがいぢめる」

「では乾杯のご発声は、今日の痺れる試合も最後まで声をからして応援でした、サポーターを代表して哲っちゃんから！」

「スルーかい！」

「そのネタにつき合ってたら日付変わるっつーの！」

「真夜中に……しよ思てんねやないの……」

「えゝ、今日は皆さん、本当にご苦労さまでした」

「スルーかい！」

「落ち着けおぼはーん!!」

「イヤや~~~~!!」

「あはははは……」

「いいから、もういいから、あとでなんぼでも出番あるから」

夫婦漫才旦那役の、いやまあ旦那なんだが、三十六が抱き止めてようやく止ま

った暴走浪花主婦^{おぼはん}。

というよりも、抱きとめて、欲しかったの☆

ひとしきりみんなで笑って、千林は改めて。

「ええー、本当に厳しい試合で、僕達もドキドキしっぱなしでした。あまりに試合が動かないので、元気を無くしてしまった時間帯もありました。これではいけない。サポーターは、選手が休んでる間もフルパワーで応援しなければなりません。反省点です。次戦からは！」

「……」

いい男だなあ、とみんなで思った。

そういう言葉と気持ちに支えられてる私達は、幸せだ、とも。

「さらに力強く応援しますので皆さん！ 頑張ってください！ それでは！」

「つちよつ、ちよつと待つて哲つちゃん！ 水で乾杯なんて、そんなカッコ悪いことさせるわけにはいかんわ!!」

大将が、両手でたくさんのペットボトルを抱えて出てきた。店員さんもグラスを配る。

「差し入れ!!」

「「うわあ——!!」」

「あつ、すいませんマスター氣い遣わせまして、すいません」

「バカ、生意氣言わなくてよろしい、氣にすんな！」

立ち上がって礼を言う空堀に、手を振る大将。普段ならこういう段取りは空堀

の役目だったが、今日は遅れた。

「オレは残念ながら観に行けないからなあ！　こんなことしかできないんだけど！」

「いえ、もう……すみません。あ、そうだ、哲っちゃん、この間にMVP発表でも。マスター、今日もいい試合だったんですよー！」

「おおう、そうしようそうしよう、えー……」

つか

試合後、サポーターにMVPを選んでもらうのが、最近のチームブームだった。大声で名前を呼んで、拍手を取る。

「今日の拍手は、一人でしか起きませんでした。その名前を呼んでみますので、ぜひ、一番の活躍をしたとお思いの方だけ、で結構ですので、拍手お願いできますか」

「「はい」」

それはもう、言わずもがなである。ひつぱり無しの、直撃。

「G K、守口忍!!」

ワ——ッ……

バチバチバチバチバチバチ……

一人を除いた全員の拍手が、歓声と共に店内に満ちた。

その一人は、両手を振って、顔真っ赤で、照れる。

「……いやいやいやいや、つても失点してるし、守備機会自体もそんなになかったし、たいした活躍じゃないよ、全然そんな」

「キーパーの1得点1アシストを大活躍と言わずして、何を活躍と言うんですか。今日はシビレにシビレしました。生きてて良かった。」

忍様、結婚してください」

「おおっ!? 突然の愛の告白や!!」

「いや、私、ファザコンだから。千林君たぶん我慢できないと思う」

「いやそんなマジな返しせんでも」

「ガックシ」

「お前もまじめに落ち込むな。恋多すぎるんだよお前は」

「娘の名前はエリカって決めてたんですけど」

「なんでなんの関連もないねん。誰が相手でもエリカなんちゃうかー!?」

「そう」

「「あはははははは……」」

ナナとカラのツツコミで、場がほぐれる。もちろん、哲哉流の冗談である。すぐに立ち直る。

「では、みなさんにもグラスが行き渡ったようなので……」

よろしいですか、いきますよ。

勝利を祝って!! ……乾杯!!」

「「かんぱ——い!!」」

色とりどりのグラスと、笑顔が溢れた。

「あ、ほらほら、さっさとMDP決めて注文せな、大将、腕にヨリ掛けすぎてめちゃめちやツイストになつてるで」

大将が、ロック歌手のような振り真似をした。大いにツイスト違いである。世代の壁は、高い。

MDPⅡモスト・ダメダメ・プレイヤー。つるし上げが目的ではなく、自分のプレーとチームのプレーを反省するために決めるものだが、決めると、「注文不可」という地獄のお仕置きが待っている。喰わせないと生死に関わるので、一番苦手そくなラーメンを周りが頼むしきたりになつているが。

簡単に言えば、つるし上げだ。

「ハイッ!」 「……ほい」

明日葉が場違いに元氣よく、流乃がテーブルに肘ついたまま小さく、右手を挙げた。

「徹底的に狙われてしまいましたー！ すみませんでした——！」

ぺこーり、と深々頭を下げる明日葉に、助け船。

「いやあ、ウチもな、正直、試合中は『もつと突っ込めや！』ってイライラしてたんやけど、よー考えたらあれ、はっばやから最後まで気持ち切れずに止めれたんやで」

「実際、最後は綺麗に止めたしね」

「うん。あれ、おはなやつたら10番キーツ引っ掻いて退場なってる」

「んなことしないわよ!!」

「ははははは……」

「そうですかー？ でもー……」

「唯一の失点があたしのオウンゴールだから、あたしでいーよ」

流乃が珍しく落ち込み気味自虐気味投げやり気味に、背をシートにもたせかけた。

「いやあ、あれがオウンゴール扱いされたら、DFが可哀想だろう」

「というよりも、あれはシューターの得点です。でなきゃFWなんてやってられませんか、和泉先輩」

哲哉と可憐がそう言うのと、忍も。

「……だな。そもそも、流乃だから足が出たのだ。出てなければ一対一、止められたかどうか、わからぬ。あれは、失策ではない」

「そもそも、忍様のスーパードリブルの前のボール獲ったプレー、ありや凄かったよ。背中からぐるると回ってインターセプトなんて、流乃じゃなきゃできっこない。あのビッグプレー一つで、オールOKだろ」

「いや、あんなのはそんなに……」

「なに、哲っちゃんえらく肩持ってんじゃない、ターゲット変更？」

「いや、僕のターゲットは昔から流乃」

「なんと。私は遊びだと申されるか」

「あ、いや、そうじゃなくて、あの」

「聞き捨てならぬ。そこに直られよ！ 斬り捨てる！」

「命ばかりはお助けをを!!」

「あはははははは……」

忍も、今や、二つの雰囲気自在に使い分けた。そしてそれをも、ネタにしている。いや、二つを一つに、見事にまとめていた。

「ケジメ」などに意味はない。大切なのは、全身全霊で戦うこと。それ以外は……別にどうでも、いいこと。

ケラケラ笑うみんなの中で、恥ずかしいからだろうか、流乃だけはちよつと顔を赤らめて、ぷい、と横を向いていた。

『『ほほー、そーゆーことでしたかー』』

なーんとなく哲っちゃんはそのーじゃないかなー、みたいな空気はあつたのだが、今の言い方には何割かマジがマジっていた。どうやら、結構その氣らしい。気づ

いてないのは、流乃の方。あの抜群のセンスも、自分のことには発揮できないらしい。

……なんてことを、2年の連中は考えてた。そこへ。

「ていあんで——す」

「おつ」

「キャ、キャプテン、それ私の特許だよ——」

「後で特許料払うから」

「キャプテン、MDPに立候補するんか!? ドリブルするキーパーにワンツーしました、ごめんなさいって」

「何言つてんですか、あんな空気だけ読んだバカ・プレー、この私にしかできませんよ?」

「自分でゆーな!!」

事実、冷静に考えれば、あそこであの選択肢を選ぶ、それはまさに狂気の沙汰。

だがそれでこそ、「ミラクル」ズの、キャプテンである。

「あれで負けてたら、忍様と並んで切腹ものだもの」

「まさかパスが出てくるとは思わなかった。責任をなすりつけたつもりが、また、なすりつけられてしまった」

「「わははははははははは……」」

美緒も忍様と、ひとしきり笑って。

「……今日はね。今日のMDPは。」

ハーフタイム指示で間違った方向性を打ち出し逆に敵の思う壺、後半三五分を過ぎるまでまるつきり有効な手を打ち出せず、ようやく動き出したかと思えば無茶なフォーメーションで蘭ちゃん泣かせて水を差し、キーパーの無茶苦茶なプレーを両手を叩いて喜んだ……コーチ、上町大地!!」

「「さんせ——い!!」」

「ええっ!? いや、まあ……あー……」

言われてみれば、その通り。確かに指揮次第では、もう少しまともな戦いができたかもしれない。必死で頑張る選手達に比べて、今日一番、ヘラヘラヘラヘラしていたのは、僕だ。

しかしそのヘラヘラこそ、「信頼」。だって結果は、我慢に我慢を重ねたからこそうまく行つて……

なんて、説明もしてみたかったが、諦めた。

なによりみんな、腹を空かせている。

「……ごめんなさい。」

次はもう少し、がんばって指揮します」

「よつしや注文や———!!!」

「「は———い!!!」」

「そこ！ タヌキ！ 大吉にメニュー見せる必要ない！」

「えー」

「ていつ」

ナナが奪うメニューの奥に、たれ目の目尻をさらに下げて、にっこり笑う美緒が居る。言わずもがな、大地の好きなものを注文しようという魂胆だ。

「いいもん。だいたいわかってるもん。アレでいいよね、大地君」

「うん」

「キエエエエエ！ おまはんもその何にも考えずにこの女の問いに首を縦に振るのは止めんかー！」

「いやだつて」

「なんや!? なんか論理的な理由でもあるつちゅーんか!?」

「いつも正解だし」

「どうあわあああああ」

メルティにシートにとろけたのは、ナナだけではなかった。

リアリストを突き詰めると、突き抜けて、とんでもないファンタジスタになる。

「ナナ。我々はまだ、あの領域ではない」

「わかつとるわ！ わかつとるからこそ……」

ぐやじいゝゝゝ!!!」

今日も地団駄を踏んで悔しがるナナ。笑いながら、わいわいと注文を進めるみんな。落ち着いた頃合いで、忍が一声。

「フフ……実は、今日はもう一人、裏MVPに挙げたい人がいる」

「おお、忍様、それは誰ですか」

可憐を見た。すぐに意を汲んだ可憐、横の腕を取って、高々とひっぱり挙げる。

「吹田千里——！」

「え、ええっ!？」

「「おお——っ」」

「カ、カレッ、何すんだよ！ 変な冗談は止めろよ！」

「いや、本当だ。」

足元を止めた一本。あれは、練習を受けてくれた可憐にももちろん感謝しているが、千里の勇気に、大きなヒントをもらった。あれは、千里に止めてもらったようなものだ」

「そのフィードからのシュートも、ちーと一緒に意地になってやった石投げにヒントがあつたんですよ！ だから、あのシュートもちーに教えてもらったようなもん！」

「い、いや、そんなのあたし全然」

「なにより。私が全力を出せるのは、いつも後ろに千里が控えてくれるからだ。その感謝の意もこめたい。」

私の活躍は、千里の活躍だ」

「「おお——っ!!」」

ぱちぱちぱちぱち……

自然と、拍手が起きた。

「い、いやそんな、あたし、いや、ずっとベンチ座ってるだけだし、いやその…」

出場機会が少ないが故にこんな場に慣れていない千里は、ガラにもなく真っ赤になって、照れに照れた。それをまた、可憐がつつく。

「忍様、コイツ根性だけは一人前ですからね、こないだあの特訓の後でも、『なーに、あんなのすぐ抜けるすぐ抜ける』って豪ごふっ!？」

「言ってないよそんなこと!!」

千里の鳩尾直撃ショットアッパー、可憐の胃液が軽く逆流する。

「フフフ……そうでなければ、GKは務まらぬ。誰にもゴールを渡さぬ気迫が、何にもまして大切だと思う。たとえそれが、味方であっても。」

切磋琢磨しよう、千里」

「……は、はいっ!!」

忍の、積極的なそういう姿勢に、みんなは軽く驚いていた。今までなら、寡黙

に孤高に、「私が守る」という姿勢でいたのに……しかしそれはもちろん、とても、いいこと。

千里大感激、固まってる。激情家の可憐など、今にももらい号泣に入りそうだった。

「ああ、なんてエエ話や……ラーメンまだすか——!!」

「余韻短っ!!」

「全部台無しだよ……」

「「あはははははは……」」

忍も千里も、思い切り笑った。湿っぽいのは、このチームには、似合わない。

「はいお待ち……!!!」

タイミグ良く、パワーフードも来た。大騒ぎで、決まっているのに、数もあるのに、奪い合うように各々の前に並んでいく。忍はそれを見て、立ち上がった。照れ隠しで、軽い方。

「……宴たけなわのところごめんなさいなんだけどー！」

今日は、ここで失礼させてもらっちゃったりしますね。ごめんさい」

「ああ、お父さんのお見舞いだね！」

「もうだいぶおよろしいのですか？」

「うん。もー全然。ぴんぴんしてるよ？　ただ、せつかくだから一週間ばかり縛り付けとこう、ってお弟子さんとかと共謀しただけで」

「それはよかったです」

「にひひひひ、それに今日はちよつと、パパに一つ仕掛けてみたのね。その結果も知りたいし、つてことで。今日はみんな、ありがとでした！　また次も、がんばろー!!」

「「おお——!!」」

「バイバイです——!!」

「「は——い!!」」

出がけこつそり、キャプテンに耳打ち。隣のももだと、どうも信頼が置ききれないから。

「……キャプテン、私のオーダー、コーチに回して」

「あ、はい、了解です」

「おねがいします」

両手を合わせて、ウインクひとつ。

——忍が去った。それを見送って、可憐は、訊きにくいことを、訊いた。

「ねね、ちーつてば」

「あにさ」

「ショージキな話、ガックリきてない？ セカンドって出番無いじゃん。あそこまで忍様が凄いとき、もうまるで勝ち目無いじゃん」

「いやあ」

またぶっちゃけすぎた話を……しかし、千里の気持ちは、聞いてみたくもある。ひとつずつ揃っていくラーメン鉢を見ながら、恥ずかしそうに、鼻の頭を掻いて、言う。

「なんか、悟っちゃったよ」

「悟った？」

「たとえ出番がなくても……忍様と同じチームにいれば、ぐんぐん成長していけると思う。あたしは、上手になりたい。いいキーパーになりたい。誰よりもゴールを守るGKになりたい。」

だから……忍様と同じチームが、うん、ミラクルズが、いいよ」

「いいこと言うねえ!! さっすがちーた!!」

バンツ!!

さっきのお返し、その背を加減無しではたく可憐、もちろん千里も思いつきりぶん殴り返す。

「な——に言つてやがんでえ!!」

そりやプリンセスやPKだつて思つてることだぜ!? あんただつてボヤボヤしてりやエースの地位なんかすーぐ奪られちまう! なつさけないぜー!? 9
番がベンチで泣きべそかいてんの!」

「バツ、あたしだつて毎日全力疾走だよ!! 出てる人間にや出てる人間のプレッシャーがあるつつーの! 負けてたまるかーあつ!!」

「ほー! こんなこと言つてやがりますぜ、お二方!」

「……」 「負けナイヨー!!」

じろゝり、と愛が、シルクのハンカチで口元覆つて目だけで不敵に笑う。マキは両手でお箸を一本ずつ振り回す。まだ、箸使いは苦手だ。

「胡桃先生は!? どう思われます!?」

「……とにかく」

指名を受けた胡桃は、さすがヴェテランアスリートらしく落ち着いた貫禄。

すつ、と立つと、シン、となる。

「……らーめん、食べよ」

「「は——い!! いただきま——す!!」」

それは、なによりの真実だった。

「……えつと、忍ちゃんのご注文はどうしたらいいかな」

「あ、はい、こちらください」

大将が持ってきた忍の注文は……さすが、というべきか、大地の好きな、野菜
たつぷりの湯麵たんめんだった。

「うひょー、さすが忍様、さりげなさがカッコイイねえ」

「……それが、ね」

「はいキャプテンお待ち」

もちろんのことながら、美緒の注文も、湯麺。

「あはははは、かぶり」

「うう……忍様、気を回しすぎだよ……」

「しょうがないね、じゃ大地に食べてもらうしか」

「うん……忍様も、『コーチに回して』って言ってたしね。じゃ、これをコーチに食べてもらうとして、こっちの湯麺は、先ほどのお約束どおり、もちろんに著作権支払いをば」

「え!? いいよそんなのいいのありがと」

「はやっ」

我らがキャプテンは、そそと立って自分の前に来た湯麺一つを、ももの前に置いた。今、キャプテンの前には一つの湯麺がある。コーチの前には、何も無い。

「さてと」

「ぱちん。」

いただきますはもう言った。箸を割ると、どこで用意したのか、マジシヤンのように深めの取り皿を取り出した。

「ちよつ、ちよつ、ちよつ、ちよつと美緒待つて、みーちゃん、待つて――

!!」

「どうしたの？」

「今、ウチ、ものすごい嫌な事実に気がついたんやけど」

「はい？」

「みーちゃんの、ご注文は？」

「湯麺」

「ひとつ？」

「うん」

「だれかー！　だれかコーチ用の注文した人居ますかー！」
あ。

ああっ!?

「では大地君」

「ちよつ、ちよー！ そんな、そんなありなんか!? そんな脱税を節税と

言い換えるような法律の抜け道が!？」

「だってこれ、忍様に託された大切なコーチ用の湯麺だもん」

「いや、それは、せやけど、いや、あそうや、もちろん！ さっきのみーちゃんの湯麺……あー……」

「ふえ？」

時既に遅し。ももは二つのどんぶりから二種類の麺を同時にすするという至福の瞬間を味わっていた。

「もう取り返しはつかないですねえ」

タオス。この女、いつか倒す。

「せやけど！ せやけど！ せやったらあんた食べずに大ちゃんにあげたらすむ

話やん！」

ナナ、もう、半泣き。

「それじゃあ……」

美緒、余裕綽々。ぴん、と伸ばした人差し指の付け根のところに、唇を寄せてみる。

あああれこそは、太古の昔に『ぶろまいど』なる物体でよく描かれた、女性『あいどる』の媚び表情とかゆうものか。絶滅危惧種としてレッドブックに載っている。

「お仕置きに、ならないでしょ？」

ダメだ。

この人は、本物だ。

本物は……強い。

「あかん……完敗や……今日もまた、完敗や……」

「ふっふっふ。これぞ長居流兵法『ふーふー作戦ぱーと2』」

「なんかすつごいやなネーミングやなそれなんか漢字で書くと変な漢字当ててそうないするし」

「では大地君あらためて。

ふーふー、ふーふー」

「……ちよつと待って、『パート2』っちゅーことは『パート1』あんの？」

「あるよ。実行済み」

「はい!? は、はい!? え!? なに、なにそれ!？」

「ナナ……もう諦めろ……お前は頑張った、頑張ったから」

「カラちゃーん……」

泣き崩れるナナ、優しく受け止める三十六。

まだナナさんは、受け止めてくれる人が居るだけ幸せだ。そう、みんなで思いつつ、事の成り行きを、ジッと見守る。

もちろん強い人は、そんな視線など蚊が刺したほどにも感じない。いやむしろ

糠に釘。刺さった方が、茄子など色よく漬かってしまう。

ああ恋は、いとおかし。

「ふゝ、ふゝ、ふゝ、ふゝ、

はい、あ——ん」

「あ、ああー……は、はずかしいなあ、もう。

そ、そうだ、こんなことやつてる場合じゃないよな」

もう、こんなセリフに騙される、私達ではない。

「……次は指揮、頑張ろう」

ダメだ。

この人も、本物だ。

そしてやはり、本物は、強い。

ミラクルズは強いコーチに、そして強いキャプテンに率いられ、頂点を、目指す。

……率いられてるのか引きずられてるのか時々わからなく、なるんだけど。

∞

病院の廊下を、静かに走る。

勝利の報告もしたかったし、それより……仕掛けの成果が、気になった。

機嫌が良ければいいのだが。

やはり、私がいた方が良かっただろうか。ギクシャクとした時間だけが流れて、逆に気まずくなったりしてないだろうか。それより、こういう不意打ち自体、父上はお気に召さないかも……

ママを突然、病室に呼ぶ。

思いついた時はなんてナイス・アイデアかと思つたが、いざ、実行してみると、結果が不安になってきた。こじれた過去のある、一五年ぶりの男女。私が思うように、簡単に再会を喜び合うものなのだろうか。

こういう話は、苦手だった。経験もない。暗い廊下を走っていると、徐々に、不安ばかりが募つてゆく。

逆に。

より、難しくしてしまうことにならないか……

ママが相変わらずのパパに愛想を尽かすんじゃ……

病室が近づくにつれ、怖さばかりが、先走る。

——光が漏れている。そして、小さな、声がした。

「……もう、勘弁してくれ」

父の抑えた、心の底から弱り果てた、聞いたこともないような、か細く、小さく、哀しい声。

眼前が真っ暗になった。

まだママが居る。そして、とても深刻な話をパパとしている。もう、勘弁してくれと。

つぶりたくなる眼を必死に開きながら、ドアの隙間からそつと、覗いた。気配を消すのも、忘れて。

ベッドに半身を起こした父。その横の椅子に腰掛けた母の後ろ姿は、震えていた。

たまらなくなつて、飛び出そうとした。
と。

「……いやんいやんいやん、大ちゃん、いやなの！」

……へ？

「聡美のケーキ、食べて！」

「も、もう食べたじゃないか、たくさん！　わ、私が甘いものあんまりだという

のは、聡美が一番よく知ってるだろう!？」

「いや、いや、いや! 二〇cmの二つなんて、食べたうちに入んない!」

「それは聡美の基準だ。私は一切れでも辛い!」

「……聡美のケーキ……食べてくれないの?」

「そ、そんな泣きそうな顔をしても、わ、私は……う、うーん、弱ったな、じゃ、もう一口だけ、もう一口だけだぞ!」

「うん!! はい、あ~~~~ん……」

「こ、こんな大きなのは一口では」

「大ちゃん! た・べ・て!」

「う、うーむ……あ、あー……」

なんだこれは。

なんだこれわ~~~~!?

ものつそ幸せそうくな聡美ちゃんにあってもらった大拙君は、照れながら困りながらもまるで満更ではない表情で、その口を大きく開けた。あの父が、私の気配など、これっぽっちも気づいていない。

こ……これがあの、父上と母上？

ていうかあんたらいくつだ。いつ、いくら二人きりだからって、こんな、こんな恥ずかしいの、高校生でも、そう空堀君とナナちゃんでもやらない。こんな恥ずかしいの。

ああ……恋とは。

恋とはなんと……

難しい。

困惑する娘などお構いなし。燃え盛る愛のぽのーが、白い病室をピンクに焦がしまくり続けまくる。

「……おいち？」

「う、うむ」

「どちらて？」

「さ、聡美の作ったものだからな」

「う~~~~ん大ちゃん~~~~ん、大好き~~~~ん!!」

「がばー。」

「べちゃん。」

「あちゃん……」

「大ちゃんは!? 大ちゃんは!？」

「わ、私も……さ、聡美が……」

「ん? ん? ん!？」

「す、好きだ……」

「う、う~~~~ん!!!」

がばばー。

べちやちや。

あちやちやー……

『——あ、あの血が流れているのか、私には』

暗い廊下で、一人、クラクラ。

しかも片方ではない。両方揃って、なかなかのものだ。

よく考えれば父は「大ちゃん」だ。てことは私がもし、コーチとそんな風になつたら、あんな感じなのだろうか。あんな風なのか。あんなのか。

……悪くない。

ぶるぶるぶるっ!!

静かに、病室の扉を離れた。

今日はもう、そつとしておこう。

親子三人水入らず。それはこの調子なら、明日にでも明後日にでもできそうなことだった。だから今日は。

一五年ぶりの、聡美ちゃんと大拙君を、二人きりに。

愛し合う恋人同士を、二人きりに。

病室廊下を、駆け出した。

さつきよりずつと軽く、速く、楽しく。

さつきまでの悪いドキドキは、素敵な予感に彩られた、良いドキドキに変わっていた。嬉しい。楽しい。そして……

二人とも、大好き。

長い廊下を走っていると、いろんな何かが、落ちていく。

私達は、みんな、バカだった。

パパを大好きなのに一歩前に出なかったママも。

ママが大好きなのに手を差し伸べなかったパパも。

そして、二人が大好きなのに、その手を今の今まで結び合わなかった、私も。

三人は、揃って、バカだった。

でも。

それが親子の、それが家族の、証のようにも思えた。

悪い気は、しない。

病院を駆け出た。行く先は、決めてなかった。

道場で座禅か。みんなはまだ、騒いでいるだろうか。グラウンドで、汗を流すのも悪くない。

ただ、走りつづけるのも、いい。

走っている。

夜がにじんで、ゆがんだ。

長い長い時間、堪え続けてきたものが、溢れ出てきて、止まらなかった。
今日はそれを、そのままにした。

溢れ出た想いは、雫となって、落ちていく。

一粒一粒、月を星を輝かせ、落ちていく。

忍は走る。

父を、母を、仲間を想って、走り続ける。

意志の力を、腕に脚に、漲らせ。

想いの雫を、髪に瞳に、輝かせ。

孤高にたたずむその姿、人は畏れて近づかぬ。
崩れる自陣を支える巖、惑う味方を励ます光。
得るは信頼与える安堵、ここに彼女がいる限り、
勝ちはあるとも負けはない。

チームの誰もが従う声は、後ろから来る神の声。
守護神・忍の、神の声。

Never GiveUp, GoAhead, and DO MIRACLES!

「心の守護神」

【あとがき】

ありがとうございます、ながたかずひさです。

いかがでしたか？ お楽しみのただけかもしれませんか？

ミラクルズも遂にラッキ―7冊目。今回は頼れるGK、忍様のおはなしでした。

辛いように見えて、実は満たされている生活。

厳しいように見えて、実は楽しい日々。

そんなところを描きたかったのですが……どうでしょう？（泣）

最近毎回、描き終わってから「ああもつとこんなことを描いておけば」と思っています。今回なら、3年生同士の友情とか、忍と大ちゃんの絡みとか……でも、「予定通り」やらなくても、その時描きたいものを描いた方がいいかな、

とも思う昨今です。まだまだ、修行が足りません（笑）

忍サポーターの皆様には、あの独特の画面切り替えが今度はいつ・どう出てくるのか、楽しみにしていただくことでご容赦いただきたく。

次々現れる強敵達、ガンガン盛り上がる周囲の人々、ミラクルズみんなは、戸惑いながらも歩み、いや走り続けます。

笑いながら泣きながら、叫びながら楽しみながら。

これからどうぞご期待ください。

「Mimolette」 Web には「ミラクルズ！」の詳しい設定資料などあります。
ぜひ一度、ご覧ください。

<http://rakken.web/>

ご感想、お褒めの言葉お叱りの言葉ございましたら、お気軽にお声おかけください。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

です。よろしくお願いします。

最後にもう一度。

お読みいただきまして、まことにありがとうございます！

二〇〇四年一月 ながたかずひさ

:D Mimolette

Miracles! Episode 1 [no.7] - The Guardian of Heart -
Powered by Kazuhisa Nagata
web: <http://rakken.net/>
mail: nagata@mti.biglobe.ne.jp
TwitterID: KazuhisaNagata
2004.11